

川柳塔



No. 968

同人特集・私の一句
一月号

平成二十年一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷九六八号

日川協加盟

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美 研 ア ー ト

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178

FAX (06) 6372-1196

E-mail : bikenart@wonder.ocn.ne.jp

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専門メーカー



コーキ封筒株式会社

本 社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021

(日本橋川村ビル4F)

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>

謹賀新年

河内 天一笑

「お父さんはやはり川柳々々云つてるよ」は「旅人」での路郎の句。私の一年はことしも川柳を軸にたのしんだり、くるしんだりの日日はじまろうとしている。

昭和60年9月29日、西尾葉氏の喜寿金婚句碑五年の宴が新阪急ホテル紫の間で催された折の前夜祭で、寺尾俊平氏が句集「旅人」の一句目「二階を降りてどこへ行く身ぞ」に感動。「路郎が好きです」と自己紹介の席での開口一番のことばを頂いた。「旅人」はずっと私の聖書であります。二階を降りてどこへ行く身ぞは虚の瞬間の路郎自身を捉えた秀逸の一句と位置付けている。他に「嘘をまろめて書斎けうとし」は、また妻を騙してしもうたという自分への嫌悪を、「ムザく」と使える金が少し欲し」は己の負の部分を取って吐露している潔さ。その勇氣には見倣うべきものが多大だ。

橘高薫風編・構造社の川柳全集②「麻生路郎」の校了間際の夜遅く電話で「ムザく」と使える金が少し欲し」を入れたいんやがあんさんどない思う。」実はこの句、

栗主幹から「そんな貧乏くさい句やめときなはれ」と言われていたそうだが、諦め切れずに私へ深夜の電話となつた。特にこの句が好きだった私は二つ返事で「入れて下さい。」に、「よっしゃおおきに。」で決まった。又、「スピーチを考えながらテキを切り」は穿ちと諧謔凝縮された傑作だ。等等、路郎の佳作をとり上げたら切りのない事だが、これ等を書くに到つたのはあるカルチャーの生徒さんから「川柳塔の句でどんな句？」と問われた事があり、返答に困つたが新同人はじめ初心の方達なら然もありなんというところ。

川柳塔の作品に限らず川柳の概念を身に付けた後は「借り物でない自分」、つまり「地金」を吐露し続けることとがいのちある句を生む原点であろう。

(次号につづく)

自選句

まだ書いてないが賀状は買ってあり

天笑

借金の重さで溜まる年賀状

〃

突破して天真爛漫になろう

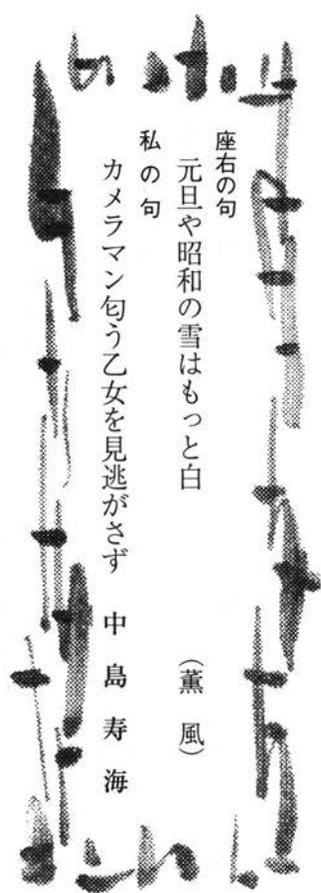
〃

締切りへ鈍感力が鍛えられ

〃

また延びる罪滅ばしのハワイ行き

〃



座右の句

元旦や昭和の雪はもつと白

(薫風)

私の句

カメラマン匂う乙女を見逃がさず 中島 寿海

川柳塔 一月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「子」

■巻頭言 謹賀新年	河内 天笑	(1)
賀状から	小島 蘭幸	(2)
川柳塔 (同人吟)	河内 天笑	(4)
川柳塔の川柳讃歌 (37)	木津川 計	(49)
自選集	西出 楓楽	(50)
水煙抄	西出 楓楽	(54)
温故知新	智子	(77)
同人特集 私の一句	智子	(78)
麻生路郎句抄	智子	(90)
川柳塔碑合祀法要	智子	(91)
愛染帖	新家 完司	(92)

賀状から

小島 蘭幸

おめでとうございます。二〇〇八年が皆様にとって素晴らしい年でありますように！懐かしい年賀状の中から十二支を詠んだ川柳を丑から順に紹介させていただきます。

八十を過ぎれば牛も振り向かず 大八
よしそれならば振り向かせてやろうという気が伝わってきます。伯峯句碑まつりでの、颯爽としたお姿が懐かしいです。

虎へ降る雨 銀箭の如くあり 薫風

賀状には「寅年の私は七度目の寅の年を迎えました。昨年は川柳塔には辛い年でした。今年も厳しい年を予測していますが、若いスタッフの力で解決して行きます」とあります。

紅い実をこっそり食べた兎の眼 富湖
駅のホームでお別れしたのが最後になった富湖さん。この句のように可愛くて、どこかピリッとした作品を多く発表されています。

ユーモアがすこしわかる龍のひげ 智子
夜市川柳大会のあと、わたしの側に來られて「わたし、蘭幸さんの披露が好きです」と言っただけの智子さん。

むつかしいことしかしない蛇使い 漢介
憧れの好作家漢介さん。蛇使いは漢介さん自

「白」……………鈴木公弘・西口いわる共選……………(96)

「願う」……………土橋はるお選……………(98)

「着物」……………佐藤古拙選……………(100)

「絵馬」……………島ひかる選……………(101)

「同人吟」……………三宅保州……………(102)

「水煙抄」……………奥田みつ子……………(104)

「川柳と絵画」……………柴原道夫……………(106)

「エッセー」……………藤井則彦……………(107)

「十二月本社句会」……………(108)

「各地柳壇(佳句地十選/岩本笑子)」……………(112)

「柳界展望」……………(127)

「一月各地句会案内」……………(164)

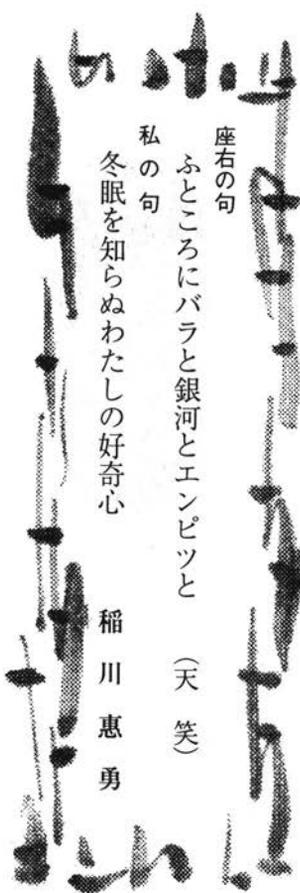
「編集後記(ひとこと/喜田准一)」……………希久子・朱夏……………(166)

座右の句

ふところにバラと銀河とエンピツと (天 笑)

私の句

冬眠を知らぬわたしの好奇心 稲川 恵 勇



身ではないかと、ずっと思っている私です。黙々と荷を引く馬の瞳のつぶら 比呂子 比呂子さんのご主人は書道の先生です。とても無口です。

ひつじ雲のようにふんわりふんわりと 完司 東奔西走、大活躍の完司さん。大らかでとてもやさしい完司さん。

ケイタイに猿の言葉がおどり出る 華乱 省略のきいた真つ赤な顔の猿が、賀状いっぱいに描かれています。昨年の大地震で家を失った華乱さん。頑張っている華乱さん。

鶏鳴に羽ばたくようにうながされ 太虚 毎年美しい賀状を届けて下さる太虚さん。大いに羽ばたいて下さい。

よるこんでいる番大をたしなめる 風柳 一昨年、柳都川柳大会のあと、風柳先生と一緒に遊覧船で、信濃川下りを楽しみました。

猪となり幻を追いかけん 天笑 目を閉じると天笑主幹の美しい歌声と、ハワイアンのメロディーが浮かんできます。側で踊っておられるのは奥様の月子さんです。

打出の小槌持っているのは野のねずみ 蘭幸 子年の私は今年満六十歳になります。昨年自由人になりました。正に一匹の野のねずみであります。

こうして書いていますと懐かしさで胸が熱くなります。川柳は本当に美しいです。

川柳塔

河内天笑選

藤井寺市 高田 美代子

花柄の服でハッピーニューイヤー

緞帳があがり今年もよろしゅうに

秒針を止めてしばらく遊びます

呱呱の声しばらくこの児主役だな

主婦というタイムカードの無い仕事

お人好しまた信用をしてもた

出雲市 森 茂美

おだやかな部落に今日は葬の列

豊作だ天地の神よありがとう

丘の上風車仲よく休んでる

麦藁帽かぶり鎌持つ奉仕の日

雨の中ボスターの人笑ってる

政治家の嘘は座興じゃ済まされぬ

藤井寺市 太田 扶美代

わたくしのダンスに欠かせないあなた

夢追いを止めたら胸の灯も消える

絶望と希望時々入れ替わる

松茸をうすく切って褒められた
バス旅行あんな夫婦になりたいな
祭りには必ずやって来るトンボ

大阪市 板東 倫子

イケメンもウザイも載せる広辞苑

消せばよいボヤキ通しで見るテレビ

大臣の友人の友人がアルカイダ

湯豆腐が急に食べたくなる時雨

派手な母と地味な娘で仲が良い

言うもんか忘れられてる誕生日

京都市 高島 啓子

ひとりぐらい頼れる人のいる憂き世

孤独癖ひとりで食べるオムライス

ひとりでは噛み砕けないこの世です

消防署ひとり暮らしを知っている

ひとりいる時にかぎって出るむかで

弱いよわいという方が生き残る

海南市 三宅保州

信心はどうあろうとも初詣で
がんばれと言われる度に萎縮する
塩を振りかけると小さくなる男
骨のない男が増えたレントゲン
満開の明日は商品価値がない
敗因は自分自身に負けたこと

堺市 村上玄也

やり過ぎるから人様に疎まれる
アンコールの声浴び調子付くマイク
甘い汁吸って麻痺した正義感
積年の膿が吹き出る老舗群
スイッチの入った舌が止まらない
忠告を通り越してのお節介

鳥取市 岸本孝子

窓叩く風がいつしか亡母の声
素颜でも美しいのに塗りたくり
ある日ふと昔の愚痴をしゃべる壁
ドナーとの半分ずつの命持つ
美しく着るマネキンにだまされる
命まで投げ出すほどの恋もした

出雲市 園山多賀子

百歳になんなんとして恥を知る
忙しいうちが花だと卒寿今
乳液を塗って労る皺の顔

会釈する唯それだけの人となり
残り火が揺れる私はまだ女
ありがとう ごめんなさいで和を醸す

西予市 黒田茂代

秋が逝く深い憂いの彩溜めて
鞆が母を泣かせた冬が来る
懐かしさと切なさ連れて来る母よ
叱らない母が一番恐かった
肖像画の母は私より若い
同じには作れぬ母の蓬餅

米子市 野坂なみ

歳かさね礼深くなる初詣で
食品の表示はみんな嘘だろう
モンゴルの大地見てから焦らない
老いても花 暮れなすむ橋渡る
ありがとうの言葉をいつも蒔いている
消えぬ灯を癒してくれる寺の門

松江市 銭山昌枝

白旗を素直に掲げて世話になる
仏より積もる話のご法要
耳搔きに溜まった噂吹き飛ばす
今ここで本音を吐くと矢が刺さる
わたくしを錯覚させた花言葉
本当のことをペラペラ喋る舌

弘前市 須郷井蛙

国会の新番付けも相撲並

インソップの森に子供の声がない

新車ですッーロックでも不安抱き

里帰りまでは待てない孫の顔

保護鳥になつて住民票を持つ

引き継いだ墓の大きさもて余し

鳥取県 石谷美恵子

赤い色着るとほんとにでる力

辛抱も限界どこで投げようか

化粧中鏡が憎いことを言う

気苦勞を汲んでもらえぬ肥満体

痛い目に合つた男が憎めない

ロボットに取りあげられた作業服

吹田市 穴吹尚士

無遠慮に人の心を刻む口

恥を知る心が退化したお顔

大阪弁にかすかに残る国訛り

おばさまが政治を語る美容院

ユーモアの感度が落ちてきた老化

世界一愛していると妻に言う

大阪市 升成好

生きるとは少し木洩れ日少し闇

かなわんなあ大阪弁で値切られた

駄目という二文字は妻のピストルだ

退屈の長さに足りぬ砂時計

アメリカに右へ右へと舵とられ

ハンカチに燃えハニカミに酔う平和

京都市 三宅満子

カラーゲンと聞けば財布のヒモゆるむ

文化の日ストラディバリに酔いしれる

犬にブランド人はバーゲン着て散歩

ねずみなど捕らずに昼寝メタボ猫

うまい芋モグラが先に味見する

お姉ちゃんのお下りを着て立つ案山子

大阪市 大川桃花

大海を泳いだ自負のある鱈

カルチャーで老いの退屈追つ払う

雪国の旅は雪降る頃がいい

酔つても胸に電卓持つ女

福もろたお方が弾むお賽銭

しゃあしゃあと言ひ訳できる歳になり

鳥取市 近藤佳子

水旨し水道水も百選よ

母在すごと甘酒に目を細め

御仏の在所夕陽に掌を合わす

酒二合また一代記はじまつた

歳のせいにして憚らぬ足と腰

さざ波は海ほおずきのひとり言

神戸市 田中 章子

今少し待つことにするいい月だ

人生に修羅は必ず用意され

昔から鉛筆削りへただった

マイバッグ笑いの種が発芽する

おやこんなどこまであるよパチンコ屋

わたしにも見えぬわたしの奥の奥

弘前市 高橋 岳水

長生きも善の一つに加えよう

日向ほこ来し方行く末など思う

独酌を重ねて募る人嫌い

墨汁だけで描き切る雪景色

雪吊りも雪待ち侘びている風情

あなたから愛という名の輻射熱

香芝市 大内 朝子

娘の奢り一番安いもの食べる

肉じゃがが上手に炊けたけどひとり

年輪のようにわたくし育たない

寒い日はときどき開ける玉手箱

そそくさとゴミ出し用の化粧する

今年こそ弱音を吐いて生きてやる

堺市 齋藤 さくら

名前だけ知る吉兆もまた偽装

レポーター離婚の話嬉しそう

愛想いい郵便局に変わってる

かあさんの声を聞くのが日課なり
お礼言うつもり電話だったはず
はた目では呑気者だと見られてる

橿原市 居谷 真理子

上品で野暮で私に気づかない

恋人がいるケータイが脈を打つ

芳醇な男と旅の話など

自問自答やはり自分に甘くなる

出し惜しみした真心が腐りだす

最期には神に好かれる顔になる

大阪市 小糸 昭子

熱い湯で瘦せた病父の背を拭く娘

何故だろう大臣の首すぐ変る

仏様今日一日は懺悔の日

宇宙では住める惑星地球だけ

気の効いたスパイス入れた演説だ

福田さん眉間の皺が深くなる

大阪市 西川 更紗

食べて寝て喋りまくったバス旅行

バスガイド湯舟も一緒超ボイン

持ち前の明るさ受けるバスガイド

肩書きがとれて雑音気にならず

不思議だな涙流さず泣いている

言い訳の度に信頼くずれ出す

唐津市 宗 水 笑

唐津市 樋 口 輝 夫

松手入れ脚立で竦む老いの足
本籍は山奥今は街の人

傍目にはきれいな富士もゴミの山
美人薄命俺の女房が気にかかる

人間にすればお日さま歳いくつ
お偉方謝罪の席に明け暮れる

逆光で見るとあんだも美しい
大臣になりそこなつた燕尾服

老いてなお勝ちにこだわるへば将棋

唐津市 坂 本 蜂 朗

二所帯をつなぐ廊下が軋みだす

唐津市 坂 本 蜂 朗

唐津市 市 丸 晴 翠

老いの脚ひよろろ子供は皆異国
老犬がもう帰ろうよ散歩道

無農薬軍配虫に上がりそう
精進の杖が支える開墾地

ONの妻の戦死が痛ましい

開けゴマ油田が欲しい過疎の町

富士山を車窓に暫し今日の幸
抽出しの仮面と尻尾つける朝

貝のうめき魚の吐息海が死ぬ
謝罪席次はどなたが座るのか

唐津市 山 口 高 明

熊本市 永 田 俊 子

誠実が何時か倅せ招き寄せ
どの表示見ても近頃嘘に見え

やさしい風びたりと止んだ金のこと
やり直し出来るヤングの勇み足

遊びなど知らぬ夫で伝書鳩

椿の花ほとりリストラされました

副作用あるとは言えぬ厚労省
番犬もお肉貰つて吠えもせず

念を押されて一呼吸する電話
悔いひとつ匙でつぶしている母

唐津市 井 上 勝 規

熊本市 高 野 宵 草

拜金に大和心は先細り
認知症のイントロらしいすぐキレル

思いやりプライバシーに拒絶され
自動ドアどつと木枯し迎えに来

友情の押し売り腹に据えかねる

補聴器を切り耳栓にして読書

呆けてないが言うこと少しズレて来た
素直さを捨てて上見て愚痴ばかり

新しい破れジーンズ着て出掛け
めでたさよ鼠が居ない鏡餅

熊本県 岩切康子

大雨で急ぐポストが遠くなる
ガソリンの値上げ肝入れまとめ買い

早朝の旅を送って再度寝る

薬効のこの身軽々万歩計

今一度やり直したい年女

シドニー 坂上 のり子

あの暑さ何だったのか初氷

あくびする猫とシヨパンを聴いている

品切れになるのも人気呼ぶ秘訣

赤福へ神の祟りが遅過ぎた

タクシーをカーナビにしてたどり着く

砂川市 大橋 政良

木枯しにリングが一つふるえてる

昭和史の穴に大きいきのご雲

古い絵の中を走っている女

妥協点その裏側に罫がある

雑記帳の余白メモやらヒントやら

黒石市 相馬 一花

ほろ酔いで捨てた恋の捨てどころ

二割引きして美人だと納得す

戦後派は鐘の鳴る丘忘れない

ご自慢の大根足で渡りぞめ

丸顔を馬面にする美容法

黒石市 佐藤 古拙

下心見抜かれぬよう傘を貸す
味のある言葉だ洞察力がある

乳母車世間はなしが尽きるまで

わだかまり気付かなかつた虫の声

若き日の鼻毛みつけた文庫本

十和田市 阿部 進

記念日を作って妻とくみかわし

天国へ届けとばかり二人は歌う

母さんに笑顔が戻りホツとする

食卓に愛は一杯あるという

嬉しい酒二人でのもんで二日酔い

平川市 小寺 花峯

毎月が誕生日です孫の数

粗大ゴミの朝が今日もやってくる

振り出しに戻る暦で忍の朝

団塊の拳が握る不発弾

慎重を自慢していた勇み足

弘前市 岡本 花匠

津軽富士 落日を背に明日を説き

風軋み今日は読書と腹決める

雪ゆきユキ負けておれぬと空元氣

風雪の脅しに耐える炬燵の輪

農やめてネズミばつこの林檎園

弘前市 高瀬霜石

雪しんしん喧嘩はやめて酒にする

銀行の利息に休日はないぞ

本当のことはなかなか伝わらぬ

大物が死んでドラマが盛り上がる

大和撫子良妻賢母絶滅種

弘前市 今 愁 女

現代のかぐやが挑む月探査

月探査水があつたら棲めるかも

月面にこんどは移住考える

ペット犬もおむつ当てがう高齢化

能弁の電話セールスかましい

弘前市 櫻庭順風

仕事見付ける願つたり叶つたり

帰心矢の如しこつそり荷を送る

荷を送り安堵で入院する無念

帰省せず主待つ荷物哀れなり

故郷の空を異境で見る無念

弘前市 福士慕情

稚魚放流海の匂いを嗅ぎ分ける

水槽の金魚ため息ばかりする

こぼれ萩妻の無口がまだ続く

日溜りでホッと一息つくトンボ

なよなよと揺れる薄の強かさ

さいたま市 八田 敏

輪台がついて漸く菊の顔

見せるほど出来のよくない菊並べ

老いの日々菊と川柳医者通い

今年出来如何と亡妻に菊供え

せめてもと遺影を菊で埋めつくす

さいたま市 星野 育子

豆腐屋のふやけたラッパ消えた路地

セザンヌを真似て果物盛っている

自分史は輝いた頃長くなる

気まぐれに立ち寄り買ったぞつき本

丁重にお断りして漫ろ寒

日高市 根岸 方子

挨拶が弾むいつもの散歩道

かわせみに遇えた日記は長くなる

休耕地アワダチソウが自己主張

先出しの意見とことん叩かれる

こんなにも心を溶かす誉めことば

柏市 永峰 宣子

肉筆の手紙に傷を癒される

到来のさんま近所へお裾分け

もてなしに一晚寝かす牛カレー

声かけて九十へ席譲らせる

バッグ好きバッグ眺めて買わされる

東京都 清原悦子

福寿草今年も春を買ってくる

逢えるまで歩き続けている小径

この際と冒険をする試着室

駅の名があたかそうで途中下車

ひとつ食べもひとつ食べている味見

東京都 岸野 あやめ

大難が小難で済む小手術

小手術にもドクターの冴えた腕

回れ右今更出来ぬ八十三

今はまあ眠って癒やす顔の傷

こんな時下戸の遺伝がうらめしい

東京都 長谷川 康子

身のまわりでできる健康残しとく

集中が切れる突然鳴る電話

ほころびに接着剤を買う夫

輕輕と急坂をゆく細い脚

バスを待つサンバのリズム取りながら

東京都 小川 賀世子

湯豆腐にしましよ今夜はよく冷える

平穩無事つづき右脳も小休止

茶碗蒸しぎんなん拾う群にいる

今日も留守傘寿の姉は翔んでます

祝傘寿祝の膳はカニづくし

国分寺市 野崎 勝

あれこれと子に荷を送る親心

さり気ない心配りが胸に効く

睨まれて意見はそつと脇へ置く

手術台乗つてようやく腹を決め

奥の手で妻に取られた主導権

武蔵野市 亀井 円女

人様を先ずは信じて生きて来た

たこ焼きはやっぱり大阪日本一

ちっぽけな心は一生治らない

自己中の私を許してくれる嫁

お年より若いとヨイシヨするお方

横浜市 菊地 政勝

貧乏がまだ抜けきれぬ迷い箸

生き方はアンチブランド見栄はらず

ポリープも身の内ならばいと嬉しい

試着する服へおなかを凹ませる

歳月のすべてを捨ててきた痴呆

横浜市 小野 句多留

飼い主を待つ捨て猫の虚ろな目

下半身不随ニホンの羅針盤

有楽町消えた昭和の青春譜

首都圏の僻地花嫁募集中

紅葉が北へ私も釣られてる

富山市 島 ひかる

息白く玉砂利踏んで逢いにゆく
ガラス越し氷雨眺めるシクラメン
パンジーの笑顔へ今日も雪しきり
矢面に立ってピリリと山椒の実
今年また山へいのちの洗濯に

可児市 鶴 留 百 合

歓声は見えた見えた富士の山
親の背を越えて態度もぞんざいに
ふる里の物産展をひと巡り
心配になる携帯の電池切れ
つぎ込んで成長株のアテはずれ

可児市 板 山 まみ子

日本で生きて良かった紅葉狩り
渋柿を干して気になる空模様
こだわりが少しずれてる義理の仲
好きなだけ食べて文句は言いにいく
灯油高一枚厚着する寒波

犬山市 関 本 かつ子

振り分けたように世話焼き一人居り
トンネルの向こうにきつといい出会い
幸せはいつも余白のない手帳
自転車降りれば元の老いの足
バッグみなひっくり返す鍵一つ

犬山市 金子 美千代

受験生みたいな気分柳誌待ち
音痴でもみんなと一緒怖くない
どうせなら踊るあほうでホイサツサ
ホスピスの友を見舞った日の時雨
この景色しみじみ生きている感謝

犬山市 吉 田 幸 子

ハミングが飛び出す今朝の予定表
夫婦共地味な趣味です引きこもり
錦秋を飾るドラマの句読点
無鉄砲に見たが緻密な旅カバン
ジュラシーが邪魔して好意ファイにした

静岡県 藺 田 獏 杏

真夜中に調合される香の素
有難い言葉呪文の繰り返し
母と子のあやとり続く小春日和
俺だけが聞いてしまった裏の裏
ざるそばを運ぶおかみの愛想良さ

尾張旭市 三 浦 き ぬ

薬飲むために三度の食事とる
来世のプランを立ててから逝こう
秋眠も暁覚えぬ老いてなお
やりかけを土産に持って行くことに
ねじれ国会政治は誰のためにある

愛知県 早川 遯行

長岡京市 山田 葉子

言う事は山ほどあるがめしにする

年金日黙って俺に従いて来い

腰痛がボクを自由にしてくれぬ

一緒では困る軒で眠れない

十万へ八万ほどが足らぬなり

京都市 榑 本 宏 子

たっぷりの余生おんなでいるつもり

パンジーが春を迎える土作り

結び目がある言いたげな蝶むすび

謎めいた存在感のあるおんな

十二ヶ月追って追われて冬の風

京都市 西 村 益 子

じいちゃんの福耳孫が譲り受け

イエスノーはつきり言って自己嫌悪

定年後微熱が続く夫婦仲

紅葉が気になり少し速回り

頂上の風とおいしにぎりめし

亀岡市 井 上 森 生

七十路の道草がまた面白い

御所ウオークはるか皇祖は風の奥

重力をバネに翔び歩く若返り(最新式ウオーク)

室町の列勇壮と絢爛と(時代祭り)

たばこには甘い悪魔の誘いの手

じゃがいもを頬張り大地噛みしめる

苦い過去今は後押ししてくれる

大阪の地下鉄ひとり乗れるもん

若いからだけですまない無神経

好きなひとふといけずしてみたくなる

大阪市 谷 口 義

二天作の五で割る遺産分け

正面に座り半分惚けている

カーテンを半分開けて日曜日

話半分その半分も聞き流す

名月を縁もゆかりもない人と

大阪市 中 井 萌

おだやかな笑顔ですばり突いてくる

間延びした話で和む差し向かい

日記には暇と書かずは無事と書く

お目当てもバーゲンまでは手を出さぬ

いやな事忘れるために昼寝する

大阪市 岩 崎 公 誠

美人酒を飲んでいるけど変化ない

菓子折りの底に何にも入れてない

歳やなあ早合点してモノ忘れ

期待値とずれの大きい通知表

満タンで鳥は北へとながい旅

大阪市 鶴田遠野

カウントダウン還曆に血が滾る
ポイ捨てに品格の無い人と知り
虚栄はる男の影が泣いている
税務署に自己申告を嘔みつかれ
節酒して微調整している命

大阪市 奥村五月

ベルト穴伸びて命は短かなる
いじめなど見たこともない蟻の列
往復を買えればあの世見たいとこ
御免ねが先に飛びだすお人良し
嫌な客どうぞどうぞと自動ドア

大阪市 中村れんげ

釘一本錆びても鉄の意志を持つ
ニユース見て秋の一日をしめくくる
そろそろと閻魔さんにもつけとどけ
ひっそりと輝くもよし花と人
瘦身がどっこいなんと白寿です

大阪市 渡部さと美

木のこぶの苦勞は老母の指に似る
坂歩く手引いてくれる甘えとく
岩手ゆく昼弁当に餅三つ
十月暖その後に風邪の刑が待つ
ポリープができてますねと女医さらり

大阪市 平嶋美智子

先行きを案じながらの無駄遣い
坪庭の南天冬の顔になり
逃げられぬお喋りさんと鉢合せ
味音痴何を食べても舌が鳴り
知らぬ顔も暖簾くぐればもう仲間

大阪市 福岡末吉

世の動きただ傍観の不甲斐なさ
生きる道雲の流れを範として
笑みこそが我が家の和楽と語り継ぐ
生返事多く氣を揉む子等の未来
意気込みは人一倍と自負しきり

大阪市 川端一步

まだ未知に挑戦したい初春の夢
じっくりと地球の明日を語ろうよ
あの夏をふつと思つたにぎりめし
美しいものの一つに児のお辞儀
十二月不良老人したくなる

大阪市 古今堂蕉子

夫婦して機先制しあいしてる
後手引かすうまい男が側にいる
ちりとてちん落語を聞こう久し振り
宮詣り笑った泣いた目をあけた
秋の雨一雨ごとに防寒着

大阪市 小谷集一

夏ばてを癒してくれる旬の味
困ったら加齢にしとく聴診器
枝豆とビールが僕のフルコース
すぐ惚れる免疫力が落ちている
プレッシャーかけて集中力上げる

大阪市 熊代菜月

退職で風の便りも遠くなり
万福寺ざわめく風に癒やされる
風が舞うおくれ毛なぶる露天風呂
しまい風呂あがれば年が明けている
除夜の鐘初心にかえる初一句

大阪市 松尾柳右子

秋晴れに洋服筆筒の整理する
一度着た思い出詰まる古着です
鼻風邪に外出ひかえ大掃除
銀行へ夫婦で行って共に出し
義理がたい夫で買物忙しく

大阪市 星野きらり

お茶する音さえ澄める静かな日
絵手紙にしました得意ではないが
嫁ぐ娘へ母から渡す預金帳
弱虫の僕を助ける酒二合
ひとり居て親子喧嘩がなつかしい

大阪市 岡本久峰

草に寝て夢育くんだ少年期
海越えてピンタに耐えた星一ツ
行軍に重い泥靴絡みつく
商人道すたれて悪に手を染める
二世議員に少し足りない粘り腰

大阪市 岩崎玲子

日常の言葉使いに出る素顔
粗衣でいて心豊かな顔をもつ
悩み事やっぱりあって人間味
手作りの小物その人語ってる
晩学に欲ばりすぎてくたびれて

大阪市 森田明子

行雲と抜きつ抜かれつして歩く
待ちわびた秋はいつでも足早に
紅葉に不意に出合った曲がり角
月面に映る地球はガラス玉
土の上歩けば土の匂いする

大阪市 近藤正

いつからか忘れてしもた休肝日
彬の碑除幕の年へ除夜の鐘
十六人家族が集う三箇日
民営化送金料が高くなり
伊勢参り赤福餅の姿なし

大阪市 神夏磯 典子

大阪市 中村 叡子

強い歯と足を下さいネズミさん
大法螺を開かせたのは初春の風
欲しいのはやさしい言葉の福袋
木枯らしをイントロにして冬の計
しっかりと捨てて探し物が減り

大阪市 井丸 昌紀

雑音がぱったり止んで眠れない
別の自分に変えるハンドル
何もかも忘れる薬探してる
余裕しやくしやく実はびつしより腋の下
習わなくても上手になった酒たばこ

大阪市 小泉 ひさ乃

教わったとおりに踊るおさげ髪
昔とった杵柄舞い終える八十路
美人ねと言わせる写真見せられる
作業場にポツンと残る泥軍手
一年の早さ年賀はがきの発売日

大阪市 川原 章久

青春の門は北支へ置いて来た
すぐ割れる恋は七色シャボン玉
副作用癌の薬がする喧嘩
群れ渡る淀川白いゆりかもめ
木屋町に秋の雨降る石畳

御苦労でしたよくも激務を給油艦
老いかしらお茶を呑んでもよく噎せる
吾が古家浴室トイレ手すりつく
恥ずかしい内部告発今美德
頭下げ老舗不祥事何とする

大阪市 榎本 日の出

ありがとうごめんなさいが潤滑油
わたくしと触れ合っているネックレス
バラの絵を飾って部屋を若くする
聞き上手に秘密すっかり打ちあけた
ゴキブリに留守を頼んだこともあり

大阪市 津守 なぎさ

口だけは達者リハビリはかどらぬ
地価高騰いやが上にもノッポビル
花ごころなばなの里の癒し旅
コスモス園無情な雨も慈雨だろう
陽に映える柿も伊賀路の風物詩

大阪市 津村 志華子

佳い年を寿ぐように澄んだ空
初ひかり浴びてわたしのシンフォニー
茜雲あすは良い日になる予感
まだ元気欲も根性も残ってる
疑えばみんな気になる食文化

大阪市 榎本舞夢

良く食べて良く寝て秋のど真ん中
答案紙早く出し過ぎ落ち着かず
引越しは鳥の巣立ちを待ってから
信じてはもらえぬ過ぎた日の恋路
客帰りとつときの菓子出し忘れ

大阪市 池上清治

役得のお手本披露する次官
消費期限のラベル毎晩貼り替える
厚生省命の名簿直隠し
地下街で迷わぬための食べ歩き
真面目だが酔えば上司にくだを巻き

大阪市 川久保睦子

眠れない夜は綾とりでもしよう
少子国サンタが四人子がひとり
祝い膳マンション静かひとり酒
国会もカポチャも内から腐り出す
神様も迷うてしまう絵馬の数

池田市 栗田久子

福だわらかついでやってきたネズミ
この味がわが家の味というおせち
集まった人の数だけ福笑い
南天の赤でことほぐ床飾り
初詣で去年の落ち葉踏みながら

茨木市 藤井正雄

糞虫の糸一本にある度胸
里帰り勝手知ったる冷蔵庫
きれいごと現場の汗に怒鳴られる
耳元にくるこつそりに金がいる
感情を押さえたぎこちない素直

和泉市 西岡洛醉

神様にすがって生きる百度石
灯明に命あずけて今日も暮れ
四季巡る国に育った果報者
文机の前で煩惱持て余す
長らえる命へ善をひとつ積み

和泉市 横山捷也

片隅の正論万座よみがえる
絵手紙に近況ですと芋と蕪
夜盗虫おまえのせいだ無農薬
手鏡は知っていそうな胸の内
妻見舞うひとときわ青い空を見て

泉佐野市 山本蛙城

大正の生れはつばつ稀少種か
コンビニと百貨で済むよい暮らし
謝罪にもコンサルタント居るなんて
銭湯の富士は裸体を見飽きたり
老舗です騙しつづけて悔いてます

大阪狭山市 矢野 梓

人が皆やさしく見える寺参り
無人駅風と改札抜けていき
プラスだけ言う約款に騙される
判読の出来ぬ自分で書いたメモ
真夜中に拾ったヒント朝に消え

交野市 森本 弘風

おじいちゃん曾孫見たけりやあと十年
四百段安土城跡のほり切り
パソコンのリセットをして疲れ果て
嫁からの花束妻の誕生日
母米寿ガンコの虫を飼っている

交野市 山川 日出子

嵐でも太陽の塔勇姿だな
皺の手がタイムカプセル友と掘る
パソコンが故郷の地図を写し出す
娘孫三人同じ干支で吉
童心の金魚すくいに癒される

河内長野市 村上 直樹

野地蔵に行き先問うて風の旅
俺お前会えば十五の雲が湧く
集まればビョーキにクスリ妻の愚痴
腹の底割ったらきつと修羅の海
妻という友とゆるゆる古稀の坂

河内長野市 山岡 富美子

年女少し背伸びをする御屠蘇
義理人情すててしまった街の冷え
品格の仮面が剥けたかにツアー
消費期限考えてると食べられぬ
夜更かしの至福に浸るミステリー

河内長野市 井上 喜醉

年金の色分けもする妻の知恵
器用さは無いが図太さ持ち合せ
秋鯖を大根おろしで手酌酒
若者が勝手に国語切り刻み
散歩する途中で好きなカラオケ屋

河内長野市 水谷 正子

平成もあつと言う間に二十年
永田町クリーニングはしましたか
税金を食べた人らのランキン
良妻の仮面外れて高軒
暇はある小春日和に金がない

河内長野市 坂上 淳司

座蒲団の角で躓き救急車
盗もうと鶉の目鷹の目師の手許
ガスに鍵はつと気付いたバスの中
はつとした後から冷汗がジワリ
三分の我慢教えたチキン麺

河内長野市 植村喜代

屋根の上吹いてるうちは寝てられる

駅も町並エレベーターにエスカレーター

二人居にデンシレンジがよく回る

匙加減知らず正直過ぎました

歳の暮れ日の暮れ淋しいものがある

岸和田市 森元 ふうみよ

同窓会年金額を探り合い

恥てなに老舗の上に胡座かき

お若いねなどと乗せられ町役員

一億が仰天啞然買う気失せ

善人を騙し続けてうつつちゃられ

岸和田市 堤 権代

松茸の売り場すぎなく通りすぎ

腹一杯食べて苦しい夢を見る

空腹の時に乗るのは体重計

リサイクルするのが好きな戦中派

少しでもお役に立てるエコしてる

岸和田市 原 さよ子

さりげなく合わす歩幅の老夫婦

フルムーンそつと手をかす坂の道

生きのびて狂う世相に胸痛む

同じだけ使う両目の度がちがい

タクシーの順番が来て雨が止む

岸和田市 土橋房枝

我が家の節を嫁に伝授の三ヶ日

姑和風 嫁洋風の節作り

もう逆転子から戴くお年玉

年玉の格差を付けて渡す父

だんだんと賀状減つたと嘆く姑

岸和田市 雪本珠子

口下手と言ってるわりに話好き

どこよりも心安らぐマイホーム

浮き雲が別れた人の顔に見え

待ち惚け冷めたコーヒーひとり飲む

遠ざかる影は追わない事にする

岸和田市 岩佐ダン吉

ひとりだが明日は多数派になろう

汗流せ遠くで母の声がする

生きるための嘘だ大目に見てやろう

不意をつかれふと善人の顔になる

屋台ひく今にみてると言っている

岸和田市 井伊東吉

選挙負けやたら与党の低姿勢

森消えてマンション灯り不夜城に

上品に食べては旨くないバーガー

病院へ行く友多し朝のバス

密談の後のコメント食い違い

岸和田市 小島笑司

後何度孫子と祝う八十路坂
三年目病む妻ベッドで祝い膳
癌検査医者の笑顔に後光射す
パソコンのマウスを握り年賀状
訃報来て名前を知った友の妻

堺市 加島由一

一番のサプリメントは発泡酒
いい恋をしている少女よく笑う
三浪で落ちたら家業継ぐと言う
見渡せば格差揺り籠から墓場
中締めで噂の二人いなくなり

堺市 山本半銭

機内食時速気にしたことがない
早めしの必要はない平和呆け
粗大ゴミ捨てる覚悟に手間取って
道連れは退屈ほどの人が良い
早過ぎた別れと思う御命日

堺市 柿花和夫

ご無沙汰を嘘でつくりうり帰る
台風が逸れたと言って午前様
談合を値踏みしている床柱
どん底で性善説にさようなら
熟れすぎたバナナにも似た愛が邪魔

堺市 石堂潤子

引き戻した命燦燦退院す
手術終えたと我呼ぶ医師の顔おぼろ
髪剃って出家に非ずなり手術
コスモスの揺れは八方美人めき
ほがらかに要らぬ氣遣いはかりする

堺市 志田千代

寝正月決めこんでたら風邪ひいた
養殖の鯛はタイでも猫またぎ
五日目で一升瓶は底をつく
遺失物届ける前に届いてた
足代と思えば安い電話代

堺市 奥時雄

疎開地で大阪弁を馬鹿にされ
疎開地で蛇を掴んで認められ
校庭で作った芋はどうなった
軍服で陛下と並ぶマツカーサー
九条はかまと娘にも見える

堺市 源田八千代

史跡巡りチンチン電車久し振り
妙国寺の蘇鉄の哀れ沁みる秋
柿と栗宅配便も秋の色
日替りで偽装隠蔽露顕する
消費期限気にする夫未だ元氣

堺市西村りつえ

ありがとうに疲れ吹つ飛ぶボランティア

話し下手も会釈忘れぬ片えくぼ

スピーチで名前とちつた披露宴

頼もしい生き字引だがすり切れる

すぎ焼もシニア二人に煮えつまり

堺市宮本かりん

初日の出やはりビルから顔を出し

まあまあのお出来とにんまりするおせち

大自然の力英知も及ばない

二人寄つて半人前になってきた

足早に二十四時間今日も過ぎ

堺市矢倉五月

他人めく新しい姓娘の賀状

本年も仲良くしよう電子辞書

今年こそ新設したい秘密基地

育てたら大きくなつた青い鳥

嘘は下手お世辞も下手なお父さん

堺市和田つづや

老妻が女を残す白髪染め

叱り方にも上役の才を見る

人生は頑張らないで感謝する

誰もする失敗だからよりくさる

冬蝶よ闘いきつたよね僕等

堺市近藤豊子

うっとりと寄席の手品をみています

繁昌亭見知らぬひとにアメモらう

ちようちんといっしょに笑う繁昌亭

天満天神祭りの花火へ天守閣

昭和九年創業らしい喫茶店

四條暖市吉岡修

問題は見えない壁の正体だ

ほがらかな顔で人畜無害です

金はない運否天賦の出たところ

影の奴味方のような顔してる

結局は似た者同士落着いた

吹田市大谷篤子

寂しさの底ですこうし泣いてみる

そこそこにパソコンできて筆不精

筋書きの通りに育ち反抗期

身に合つた風を泳いでいまの場所

主治医にはいつでもメモを持って行く

吹田市太田昭

旅終えて妻は米研ぐ顔になる

存在を認めてくれる自動ドア

噂の出どこ寂しい母に辿り着く

懺悔したあとで仏と酌み交わす

風が止み自分に戻る風見鶏

吹田市 野下之男

吹田市 須磨活恵

本気かと大連立に聞いてみる
拗ねてみてみんなの思い試してる
忍の字がはち切れそうな年が明け
タイ国で韓国人に物言われ
女房の肩越しに見る美女の顔

吹田市 木下敏子

乗り越えたでこぼこ道を振り返る
脳味噌に七味振り掛け七十路
忍の字を握って登る老いの坂
マイペース平等にみな年を取り
小春日の庭で心も蝶になる

吹田市 山本希久子

元旦はゆっくり明けてゆらり暮れ
十二支の先頭を行く知恵ねずみ
初鏡美醜は問わぬことにする
変化球投げて余生を楽しもう
冬の童話に美しく陽が落ちる

吹田市 瀬戸まさよ

月天心人それぞれに思いあり
旬はいつ姿変らぬ夏野菜
薄味に誇りと旨み京料理
よく生きた八十の顔に幻滅
老人力行きつく先は鈍感力

十二月せわしい風が吹いて来る
捨て切れぬものと暮して十二月
ふるさとは越前今ごろ蟹の時期
ちさい夢種火大事に春を待つ
長生きのヒントあれこれ聞き齧じる

吹田市 早川清生

大阪に太つちよ鼠似合う地下
北風へ噂を紛らせたは私
本は借ることになっている縄のれん
子を生まん地球に異変つづく中
持病いくつそれぞれが過去語る歳

高石市 浅野房子

何もかも中途半端のまま逝くか
負け犬の遠吠え誰も来てくれぬ
遠出には声もかからぬとは僻み
見納めになるかも知れぬ紅葉狩り
テーマから外れて話は盛り上る

高槻市 富田美義

以下同文その人生に食い下がる
ゴミ袋の中にハッキリ格差見え
人間に揉まれ鈍感力だけは
明日狙う男は荷物おろさない
煽てられ妻の港に繋がれる

高槻市 左右田 泰雄

ぎこちない愛を囁くカタカナ語
ごめんねと一言言えばすむものを
次々と余罪が浮かぶしたたかかさ
結局は妻にまかせる尻ぬぐい
マウンドのエースの顔に自負を見る

高槻市 生田 義一

妻癒えて台所にも笑み戻る
二次会の誘い断わる不甲斐なさ
天高く僕も肥えたい秋日和
散歩道お早うだけの友が増え
俺流でトップを極め宙に舞う

高槻市 大崎 侑子

欲の目で比べて悩み一つ増え
値踏みする目で形見分け見比べる
終つたと拍手したのにまだ歌い
ライバルが受ける拍手は義理ならず
割引きに性懲りもなく無駄遣い

高槻市 指宿 千枝子

秋日和亀はのんびり甲羅干し
釣糸はお昼寝らしい秋日和
うかうかと妻に無駄口言えません
掃除機にみんな吸わせる嫌なこと
吠えるだけ吠えたら胸がすつとした

高槻市 井上 照子

ひとつ嘘ついて深みで道探す
問いつめて思わぬ深い傷を負う
よく回る舌が偽善者らしく見え
糸切り歯もう役立たぬ義歯となり
負けること慣れて平気な顔でいる

高槻市 峯村 勲弘

おふくろの味にやっぱり帰りつく
探します妻が好みの旅プラン
飲む薬披露し合った同級会
ピンチだと言わずチャンスと受け止める
密室で改革進めけつまずき

高槻市 執行 稲子

捨てた皿引越し先でまた求め
脱毛症慰められた医師の笑み
背な押され嫁と登った宮詣り
ぷつぷつとたこ糸切れた風來坊
羅漢さん素敵に画いて友は逝き

高槻市 佐甲 昭二

戸惑った返事ポストに落ちる音
ひとつ屋根心寄せたり離れたり
ふるさとの橋のたもとで仮面脱ぐ
わいわいと来て淋しさを置いて行く
責めるのは止そう若気の勇み足

高槻市 杉本義昭

柿が熟れ甘さが溶けて亡母想う
いい加減結婚なさいと母が説く
聞き上手そんなあなたが説き起こす
手抜きするコツを覚えた三年目
宮崎産トマトにもある知事の顔

高槻市 乙倉武史

お月さまスッピン撮られ恥かしや
サンマ豊漁朗報うれし台所
砂丘旅紫らつきよは花盛り
大相撲人気ガタ落ち客の入り
継続は力五千歩日課なる

高槻市 西谷治三郎

辻斬りが復活しました日本国
遺憾です起立礼してハイ終わり
介護士の美談掲載他は手抜き
遠慮なく値上げ放題医と福祉
老人力おだてんといて年寄りを

高槻市 傍島克治

こいさんの呼び名なつかしドラマ観る
還暦の頃の元気をなつかしむ
飼主よりも疑った衣装のお犬様
疑い深い男で恋が進まない
高層ビルで民の籠が見えにくい

豊中市 吉田あずき

次世代と満足感が違い過ぎ
シングルライフやがて墨絵になってゆく
人間に侵され河は疲れてる
自画像は書かぬおまかせして眠る
生かされる残り時間の空回り

豊中市 安藤寿美子

何度目の子年か勘定しています
パソコンのマウスにあんたの年やでと
生まれた地そのまま生きる蛙です
知り人の居ぬふるさとになっている
この家の外に居場所はありません

豊中市 山門タミ

七十年今も伴侶の広辞苑
雲が邪魔今宵も月と語りた
音痴でもチエミのさのさ口ずさみ
満月も苦しむ地球見て嘆く
アルバムの四季の移ろい亡夫といふ

豊中市 坂上高栄

空澄みて豊年満作祭り笛
人里に熊冬眠の腹ごしらえ
温暖化自然のサイクル狂いだす
防衛省遊び疲れたトップの座
車椅子路の悪さを思い知る

豊中市 岸田 知香子

年女悔い残さずの時すごす
店の顔引くに引かれぬ年女
年女ネズミの客と握手する
年女今年もきつと動きづめ
今生の最後を飾る年女

豊中市 水野 黒兔

新鮮な野菜甘いとほめられる
胃の中で踊るバリウム癌検査
分厘の下を教わる利子の率
ふる里は木曾名水で飼う金魚
酔うほどにすぐ監督になる茶の間

豊中市 藤井 則彦

深爪にまた悔いている秋夜長
カタカナ語をあわてて習う帰国子女
出し抜けに重い空気を裂くくしゃみ
折角の迷路をすつと出て虚し
隣席にもメールで依頼する職場

豊中市 江見 見清

ひと言を嫁に言うては悔いている
カロリーとうまさと量の三つ巴
目と口を社交的だと思ふ鼻
裏切りか正義か偽装ばらされる
税金でまかなう税の無駄遣い

富田林市 大橋 鐘造

人情も何処吹く風と都市砂漠
夢一つ抱いて走って来た命
転んでも走る男の顔の艶
喜びに変える我慢の道歩く
客席の欠伸で判る今日の出来

富田林市 稲川 恵勇

すんなりと吐けばと妻にすごまれる
喝采を浴びてあの世へ行くつもり
野心ムズムズどしゃ降りの中突っ走る
じいちゃんが赤いパジェロを乗りまわす
移り香のシヤネルが呼んだ妻の乱

富田林市 片岡 智恵子

繰り返す老舗の嘘のてんこもり
比内鶏湯気の向こうの笑み曇る
弁解の数だけ冷えてゆくこころ
変声期孫がすこうし遠くなる
生き方を変えよう夕陽まっかつか

寝屋川市 森 茜

おいしいと涙ぐんでる激辛カレー
骨密度検査中です蜘蛛走る
分相応 歳相応の文机
白い腹見せごきげんに飛ぶ鵲
冷蔵庫の隅に目薬化粧水

寝屋川市 平松 かすみ

寝屋川市 籠島 恵子

若かった体内年齢がとう

タイムサーピス飛び付く癖が直ったよ

好物のお茄子年中あつてよし

耳掃除温かだった母の膝

スキップもたまにしてみるおばあちゃん

寝屋川市 江口 度

クイズ解くまでは鉛筆にぎつてた

ゆつくりと歩くと鞆落しそう

とびら開け速達便が着きました

三時の時計見るとお菓子が欲しくなり

煙草買う時だけ外出したくなる

寝屋川市 太田 とし子

酒の肴失敗談で安上り

元気が取柄朝は味噌汁夜はチュー

明日の風どちら向いても千鳥足

お年玉添えてもらった屠蘇の膳

誕生日忘れてくれた思いやり

寝屋川市 富山 ルイ子

まああるい輪うれしい同居十五年

これからはお荷物同居十五年

年のせい眩暈炎暑の置き土産

これからを考える喜寿目の前で

ありがとうありがとうまだ言い足りぬ

満月や急かされながら駅にゆく

晩秋やまた約束を反故にされ

まぼろしをまた見てしまう夕まぐれ

酸欠の中で迷つてなどおれぬ

初冬なり青いレモンを二つ買う

羽曳野市 吉川 寿美

うかつにも影を忘れて森を出た

オブラートに包んだ本音透けて見え

回忌膳そこのこなに亡母が居る

何気なく言つた言葉に蹴躓く

自尊心という厄介なもの捨てられず

羽曳野市 酒井 一壺

満ち足りて大事な命軽んじる

仮りの世へ償い切れぬ罪残す

ネクタイを締めていたので騙される

信じてる言われてからは油断する

無一文だけど魂持つている

羽曳野市 三好 専平

だんだんと匂いに慣れてゆく怖さ

どん底に生きて摂生強いられる

許すことできぬ自分を酒に投げ

野に悪を放つ規制の緩和策

ハケンかとホームレスにもバカにされ

羽曳野市 安芸田 泰子

即答はなかつたけれど脈はある
一人居の暮しルーズな持ち時間
陽が沈むそれから先にある孤独
しのび寄る老いへ歩幅が狭くなる
生きるため食べた野草が今グルメ

羽曳野市 徳山 みつこ

モナリザの笑み胸の内見えずとも
ハウス出た途端いちごの大きくしゃみ
カニの旅やめてわが家の鍋囲む
親よりも先に逝つてはなりませぬ
エンヤコラこの国かわりそうにない

羽曳野市 永田 章司

なけなしの財布にひそむ宝篋
煙草やめメタボリ怖いバンド穴
後輩の昇格祝い白けてる
ツーショットピンボケにする嫉妬心
好奇心萎えて自分の老い悟る

阪南市 森村 美花

日溜りの温さに気持まるくなる
電話口陽気な声に救われる
予定表キャンセルしてという身体
ふぐ鍋がすべて満たしてくれました
午後のお茶すつと立つのは夫です

東大阪市 佐々木 満作

繁昌亭笑いの福を得て帰る
生まれつき器用貧乏つきまとう
振り向けば人生ずつと回り道
部下のミス庇う上司のあたたか味
靴底に喜怒哀楽が埋まつてる

東大阪市 北村 賢子

今年また迎えた誕生日に感謝
永らえたいころろの中にある炎
薬一本あつて人生変えられる
垂れこめた雲の向こうに青い空
木枯らしへほっこりぬくい窓明かり

東大阪市 笠井 欣子

老いたのか一步下つて妥協する
遊ばせてもらえる老いも淋し影
外出はスーパードけで日が暮れる
駆け抜けた歳月想う足の萎え
スリッパがみんな二階へお引越し

東大阪市 安永 春

ユニセフへ役に立ちたい古切手
遠距離の恋実らせてハネムーン
ふる里の兄弟天国へ疎開
気まぐれな女に未練などはない
明日までの奴だあつさりグッドバイ

東大阪市 中岡 妙

冬の蚊が必死に生きて纏いつく

飲めないが楽しむ法は知っている

騒音にされた子供の声が消え

休日に予定何にも無い軽さ

親切な人の意見は無視出来ず

東大阪市 米田 水昇

送迎バス園児の声があふれてる

十五夜の月にうさぎを見つける子

姿勢よくしよりりようバツタ成仏す

手羽先を炊いてたつぷりカラーゲン

声あげて音がひろがるしまい風呂

枚方市 森本 節子

紅葉に少し早過ぎ勝尾寺

ざるそばが鴨ならばへと変わる秋

ほくほくのいもを食べては蜜柑むき

十一月けな気に咲いた月下美人

気をつけてというだけのケータイ持つ

枚方市 丹後屋 肇

予定日を過ぎてても兆す沙汰がない

自販機が諭吉と一葉袖にする

駅前でもた百円の傘を買う

山頂の寝袋が見る天の川

十三夜ピルの隙間に金の色

枚方市 二宮 山久

紅葉をもとめて妻の手弁当

鉢植の実りの秋をおすそわけ

宅急便届いて秋をかみしめる

西国の醍醐めぐりに老いはまだ

新幹線乗り継ぎ孫の運動会

枚方市 伊達 郁夫

お笑いの若手の裏の怖い顔

一枚の葉書が明日の戸を叩く

握る手を離してくれぬ見舞席

惜別のホームに影を置いてくる

崩れても同じ味出す冷奴

枚方市 寺川 弘一

おふくろの味はオンリーワンの味

幸せで続く微熱が心地よい

幸せはメトロノームが同じ妻

正しく生きるそれが一番難しい

もつれたままで切ろうとしない赤い糸

枚方市 海老池 洋

翼龍になりたい子らの風の丘

派閥復活やっぱり歴史繰り返す

月下美人あつまり閉じる夢一夜

テレビ討論僕もひと言いいとなる

時どきは妻へも感謝しておこう

藤井寺市 中島志洋

三世代卒寿囲んで祝う膳
円満な家がお好きな福の神
三浪が梯子している初詣で
新調の晴れ着気にして鍋料理
上見れば切りなし今の幸でよい

藤井寺市 若松雅枝

父さんの背広で案山子威張ってる
集まって抹茶いただく菊の庭
父母祖父母集めて僕の七五三
娘のエプロン刺繍にフリルドレス並み
洗面所大事な入れ歯置き忘れ

藤井寺市 鈴木いさお

筋書きの無い一日を今日もゆく
三食を二食にしても酒は飲む
ふる里の方へ枕を向けて寝る
正直な人だジョーカー引いた顔
肝臓が二合までならいいと言う

藤井寺市 鴨谷瑠美子

幸せへ行きつくまでの遠まわり
お喋りと無口どちらもお友達
紅葉の中ごま豆腐お土産に
アホやなあ言い合うひとが温かい
歩道橋夕陽と風と万歩計

箕面市 広島巴子

初夢の七福神に手を合わす
鏡餅食べあやかった布袋腹
大国の打出の小槌我が名書く
恵比須顔いただき励むポランティア
願いすぎ弁財天に待ったされ

守口市 井上桂作

薬害の肝炎たもおき去りに
地球人救えのゴアに平和賞
鹿児島の冤罪ついに提訴され
秋たつや今年は夏の半袖で
女郎花その名の通りたおやかさ

八尾市 高杉千歩

としまの儀式で終わる祝い膳
パソコンの賀状ですが三百枚
アパ地下でひとり暮しを忘れてる
呑み屋から冥土の人へサービス券
高層の街にゴジラのような雲

八尾市 村上ミツ子

NOVAうさぎ立派な社長室で泣く
ただ歩くそれだけで道出来るんだ
がんばるといふ看板はかけてない
言い訳の下手な男を好きになる
口だけはふしぎなくらい元気です

八尾市 宮崎 シマ子

箸ならばもつとおいしいフルコース
小春日を手話の子笑いこけながら
お弾き初めやっぱり下手な母の三味
暮からの修羅抱いたまま初詣で
悪友が一本提げてくる年始

八尾市 生嶋 ますみ

ジンゲルベル街はひかりの海となる
黒豆のふつくら煮えて除夜の鐘
おいしいと言ってくれはる人が居ず
裏はない見られたままが私です
いい距離によくできた嫁いてくれる

八尾市 吉村 一風

きつといい事あると信じて生きている
前向きに笑顔忘れぬ余生なり
思いきり笑って今日の垢捨てて
太陽の愛ならなんぼでもほしい
幸せの物差し少し下げて生き

大阪府 米澤 俣子

しあわせは新米たけるいい匂い
言い訳が過ぎて男の格下げる
アラジンのランプ介護の手に欲しい
亡き友へみんなで歌う千の風
減り張りのある話しぶり心引く

大阪府 澤田 和重

Uターン静けさだけが宝物
貫禄をつける贅肉もて余す
死ぬ時はひとりと思う淋しい日
アリバイが完璧すぎて疑われ
耐えましたそんな夫婦の金婚日

大阪府 初山 隆盛

川柳へまず一献のおめでとう
川柳をサプリメントに旅つづく
高飛車に寂しがり屋は打つてでる
こうのとり飛んで田園よみがえる
傷心をやさしく舐めてくれた風

大阪府 桑田 ゆきの

茶番劇奈落の水は冷めた過ぎ
繋がって寺領神域もみじする
虫食いで満足してる自家野菜
頬被り解けば風向き和らいだ
ひたすらに毛糸編んでる恋心

大阪府 野田 栄呼

一病へまた一病がせめぎ合う
慣れが呼ぶ悪事重ねてぬくぬくと
イヤホンかけて勉強二刀流
元気度を少し残して日々多忙
底厚の靴は二十をダイエツト

神戸市 山田 婦美子

少子化の世に内孫が五人いる
猫の手も借りたいほどの食事時
背くらべさえも出来ない一人っ子
親の愛に疲れて外へ出る子供
鎧になれる子供がいなくなる

神戸市 池田 善守

来年へ意欲の証日記買う
偽偽偽今年の漢字きまりです
衣替え紅葉の服に雪帽子
年とれど笑顔に勝る化粧なし
得手不得手あつて私の味が出来

神戸市 木村 貴代子

家一軒こんな物があつたとは
暴走族ねむれぬ夜のなぐさめに
話す事なければ声は小さくなる
もらわれた犬にいそいそ会いに行く
八十歳まだまだ若いと卒寿言う

神戸市 山口 光久

とりあえずお目が高いと褒めてやる
大粒の涙に人は惑わされ
小粒でもぴりりと辛い人が好き
デパートで買い叩いてるおばあちゃん
筋道を立てた御仁は蚊帳の外

神戸市 山口 美穂

マニユアルはないけど亡母がしたように
エルニーニョ解説聞いても分りかね
お隣の夕餉の香りが今晩は
それなりに楽しみましたけち旅行
賞味期限昔は母の鼻と舌

神戸市 伊勢田 毅

雑炊で見事締めてる鍋奉行
エピソードのひとつや二つ父が持つ
三面から漏れた昨日の事件事故
上げ底も肩身が狭い伊勢土産
信号の青が続いた検診日

神戸市 両川 無限

何を見たか双眼鏡が動かない
夢をもて夢を見るなど叱られる
怒ったら怒り返えして来た鏡
献立に迷ったんだねまたおでん
身長は柱で計るものでした

相生市 中塚 礎石

ずる休み伯父叔母殺す公務員
風邪理由たくみに抜ける義理の席
持ち歌を先手とられて酒とする
犬の糞処理の道具は派手に持ち
お守りを腰にぶら下げ杖をつき

芦屋市 黒田能子

ベテランの指先力抜けている
年金という財産を持っている
笑うのが薬血圧下がりに出す
救急車街の停滞すり抜ける
笑って話せばあっさり済んだこと

尼崎市 軸丸勝巳

自転車を磨いて乗るか原油高
鉛一つすぐに溶け合うバスツアー
金木犀鼻が散歩の足を止め
嬉しすぎ笑いたいの泣けてくる
大会に日当ですと一句抜け

尼崎市 春城年代

娘が二人里の大事に駆けつける
遠慮いらぬ娘に老母頼り切る
友あまた鬼籍に入るとおい空
昔の唄を長女と夜の更けるまで
カタカナ語解ったような素振りする

尼崎市 春城 武庫坊

二人米寿に氏神の加護ありがたい
西暦しも二桁目指し生き抜こう
颯爽と歩くと風がついて来る
干支頭今年の日本どう変える
元日生れの米寿すっかり生き抜こう

尼崎市 林昭三

半日を長く感じた良い返事
冗談で始まり本気でさようなら
孫が来た世間話の周波数
セクハラの疑い晴れる専用車
苦勞人諭え話にヒントあり

尼崎市 山田耕治

ポストに落ちて心定まる
趣味はと聞けば馬の格好
蝶の羽根曳く蟻のお祭り
この子と呼んでチョッキ着た犬
シャツ着てる間にハイ次の方

尼崎市 長浜美籠

常連が店番をする喫茶店
ずっこけてふっと変った風の彩
口実を捜し倦ねて咳をする
もくろみがあつてオデンを奢られる
流行語覚えた時はもう遅い

伊丹市 山崎君子

宅急便新米マツタケ秋くれる
焼松茸亡母懐かしい好い香り
立秋と言いたいような今日立冬
ホスピスにパイプオルガン午後三時
胡蝶蘭ゆつくり開花窓明り

川西市 米原雪子

七転び八起きした幸身に染みる
旅仕度何度も開けて見るカバン
月冴えて明日大会に賭ける夢
流行を追わぬつもりがバッグ増え
頬の肉おなかへ移動したらしい

川西市 西内朋月

他人の子叱って親に睨まれる
お早ようと挨拶してはお昼すぎ
早すぎる友の訃報を聞かされる
痛む足庇って腰が怒りだし
退屈が満席にするパチンコ屋

三田市 北野哲男

懐が温いと腰が落ちつかぬ
肥えるのに喉とおなか鳴るのです
コロの名も味も忘れた関東煮
ユートピア都会にあると信じてた
傍らに煩い人が居ず淋し

三田市 久保田千代

秋晴れて地球の麓冬支度
水澄んで山は静かに冬を着る
平静になって涙の訳語り
加齢して田舎暮しが気にかかる
いら立ちを収めてくれる母の海

三田市 堀正和

旬野菜レシビもつけて売っている
近頃は動く歩道も歩かない
バーゲンになれば淑女の仮面脱ぐ
薬から毒へと変る三次会
夕陽よりカニを求める旅ごころ

三田市 石原歳子

顔色が気になり紅をさしてみる
欲しいのに遠慮する孫抱きしめる
丸くなるどころか少し角が出来
冬晴れに洗濯物も日向ぼこ
飛んできたバツタが胸でブローチに

西宮市 坪井孝一

父さんの愛の賛歌はおかしいか
惚れる惚ける同じ一字が迷わせる
アカサタナ字典が性に合っている
コーヒー挽く鄙びた店のモダンジャズ
休肝日忘れ懺悔の竹を踏む

西宮市 西口いわゑ

蒼天にビルがつんつん競い合う
振り返る暇などはない明日がくる
逆転という空間に弾みつけ
宝物のように松茸手のひらに
いわし雲遠いロマンス思い出し

西宮市 亀岡 哲子

土の道続く街です亡母恋し
二泊三日笑い続けた姉妹旅
松茸はないがたっぷり茸鍋
家族皆無粋一人のむかご煮る
窓開かぬ特急列車秋惜しむ

西宮市 片山 忠

若者で混んでる駅のエレベーター
親切の裏まで読んだ悪い癖
嫁よりも職が無いのが恥ずかしい
女房をくさす男の腐りかけ
子供には知られたくない舞台裏

西宮市 秋元 てる

実りある一生だったと思いたい
今年もまた行けると決めて旅の本
杖なしで歩けるうちと今日も出る
吹っ切れたらし友の句が軽くなり
思い切り捨てたつもりが二三枚

西宮市 菊池 トミエ

不器用に手も口も出すお人好し
懐メロに甘い時間を巻戻す
甘かった平均寿命また延びる
刺を持つばら現実は甘くない
老い楽し余命知らずのズック靴

西宮市 井上 松煙

平凡にゆったり過ごす初暦
怒るのも阿呆くさくなる老夫婦
寂しさを忙しげにして隠してる
親類の揃うことなく時流れ
夕焼けに今日の迷いを放り込み

西宮市 牧 潤 富喜子

お父さんの好物だった伊勢のもち
花束を二度も頂く喜寿の年
手にさげた亡友の形見と行く高野
連らなつた人ら高野の香の中
また秋に来たいと思う高野山

西宮市 山本 義子

ふるさとのことはからりと想うべし
紅葉の季節わがふるさとに寒霞溪
ふるさとに本音建前しのぎ合う
ふるさとの月美しくあられかし
ここだけの話ふるさとわずらわし

西宮市 緒方 美津子

一人居に友は百人力である
吊り皮に今日の疲れを見破られ
おばさんに真似をさせない長ブーツ
素うどんの好きな夫と出かけない
ついに妻メガネあちこち置きだした

姫路市 古川 奮 水

レトルトのカレーで旦那お留守番

自惚れた選手の試合期待せぬ

優しさの言葉に涙もろくなる

ハネムーンべつたり溶けて機内食

初詣で猫じゃらし揺れ古都の坂

奈良市 米田 恭 昌

鳥がらのようでもパパは太っ腹

新妻が窓から見せる手信号

面子かまわず総理が退いたサブライズ

相撲部屋かわいがられていた遺体

正月も妻エプロンのこまねずみ

奈良市 天正 千 梢

今日も暮れ精いっぱい夢芝居

手を握るだけで別れたためがね橋

宝物拾ったように深夜便

私の無力さを知る神の前

鳥海の神に再び手をあわせ

生駒市 飛 永 ぶりこ

思いきり翼一文字書き初めに

朱雀門子年の凧が飛翔する

ちひろ展思わず笑みが洩れる渦

やさしそうに見えて死角に棘があり

やわらかい微笑がにゅっと鬼女の面

檀原市 安土 理 恵

晩学のはじめ大学ノート買う

ささやかなときめきノートおろすとき

先頭はもみじマークで長い列

歩きましようここは車も通らない

初恋の痛みものこる古手紙

大和郡山市 坊 農 柳 弘

道楽の域は越さない庭いじり

ナナカマド朱の一滴にある憂い

書き留めるほどのものなし除夜の鐘

鈴を振る巫女のすり足初神楽

外面はおもろい主人恐妻家

奈良県 渡 辺 富 子

色褪せた夢を弾ます草紅葉

紅一点ピンクの波紋できている

神前の誓いを妻は忘れない

向き合って他人と思う皿の音

辛酸をなめた男に人間味

和歌山市 福 井 桂 香

何と見事な海鵬関の底力

証人喚問苦しい返答が続く

左マヒ字も真つすぐに書けません

十三夜メロンパンのような青い月

好奇心いっぱいあってまだ死ねぬ

和歌山市 福本英子

和歌山市 玉置当代

借金もローンも無いが生きている
長電話暫く来ない秋深む

口だけは達者で頼りない手足
ダイケアのお迎え母の厚化粧

深呼吸して腹の虫なだめとく

和歌山市 古久保和子

私のシツポを踏んだのはアナタ

気に入らぬ男へ削除キー叩く

カタカナが昭和の耳を攻めてくる

日本語の知らぬ南瓜煮る冬至

三角座りして夕焼けに溶けていく

和歌山市 楠見章子

紅さただけで背筋が伸びてくる

何なのさ冬が来るのにサングラス

これからは量より質という幹事

何もかも忘れてしもた大欠伸

家族いっばい欲しいと思う秋の宵

和歌山市 田中みね

みやげ話をえてハワイのチョコレート

たまに贅沢こん夜松茸国産よ

臨時収入はいりニヤケて来て困る

あの方でも読めぬ漢字があると知る

年金額できれば倍にしてほしい

秋晴れに力いっばい鍬振う

レッドカード切られそうです悪妻で

天高く団子に惹かれ紅葉狩り

密室の囁きに酔う観覧車

伯父叔母が元気な母の一周忌

和歌山市 武本碧

刺のある言葉奥歯で噛みくだく

愛憎のはざまで揺れる泣きほくろ

人並みの幸せへ振る神の鈴

抱きしめて閉じた心を開かせる

娘ら嫁ぎ二人の鍋が大き過ぎ

和歌山市 喜田准一

品格のある本だから積んで置く

許せないことも保身で目を瞑る

激しさと謙虚さ兼ねた花に会う

無記名にすれば流れが速くなる

葉の裏に隠れた虫は追わぬこと

和歌山市 松尾和香

道半ば背中を押しした影法師

シンブルに匂の味盛る和食好き

銭湯に昔話を聞きにゆく

檀尻の屋根に若衆リズムミカル
回覧板地域の絆印押す

和歌山市 宮本三喜夫

子供たち死を急ぐのはわからぬ
口利きに妻連れゴルフ偽名とか
偽装して老舗赤福墓穴掘る
コンビニは強盗多発怖いとこ
罪のない子をあやめるとは許せない

海南省 堂上泰女

娘叱つて孫の反撃くらつてる
カタツムリの触角孫の感動もん
医者帰りデパートで買うニューモード
お隣の嫁さんうちに来て欲しい
大型テレビで北の大地の紅葉狩り

鳥取市 植田一京

一応は今年の手定立てておく
君を抜くバイタリティーが足りませぬ
化粧して少しパワーをつけてみる
毎日が旅だと思ふ人生よ
ときめきもまだまだあつて生きられる

鳥取市 岸本宏章

海渡る鳥に迷いはないだろう
炭で焼くサンマを猫が不思議がる
欲のない人は大きな損をせぬ
曲り角そこにもチャンス落ちている
世の中に少し甘えて生きている

鳥取市 武田帆雀

高枝切りバサミで首が危うし
風評に煙幕張つて強い寡婦
騙されてよかつた強い葦になる
ネクタイをしてない人がうちのパパ
寝てる間に運んでくれた代行車

鳥取市 有沢せつ子

澄んだ目のねずみと出合う三が日
雨の音BGMにして眠る
美人でもおまけはしない販売機
聞き役のはずがうっかり喋り過ぎ
十三夜秋はしみじみ心澄む

鳥取市 録沢風花

少々は無理して若い風に会う
得心がゆくまで辞書を繰る夜長
大会の疲れを月に癒される
心まで覗かれそうなレントゲン
紅葉がはらはら秋を舞い終える

鳥取市 富山檳榔樹

来る春を届けてくれた土筆んぼ
男一匹まごころ取り柄世を渡る
僻むならまごころ碎け消えてゆく
彼の胸軽くたたけばいい響き
行き届く妻へ感謝の日日つづく

鳥取市 西川 和子

ほんとうは真心ほしい引き籠り

父の背をちゃんと見ていた子供達

金金金情け何処かに置き忘れ

泣き事に乗って身ぐるみ剥がされる

すき放題まごころまでも踏み躪る

鳥取市 池原 天馬

渦潮をガラスの下で見ると怖さ

やはり日本は山また山の国である

すこしばかりの田畑を荒らし父母に詫ぶ

掃除機でカメ虫をとりかえりうち

胃カメラで体の中の不思議見る

鳥取市 土橋 睦子

気がつけば歳も忘れて翔んでいる

月並な言葉で回る御挨拶

祝杯を受けてどかっと座る婿

音もなく無駄な時間が過ぎてゆく

だまされて置こう数字に弱いから

鳥取市 土橋 はるお

外で吸え嫌ならたばこ止めないな

ボンコツの舐は痛いところだけ

たまに来てどうでも買わず行商女

軒下に見事なものだ柿簾

ご法話が長いビールが温くなる

鳥取市 岩崎 みさ江

黄昏にまだ自我ひとつ持て余す

身を守ることも覚えた独り棲み

さも二人いるかのような独り言

従いてくる影へしつかり背を伸ばす

右往左往して何を生き急ぎ

鳥取市 夏目 一粹

没句とは愛のムチだと心得る

愛だけで生きてたような遥かな日

香を放つ金木犀は孤独な子

論争に喧嘩の匂い立ち込める

後悔はしません済んだことだから

鳥取市 春木 圭一郎

戊子きつといいことわいてくる

白ネズミ飼ってる商家安泰だ

少子化へ活を入れるかねずみ年

鼠講似た商法がおとろえぬ

ああこの世鼠小僧は居ないのか

鳥取市 平尾 菜美

勉学に勤しむ孫にはげまされ

投げた匙拾うチャンスに恵まれぬ

鈍くなる五感に小糠雨が降る

草屋根に映える私の原風景

巡る季の秋ときめきを深くする

鳥取市 永原昌鼓

健康のあかし三度の旨い飯

ラーメンも蕎麦もうどんもめっちゃ好き

あんぐりと太平楽にかくいびき

うちの子だ頭脳明晰とは言わぬ

大きめのサイズ求めて孫を待つ

鳥取市 奥谷彩子

人情もほっこり溜めて鬼瓦

精一杯生きて地に抱かれるいのち

人生も秋枝葉を払い冬支度

清濁も濾過してくれる母の海

婦唱夫随ピッチャー役は妻になる

鳥取市 倉益一瑤

半分はゴミになつてる石あたま

気が付けば走り続けていたいのち

ゴミ置き場可憐な花が咲いている

イケメンの隣で不整脈になり

レットルを貼られ身動きとれずいる

鳥取市 中宇地秀四

依怙鼻肩するなと神に駄々こねる

お賽銭チョッピリはずみ無理願う

見せられて目の色変わる札の束

まだ生きていたかと肩を叩き合う

人生を楽しむたんと無駄重ね

鳥取市 太田幸枝

友達が次々認知症になる

ごみの日をカラスが先に知っている

夫婦仲同じ空気を吸っている

ハンドルを夫にまかせ欠伸する

迷惑をかけずポックリ逝けるよう

鳥取市 田村邦昭

欲望の炎困ったままに老い

直球を投げた若さに戻りたい

美女ゆえに心の刺は許せない

この壁を越さねば春が遠くなり

いい汗を流して明日の酒を待つ

鳥取市 中村金祥

食い過ぎた分だけ歩くダイエツト

電車降り右往左往の愛煙家

ありがたや孫の子守りで若返る

定年へご苦労様と足洗う

山の神にサイズは聞かぬ方がよい

鳥取市 杉本孝男

農繁期乳児も畔に放つとかれ

本気かな死ぬ気でやれと他人事

老い二人目覚めた方が飯を炊く

内緒の定期満期の知らせ妻にばれ

美人ではないが気合に惚れ聚る

鳥取市 加藤 茶人

持病とも仲良く暮らす腹八分
口論のたびに扉をひとつ閉じ
極楽を信ずる壺を高く買う
長男が二男が次に俺が着る
楽な方楽な方へと下心

鳥取市 福西 茶子

天狗にも木偶にもならず輪のひとり
何があつても命あげますとは言わぬ
パトロール兼ねて海辺のごみ拾い
境界線越えて我が家へ竹ススキ
メタボリと脅され今日も一万歩

鳥取市 福島 庸二

身のまわりエコ宣言の年始め
閃きが浮かんで消え遠ざかる
不祥事にもう見たくない頭下げ
振じれても二人三脚繕り戻す
感謝する心をいつも連れ歩く

鳥取市 宮脇 道子

戦中派国歌の詩まで忘れ生き
隠し味愛を一振り頬緩む
芝枯れて紅葉一片色を添え
老いの身は流れに添って浮き沈む
桜の葉恥じらうように赤く散る

鳥取市 福田 登美

目眩いして時折自負が壊される
コスモスの揺れに魅せられ足止める
山ほどの思い返せず墓参り
残された余生静かに欲張らず
寒空におしゃれの孫が帰省する

鳥取市 山本 益子

カニ汁や地産地消のお献立
てんこ盛り余生にかける夢食べる
詰め将棋脳細胞が迷い出す
やっとこさゴミ分別に馴れてくる
定年後化粧にかける時間出来

倉吉市 山中 康子

子の年へ本尊どこへお出でます
母さんを取られ兄ちゃんやけをこく
思いやる母の乳房が美しい
見聞を広めた後の血がさわぐ
腹の毒出してきれいになりましょう

倉吉市 野口 節子

投げられた礫やんわり受け止める
水と緑の町で貧乏しています
ちぎれ雲ふんわり秋を乗せて来た
今一度命を燃やす洗い髪
これからも私流れに身をまかす

倉吉市 猪川 由美子

プライドの機嫌取り取りむつき当て
句を作る回線巡り惚けまいか
カタカナ語増えて日本語席巻す

なかなかに老いの自認が出来ずいる
宮崎県知事のイラストヒットさせ

倉吉市 最上 和枝

コトコトとおでん煮含む落とし蓋
拉致家族我が子の夢を見る苦惱

二時間を待つて洗眼唯二分
大山の西壁天下取る構え

倉吉市 山本 玲子

虎刈りをへやファツションと撫でている
玉の汗貧乏神を追い出した

茹でられて我慢しきれず蛸おどり
踏まれても命は萌える草もみじ

年金の歩幅に似合う暮らし向き
子はゲーム夫ナイター妻韓流

木を植えただけで済まない温暖化
明日がないようにお金を使っている

人間の色に熟していくあけび
花を飾ってあばら家を隠している

幸せは体温よりも温かい

米子市 光井 玲子

永遠なものだと思ふこの大地
健康な体を父母よありがとう

洗いざらい打ち明けほっと息をつく
今が花と思ひ日々をすごしている

米子市 門脇 晶子

こころの広い友になんでも打ち明ける
心にだけは残しておこう古い地図

たそがれて無口になった友増える
下り坂軋む音符が増えてくる

米子市 青戸 田鶴

紅葉狩り秋をいっぱい吸ってきた
うわさしてくれてる私生きています

稜線を越えて遥かな国に行く
星の降る大地へ友と旅をした

あわだち草ばかりの野原走りぬけ
目をふいて古い器と向き合った

あの窓の灯りたしかめ戸をしめる
年始め鳥もわたしも待つ夜明け

わが影を庇いたくなる老いる日に
年月の速さおき忘れてばかり

不安でも安堵でもある陽が沈む
毎日が事件日めくり薄くなる

米子市 白根 ふみ

米子市 政岡 日枝子

父と娘は言うに言われぬ綾がある

一年を刻む検診ありがとう

車座を女ひとりに壊される

いずれみな粗大ゴミです うふふふ

再会へみじめに見えぬほどの嘘

米子市 中井 ゆき

王ワさんの大地も今はビルラッシュ

風に乗る噂は羽根も尾もはえる

しっかりと大地に根付く道祖神

灯明のまばたき母の声になる

いい噂だけならさく耳もついている

鳥取県 松川 行男

書き出しに遅くはないと秋の候

飼い猫にお前も家族留守頼む

白髪に文句はないが隙多い

イベントで百姓の嫁野菜買う

赤福がないと困った伊勢参り

鳥取県 細田 裕花

バックボーンは故郷にある山河なり

崖縁の町にきれいな花が咲く

達人の菊は一段良い薫り

終列車握手の温さ膝に置き

巡り合わせそんな家族の箸洗う

鳥取県 山下 節子

身の程を弁え合った暮しする

聞き役になって可もなく不可も無し

答弁もにえたらくわでごまかされ

父さんの顔色をみて頼み事

指定券持つてうろろする不思議

鳥取県 下田 茂登子

嬉しいと口軽になるおばあさん

エリートエリートの口になかなか戸が立たぬ

食欲はあるのに脳天脳天が疼く

満月の灯りも今日は邪魔になり

来世は違ったひとの嫁になる

鳥取県 盛田 夢路

祝杯に心髄酔うてうれし泣き

自慢する物はないけど健在だ

大福がペロリと消えた別腹よ

しょうも無い噂ばなしは聞き流す

親の恩ぎりぎり崖つ測で知る

鳥取県 谷口 次男

轢き逃げは髑髏髑髏マークを付けていた

難しい本は睡魔を道連れに

戦地とは義足や義手が待つ地獄

一族は駄馬の群れだがそれもよし

あの受話器居留守の声はよく拾う

鳥取県 松本 よしえ

揺れながらようやく北を指す磁石

日の丸の旗は箆箭の底にある

ヘルシーと寿司アメリカで喜ばれ

オムライスの練習もして孫が嫁く

美しい棚田は万の汗を知る

鳥取県 竹信 照彦

夏長く秋は短く冬になる

孫の顔浮かべていちご苗植える

吊し柿作る作業も孫のため

歯磨きの後は食わずに寝酒飲む

霜月に衣替えするブランター

鳥取県 深田 倶久

終のすみか磨きみがいて光らせる

無気力は仮の姿ぞ肚決める

まびき菜のつぶやき聞いた秋時雨

テレビ消し耳かたむけてチチ口聞く

限りある人生ゆつくり歩みたい

鳥取県 佐伯 やえ

ボタンに花芽さつそく亡父に会ってくる

逆縁のお墓へひそと寒小菊

初雪や大脳のネジ巻きなおす

霰うつ音生きるはずみがまたもどる

一幅の絵だな大山さまの雪帽子

松江市 佐野木 みえ

紅葉を探して歩く奥出雲

寝返りを繰り返しつつ夜が明ける

シクラメン今日は気どつて卓の上

よろめいて襖に穴をあけました

安来節聞けば体が踊り出す

松江市 安食 友子

ヒチコックのスリラー浮かぶ鳥群

七五三ひ孫と歌うはとぼつぼ

しっかりと煮付けた貝はご免やす

吐きたいが痛し痒しの口裏よ

或る含み秘していますのプレゼント

松江市 小川 注湖

乗り込んですぐ携帯を開く人

まだ元氣よくしゃべるからよく食べる

初恋は触れた手の平洗えない

宍道湖の夕日を狙うシャッター音

モラル捨て食品偽装世を走る

松江市 津川 紫晃

水飲み場で人間らしい顔になる

門灯が見える所で酔いが醒め

たばこの輪吹いて糸口みつけ出す

一日をふんばり抜いた靴を脱ぐ

丸木橋渡れば里のわらべ唄

松江市 松本知恵子

出雲市 多久和敬子

ポケットにのど飴入れて燃えている
しがらみを抜けて見ている羊雲
階段の途中作戦変えてみる
螺旋階段おんなは少し夢の中
柿を取る熊居る切迫の地球

松江市 川本 畔

出雲市 石倉 美佐子

すずめ蜂退治したかと電話する
低気圧逃げて晴間が笑い出す
シルバーさん庭のお掃除ありがとう
炊飯器セットの仕方読んでみる
捨てるには惜しい気がして積んでおく

松江市 三島 崧 丘

出雲市 吉岡 きみえ

これ以上話は無駄と席を立つ
蜘蛛の巣に秋の名残がぶら下がる
全快の便りに弾む筆の跡
古希の坂膝が拗ねたり笑ったり
ファッションかずばらか伸ばす無精髭

島根県 伊藤 寿美

出雲市 佐藤 治代

わたくしを隠してくれる秋桜
封切れば花火の音のする手紙
脱水機潜った薨を裏返す
万里の長城ケーブルで征服し
カシミヤを嫁と娘に買う北京旅

出番無い朝の皮靴寂しそう
二人して飲むコーヒーは久し振り
出てこない電話に待てず足運ぶ
職辞してゆつくり朝の空気吸う
プレゼントファイトをもらう赤い服
しゃぼん玉とんだ一寸歌ってみたくなる
忘れたの指切りげんまんしたのさえ
兄さんの花嫁さんになった夢
新しい春が来たのよ八十歳
あの人の泪この人の笑い愛しい人生
頑張ろうわたしのための明日が来る
浮世には名もない花が咲いている
これしきの事で泣いてはおられない
病院の匂いに馴れて夢結ぶ
全治した先に希望の花咲かす

うっかりが転がっている整骨院
好い事をしようポイ捨て拾う朝
妻になり母になり今おばあさん
理想には掛け離れてる老いの道
まっいいかいんだ我慢して生きる

出雲市 岸 桂子

B面でいいさ私の彩で行く
逃げ回る枯葉なだめる竹箒
生涯を無題と書いて生きようか
素うどんにふき込んでくる日本海
足跡は哀しいまでに蛇行する

出雲市 持田 多輝子

はらはらと夢のかけらを拾う秋
決断を促されてる向かい風
狙の鯉に主治医のアドバイス
病窓で市街地見下す秋日和
手術後の奇跡を願う命の灯

出雲市 富田 蘭水

ありがとう今夜の飯は炊けていた
小さい事言わない父の肚が好き
カナばかり母に敬礼しています
ラブレター貰って飯が倍うまい
大根がだん段姪の足に似る

出雲市 小白金 房子

箒の目神と対話の朝を掃く
童歌好きでひ孫と手を繋ぐ
お開きの美酒が尾を引く後始末
からみ合う話じっくり母が解く
お茶とこころ呼んでよばれる温かさ

出雲市 小豆澤 歌子

秋空に浮かれてふわりちぎれ雲
たんぽぽよ風に誘われいつたきり
一日の恋を燃やした夏椿
秋の空動きたくなる鬼瓦
踊り出た種がひっそり咲いている

出雲市 伊藤 玲子

充電が過ぎてやたらと走りたい
意地張って膏薬貼って跳んでみる
老斑の浮いたバナナの味が好き
肩の手の温み信じていいですか
赤い実をつけて次の世を託す

雲南市 毛利 幸

味見する舌が上下に動き出す
こおろぎが秋の訪れ連れてくる
社交家はいつも電話が鳴っている
懐かしい母と二人の仕舞い風呂
母の前弱気の父が見え隠れ

倉敷市 撰 喜子

浮いた話なくて独身やってます
かみさんが旦那と違って尻に敷く
大根を抜いて尻餅つく平和
泥沼にはまり人生模索する
厚塗りの壁のあらかたはげる夕

美作市 福原悦子

真庭市 福嶋智恵子

どのように化けてもあなた怖くない
鏡台も私も耐えた五十年

勝ち負けは急がず心の隅におく

逃げ道を叱ってくれた影法師

人生の喜怒哀楽を呑むポスト

美作市 大石 あすなろ

雑談の中で本音を釣りあげる

活発な意見横から水を差す

脈絡のない話がつづく雨の午後

今引けば傷は小さくてすむだろう

傷ついたノラに自己責任を問う

美作市 小林 妻子

認知症の講話耳ほじくって聴く

吊し柿も剥いて否応なしに春

用なしを犬が起こした素浪人

年金の余りで鳴門阿波踊り

せんねん灸祖父の背中が山火事だ

美作市 山本玉恵

生き残りの仮面ひとつが千切れそう

しとしとと胸まで濡らす秋の雨

死語ばかり追うては生きて行けませぬ

つよがりは捨てよう 卒寿も近ければ

気まぐれな足を気にする万歩計

愚痴言うて長生きしたいのも不思議

食べ過ぎて薬を飲んで老いたかな

信じてた餡ころ餅よお前もか

賞味期は自分で決めていた昔

貧乏な頃は何んでも旨かった

真庭市 国米 きくゑ

秋祭りダンジリ喧嘩に酔うている

長老の粋なはからい離婚止め

科学の粋集めロボットコンテスト

一徹な老父の背中中は道標

先ずは目で戴く粋な京料理

竹原市 時広 一路

不器用な生き方でよし顔洗う

ネンネンコロリ得意な枕持ってます

平均寿命越してもいまだ足確か

棘の無い自分を見たいだろ薔薇よ

夫婦道ゆつくり車椅子を押す

竹原市 石原淑子

こっそりと飛躍を誓う初日の出

釣りたて穫りたての贅沢な食事

三百六十度感謝して眠る

逝き方を選べないから食べておく

おたがいの命愛しむ歳嬉し

竹原市 岩本 笑子

句を尋ね句に向き合うて萩の花

思い出の端っこにあるラブレター

パッチワーク端切れゆつくり息をする

湧き水の静かさ冬を急がねば

千の風一人納得しています

東広島市 福島 万年

面影はエーデルワイス胸に抱く

嘘いっぱい吐いたと思う元教師

喜寿祝う子等の奢りの山の宿

ウォーキング負荷少し下げ喜寿の坂

火に油そそいで回る給油艦

宇部市 平田 実男

本当の味方は自分一人かも

ドラゴンズアンチ巨人を喜ばす

私の賞味期限は鼻で決め

私のどこを切っても五七五

三合を一合私の休肝日

美祿市 安平次 弘道

過不足を言えば葉が増えていた

ポケットの深さに自我を取り戻し

花枯れていつか孤独にさいなまれ

光るもの皆光らせて幕が降り

取扱い注意マンネリだとしても

東かがわ市 原 賢

旗色はどうあれ正論通すだけ

まだ何かありそで時を巻き戻す

手の拳上げたときから負け戦

生き下手が他人の泥までかぶるはめ

母が逝き失せてしまった故郷の風

東かがわ市 神保 坊太郎

つじつまが合えば合ったで眠られず

使い捨ての時代もあつた我が命

賞罰なし齢を偷んだだけのこと

あれも運どうせ此の世はアミダ籤

煩惱のかけらがごびりつく師走

東かがわ市 伊勢 八重子

肝心な時に携帯水を差す

散り急ぐ落葉のシャワーくぐり抜け

連山を墨絵流しの雨上がり

水入らず積もる話の里がえり

空の色肌で覚えた漁夫の勸

東かがわ市 清川 玲子

マネキンを真似て自分を見失う

脚光を浴びて謙虚さ失せていく

突いたらここにもあつた不正事

阿波踊りのリズムに渦も応え出す

気がかりなじつと渦潮見てる女

東かがわ市 川崎 ひかり

正直に言えば波風立つ話

言い訳の涙がとても嘘っぽい

あの世には持つては行けぬ地位と金

ちぎり手のない廃屋に柿たわわ

神様に片道切符持たされる

松山市 高橋 宏 臣

かけ抜けるつもりの風と契り合う

まなかいにみどりゆさりと迫り来る

真昼にも星はあるけど見えぬだけ

どの彩にしようか発てぬ始発駅

明日もまた生きるつもりの予報見る

松山市 宮尾 みのり

乾杯をしながら二幕目を策し

加速する古い心音を聴きながら

歳なりという現実を受け入れる

その時はきつとあたふたする私

感性は無いがせめても思いやり

松山市 古手川 光

代々の田んぼコスモス咲き誇り

晩秋のこの淋しさは何故だろう

少々の期限切れなら食べている

欠点を引いたら僕がゼロになる

今年こそ今年こそはと拉致家族

大洲市 中居 善信

心経の中途あたりうる覚え

一歳の重さを思う古希過ぎて

知らぬ存ぜぬ胸に収めてきた事よ

鎌を研ぐ農夫の明日が不透明

役人のピントはずれていませんか

高知県 小澤 幸泉

そのままでよいと別居の妻の声

冬枯れの街に孤独を呼びつづけ

赦し合う夫婦になつて枯れて行く

悲しみも涸れて独りの米を研ぐ

人目にはつかぬ善行花が咲き

高知市 小川 てるみ

幸せの一人芝居の幕が開く

拾われた恩へ報いる日本一

手の内をおだて上手に覗かれる

恋をして仕草も女らしくなる

言行不一致トツプも政治家も

◇各地川柳会代表者会◇

2月16日(土) 13時〜16時 於アウィーナ大阪

案件①誌友拡大対策の経過と今後

②後継者の育成

③その他

川柳塔の

川柳讃歌

(37)

木津川 計

いい事はないが案ずる事もない

長 浜 美 籠

「多事多難」と申します。「一難去つてまた一難」、気の休まる時がない追われながらの毎日を送る人は結構いるのです。美籠さんは「案ずる事もない」平穏な暮らしを送っていて「いい事はない」と言われます。

ですが僕は美籠さんが羨ましいのです。心配することのない日々を迎えられるほど「いい事」はありません。この幸せを喜びながら、どうぞ静かな生活を大切にして下さい。

暗算の出来る範囲で暮らして

高 杉 千 歩

一桁の足し算も電卓に頼るようになった今日です。暗算の出来る人は特殊技能になりました。そうではなく、千歩さんは昔ながらの生活様式をつましく守ってと言っておいでなのでしょう。僕も時代に遅れましたが、いまの暮らしに満足しているのです。

パソコンを使えませんが情報には「知恵蔵」や「イミダス」に頼っていたら今年で廃刊に参りました。鉛筆をナイフで削って書きます。手紙は手書き、帰宅すると着物に着換えます。下駄履きです。ホテルでは和食、飛行機には乗らず、鹿児島まで汽車で行く骨董品です。

妹は妹のまま歳をとる

古久保 和 子

訳あつて東京・国立劇場の式典に参列しました。ああこの方がいいはったなあと思つたのは、壇上の来賓に常陸宮が座つておいでです。この方は騒がれもせず話題にもならないまま老人にならなはったなあ。ザーっと目えつづつてますから熟睡したはると思つてるとそうでもなく、覚束ない足取りで演台に立つと、天皇と同年同月同日の話し方です。弟宮のまま年とはりました。

雑踏のひとりひとり目的地

水 野 黒 兎

当てもなく、風の吹くままの旅に出る人はいません。フーテンの寅さんでも寒くなつたから南へ行き、夏には北の国へ旅立つのです。理由なくしてではありません。リースマンの孤獨なる群衆は人間のつながりを失つた現代人を抱えて戦後社会学の人間論を確立させました。が、目的地を持った孤独という視

点はなかったと思うのです。

毎日毎日、何千万もの行き先を定めて人は行きます。ある日一日、誰も動かなかつたら、その経済的損失は莫大になります。

右往左往汚くなつた諭吉さん

小 糸 昭 子

ですから国内総生産を高めるには右往左往せねばならないのです。不必要なものを必要と思わせて買わなければ資本主義は崩壊します。欲望を肥大化させるように私たちをどこかへ向かわせなければなりません。「一本刀土俵入」のお薦めが茂兵衛に言います。「一文無しでどうするつもりだい。その利根川の渡し賃だつて十六文いるのだよ」。金を持つての右往左往、福沢諭吉も汚くなる筈です。

奥歯抜けそれから長い冬になる

牧 野 芳 光

死んだ親父が奥歯を抜いた晩年がありました。人相の一変したのに驚きました。頬が落ち、老人になつたのです。まさに人生の冬を迎えた、と思えました。親父の冬はそれから五、六年で終りました。

が、長命の今日です。冬は長いと芳光さんは言うのです。長いとか時間がたつぷりというか。その時間を有効に使うことです。

(上方芸能)誌代表

自選集

小西雄々

元旦の海へ弾んでいる余生
投げ返す意地人間の貌になり
縁談へいそいで仮面用意する
美しい天使と歩き気が疲れ
平凡に生きて今年も美味しい屠蘇

斉藤 姦

作業帽似合った方だ偉かった
脱線がうまい教師の色チヨーク
ダム底で眠り続けている伝記
決心がついたか牛が歩き出す
よく動く父は多くを語らない

塩満 敏

古里で喜寿の祝いを受けました
古里で亡き父母の噂聞く
古里で薩摩料理を食べました
古里の土産は重いものばかり
三年後旧友と逢う約束をする

新家完司

玉置重人

恒松町紅

津守柳伸

五円玉きみとも長いおつきあい
申し合わせたようにどなたも耳二枚
音速で過ぎる笑っている時間
悪意なし口を開いて見てもらう
お寺のカラスはナムナムアーと鳴く

合掌に心やすらぐ古刹の気

おもかげが浮かんで消えたささめ雪
べからずを守り小さくなる歩幅
汗の量だんだん自信湧いてくる
マスターの蝶ネクタイに値ぶみされ

初日の出巷の噂ねずみ算

おめでたい話を聞いたバスの席
湖を眺め地酒とそばの味
人間の醜さ嗤うねずみ歳
動かれるうちが華だと八十路の手

初詣でプランに栄螺匂い立つ

お茶室も風雅ゆとりの花水木
食品に喝入れられる冷凍庫
匙投げて済む問題でないトッパ
鼻と触れあう神戸花鳥園

遠山可住

金持ちにならばつたらし標準語
ありがとう蛇口ひねればお湯が出る
百姓の米穫れず泣き穫れて泣き
いい夢を見よう一人のラジオON
どの会へ出ても年長ご乾杯

都倉求芽

少子化へ産めよ殖やせよ鼠算
マンションの街で聞かれぬおめでとう
アイドルへ成人式の娘ら走る
渋い茶のふるさといつも温かい
あの世へはまだまだキャンセルしつづける

土橋螢

来年のはなしをすれば笑われる
雁が音を落して天は高くなり
うっとり老眼鏡に春がくる
除夜の鐘終り煩惱あたらしく
始めから悪い事だと知っていた

西出楓楽

企みがあるのでここは笑つとく
左手と右手庇い合っている
束縛をとれば自由と限らない
今が匂と死ぬまで思いたいものだ
古稀近し自分捜しはまだ続く

仁部四郎

沈黙を武器に夫婦が戦する
沈黙は銀だと知った七七忌
沈黙の罪を名将だから問う
沈黙でソロバン合わす民の知恵
沈黙の民もエンピツ握ってる

波多野五楽庵

木洩れ日がななめ斜に森を織る
かまきりの鎌ふり上げた一つの死
百人が冬へ冬へと枯れ落葉
ストレスが前頭葉をかけめぐる
上目づかいの視線あびせる反抗期

林瑞枝

永平寺煩惱洗うように澄む
夕映えの空を飾った雁の群れ
女盛りの恋には弱い火の鱗
風に囁く科白がいつも離れない
蹴る石もない街に住み山を恋う

宮口笛生

美しくえどった顔に毒が見え
蟹の値にまだ手の出ない蟹解禁
骨折で二ヶ月病院にも馴れて
病院で酒の無い日のまづい飯
紙おしめもらして妻がいてくれる

宮西弥生

老いるとは亡母ののこした日の言葉
酔いさめたとこで戻る人の顔
自分らしく自分らしさでいくひとり
泣き笑い重ねた顔に棘がない
働いた記憶しかない日向ぼこ

前 たもつ

昭七会元気が揃う古都の旅
雪吊りの松は見事に枝を張り
苔もえて抹茶に和む時雨亭
食べ放題蟹食う顔は見せられぬ
泉鏡花今も脈打つ記念館

森下愛論

紅葉散る風に罪着せ冬の音
長雨を眺めてひとり飽きもせず
訪う人も無く何と静かな余生だろ
クモの巢の隅にもがいているわたし
人情うろうろさ迷っているわたし

八十田 洞庵

ピエロって奇抜な所作で笑わせる
変身を重ねた男落馬する
愛溷れて能登への旅愁肌寒く
だまし絵は解かないことにおこう
太古にもロマンがあった埴輪の目

両川洋々

休耕田に僕の墓標を立てておく
導火線の端を握っている妻だ
憎しみと胸の火消えるまで飲むう
過去形の罪がわたしを眠らせぬ
薄切りの人情ばかり手に残り

阿萬萬的

背伸びしたひと言葉穴掘っていた
きれいな嘘までおんなの立ち話
欲のない半生妻の手が荒れる
都市砂漠やさしい言葉死語となる
電子辞書に頼りっきりの文字忘れ

板尾岳人

こけしにも美人不美人ある嫉妬(鳴子こけし鮎)
断崖を流れる水にある命(巖美溪)
断崖にげいび追分吸い込まれ(兎鼻溪)
全身の命を洗う湯が溢れ(鳴子温泉)
神宮の神楽と共に祈るなり(明治神宮宮参り)

奥田 みつ子

初鏡 まだまだ翔べる自己暗示
独り佇てば落葉ささやく石の道
思わぬ時思いがけない白い部屋
流転の世昨日の強者今日弱者
戻れない旅ゆつくりと楽しまん

河井庸佑

適量を越えた嬉しい日の手酌
突き放す親の真意が読み切れず
ユニークな表現友の絵を褒める
言い訳をして藪蛇と自己嫌悪
出不精で道迷わせる様変わり

川上大輪

伸びて縮んで無事に迎えたお正月
手を繋いだのは未来か過去なのか
誘惑へうつかり立つた生卵
自分史の中の化石を掘り起こす
しりとりが途切れ足元見抜かれる

木村あきら

白寿への険しい坂へ杖を曳く(93翁)
獅子舞に今年の運を賭けてみる
うっすらと白衣を冠るサヌキ不二
永久に流れも清き五十鈴川(伊勢神宮)
松竹梅活けて世紀の初春祝う

小島蘭幸

日の丸の赤還暦になりました
桜咲いたら比翼の句碑と飲み明かす
小回りの効かぬネズミもいるだろう
いい電話だったカレーが焦げていた
うっかりと娘のシャンブーは使えない

水煙抄

(つづき)

立川市 柏野遊花

七歳へ発芽楽しみ誉めことは
進化する機器に脳トレ励まされ
卵抱く気持ち幸運逃げ出さぬ
急いでもゆつくりしてもし損じる

横浜市 長島亜希子

食品表示よりも自分の舌と鼻
誰も来るはずない日時とり違え
痩せたねに生活苦だと答えとく
草抜きが要らない墓も味気ない

川柳募集

「ごま」にまつわるあなたならではの
一句を募集します。

締切りは1月31日。詳細は裏表紙に掲載。
お忘れなく投句して下さい。

水煙抄

西出楓楽選

和歌山県 福井 菜摘

手の内の風を読んでる初対面
和解案握りこぶしの中にある
いい便り抱いて笑顔が駆けてくる
躊躇せず天を目指せと影が言う
振り向けば喜怒哀楽の数珠つなぎ
結び目を解いてふんわり風にのる

北九州市 岡田 幸生

梅一輪介護の部屋も春の彩
水を買う暮らしを笑う里の母
気骨ある人で出世に恵まれず
方言がひと味添える旅の膳
出る杭になつてマークがきつくなる
発展とうらはら砂漠化の都会

雲南市 菅田 かつ子

不器用な後姿にある温み
恋をしてミケは今夜も帰らない
ご馳走になつて眼鏡を置き忘れ

店頭の何を信じて買うて来る
朝が来て置いてきばりにされた月
幸せという物差しをまだ探し

河内長野市 針生 和代

詩いた種やはり刈り取らねばならぬ
七五三孫の笑顔に会いにゆく
いつの間にも年賀ハガキの幟立つ
派手を着て明日も元気で翔ぶつもり
気が付けば亡母と同じこととしてる
DNA孫にも期待しないこと

神戸市 木村 忠義

品のある老人になるのが希望
頼むぞと毎朝頭マツサージ
まず度胸要るなと思う英会話
退院の日は古里に帰るよう
暗号を交ぜる日もある日記帳
希望とは闇夜の灯りだと思ふ

和歌山市 土屋 起世子

まだ妥協出来ぬことあり金婚日

母の手で大根一本七変化

朗らかな笑みを土産に里帰り

招かれて子守り留守番うれしい日

陽のあたる場所には影もついてくる

剪定の鋏が幹を太くする

札幌市 三浦 強 一

積ん読書順次繙く秋灯下

ストレスの特効薬は大笑い

高齢化社会のモデル趣味の会

昨日より今日と老人力を付け

老人力鈍感力は負けません

路地裏にまだ残像がある昭和

大阪市 澤 田 定 子

退職して風の便りも遠くなり

異国語の飛び交う雨の東照宮

買った墓地どうしましょうか千の風

我が子より気楽に出来る孫自慢

回転寿司に押され馴染みの店閉じる

老眼は神の気配り皺ぼやけ

吹田市 藏 田 光 子

四面楚歌ひとりで越える水たまり

プライドが少しあるので一人住む

一人にはひとりの音ですむ暮らし

半音を下げると丸く暮らせそう

一人だけ残されそうな菊日和

半額のセーラーに揺れる招待状

高槻市 安 田 忠 子

さよなら勝ち風が運んだホームラン

少年の自転車風をひとりじめ

趣味三昧あぶはちとらずそれもよし

昭和歌謡涙を誘う秋の宵

稲刈りの夫婦絵になる里の秋

秋風にコスモス揺れて母恋し

香南市 桑 名 孝 雄

軍歌しか歌えぬ友の輪が温い

戦友愛肩を貸し借りして八十路

宮総代神と内緒の飲む話

有難や五臓六腑が酒を呼ぶ

元の歩に戻りたがっているとき

禄米を返し気儘に傘を張る

和歌山市 堀 富 美 子

心配の種も緩んで来た惰性

故郷の色が染みつき気取らせぬ

子に負担かけぬ温度で生きている

危なげに私見つめている遺影

金で買うランク戒名揺れている

景品に釣られた買った展示品

横浜市 巖田 かず枝

本店で食べた赤福旨かつた
中国の事は言えない偽ばかり
肉じゃがの上手な人はもてるらし
もういくつ寝ると息子に嫁が来る
はなむけに笑い袋を添えてやる

横浜市 金森 徳三

元日の朝風呂天下泰平だ
決着がつかぬ話に酒が要る
朝からの水雨慌ててこたつ出す
道徳が地に墜つ老舗お前もか
一寸先闇だやっぱり永田町

横浜市 川島 良子

進歩する医学簡単には死ぬぬ
薄味に満足いかぬ血糖値
とびきりの笑顔を持っていく介護
今が匂ブリもサンマもわたくしも
父親の顔になつてく息子達

藤沢市 加藤 スズコ

刈田から伸びるひこばえ気を貰う
秋刀魚つぶやく七輪恋ししぼうちわ
雪帽子富士を仰いで紅葉狩り(富士河口湖の旅 三句)
ふれる手に富士の湧水身に沁みる
日が昇る染まる富士山日本の美

佐渡市 高野 不二

大臣もしやべり過ぎるとボロが出る
立ち上がるだけがこの頃大仕事
穴のあいたズホンおしゃれの仲間入り
退職金優遇すると狙われる
退職を待つてた役が押し寄せる

岐阜市 平野 あずま

前向きに揃える明日を歩む靴
仏にも鬼にも会わず農一途
土に生き父が自慢の無農薬
欲深い皿に溢れるバイキング
淡泊な論吉で長く留まらぬ

北名古屋 片岡 文男

コスモスもやはり陽に向き咲いてくる
菊の花夏日に会って汗をかき
割り込んだ席で上げる化粧箱
シルバーの行楽コース寺も組む
民営になつても局は土日閉じ

京都市 清水 英旺

虫一匹弱き鳴き声きょう立冬
病妻残し無念やるかたない遺影
誰彼も緊張感のない二ホン
女房とけんかをしないことに決め
十五夜に劣らず風雅十三夜

大阪市 江島谷 勝 弘

大阪市 橋 村 容 子

飲むだけが一人前の私です
嫁はんが一週間も物言わず
器用だがお金儲けはできません
お土産はジャコかめざしに決めている
いやだなあ偽装癒着に慣らされて

大阪市 坂 裕 之

余生まだ勉強ですと励まされ
ひと区切りついたし後は楽しもう
五十年経っても恩師若かった
闊達とした性格で金は無い
氷雨耐え春待つ花芽たくましく

大阪市 寺 井 弘 子

ダイエツト遠ざけてゆく食の秋
あつさりと負けられ買う気失せてゆく
リング園みかん豊作便り着く
古里の空気と水に癒される
光らせた車に無情雨続き

大阪市 萩 原 大 朔

職下りて自分を磨くひとり旅
城下町折目正しい友が住む
帰り花昔風流いま不気味
もう遅いや間に合うぞエコロジー
物価高買物籠に見え隠れ

活性化老いも若きも大忙し

団塊のアベック多い街の中

ファッションに十年前が舞い戻る

風呂帰り屋台おでんのいい匂い

北の国今日は霧水が出来たとか

大阪市 原 田 すみ子

同心円半径ちがう夫婦です

もう半分まだ半分の折り返し

半袖にお疲れさまと秋の風

躁の時まだ見ぬ日々へ腕まくり

ふる里へ気持で距離が伸び縮み

大阪市 平 井 露 芳

教えたり教えられたり夫婦道(教師の姪結婚)

そう言えば電柱がない御堂筋

御隠居は年金貰い孫の守り

御先祖もお墓の中で遭う地震

値上げせず中味へらして売ってます

大阪市 伏 見 雅 明

我慢するツボを覚えた愛妻家

正論を吐いて地方へ飛ばされる

路地ものの匂を味わう一夜漬け

賭けごととは勝った話に花が咲き

人間がマーキングするけもの道

大阪府 山本 加お里

世の情けバリアフリーで生きる知恵

愛情で老々看護しています

売られても喧嘩かわない暮らし向き

エレベーター最後に乗ってブザー鳴り

間に合った乗った電車が逆を向き

大阪府 吉川 弘泰

除夜の鐘酌んでる酒も屠蘇となり

初笑い入れ歯外れるほど和む

初風呂を湧かして母の背を流す

金盃に年を重ねた顔が浮き

雑煮餅減らしてメタボ励んでる

大阪府 吉田 富美

たのしさも不安も少し日記買う

十二月見えないものに追われてる

重なつた枯葉にわが歳見る如し

ゆくがまま雲をゆかして山眠る

包丁のみな砥がれいる十二月

池田市 上嶋 幸雀

霜月の名がうるたえる温暖化

生き方を知るコスモスのしなやかさ

年金の脛かじられて七五三

反抗期もう始まった七五三

いい夢が見られるように布団干す

泉大津市 助川 和美

聴診器恥ずかしがらぬ歳になる

やたら運動したがる六十路しない孫

夫聞く俺今薬飲んだかな

たとう紙に亡母の思い出包み置く

新札をへそくるはずがまた祝

泉佐野市 稲葉 洋

地に還る落葉の思い色々

いっさいの色赦されて黒で終え

五つ六つ若く見しよとてしゃんと立ち

正月を古人も詠んだ一里塚

肚据えて春の老い先一歩ずつ

泉佐野市 備後 三代子

ひとり居にシャンソンのソロ秋の夜

スパゲッティ器用に巻いて食べる子等

マニキュアの爪そのままで米を磨ぎ

秋の風共に束ねた秋ざくら

高笑い八十路のふたり五平餅

茨木市 島田 誠一

拍手だけ浴びせて義理のアンコール

それほどは吞めぬ歳から分かる味

称賛も罵声も浴びたノバウさぎ

敵味方そつと挨拶して測る

披露宴一生分のカメラ浴び

岸和田市 米 富 淳 風

吹田市 二 宮 栄 子

マフラーを編んだ幸せ遠い恋
雑草の強さ眩しい病み上り

病窓からす鳴く日の胸さわぎ
旅帰り疲れは言えぬ夕仕度

通院ではかなく去った好季節

ふつふつと鍋蓋おどる母の味

ウォーキング四季の移ろい愛でながら
老い二人メインディッシュのない夕餉

電車の中狸が眠るシルバー席
横文字が出しゃばり老いの邪魔をする

堺市 大久保 伸 子

吹田市 早 泉 早 人

例文の通り手紙を書くなんて

逆風にさすがは友のうまいトス

多いのに少々と言うプレゼント

ケータイでボクの天使が笑ってる

ライバルの目だけが笑わない笑顔

木枯しにおでんの屋台避けられぬ

つくり笑いの裏側にある打算

傷心がゆつくり溶ける露天風呂

本棚の本にあいそをつかさされる

目覚めどき妻の寝息のある安堵

堺市 荻 野 像 山

高槻市 笠 原 乃 り こ

盆栽を育てる人間の勝手

出掛けましょ貴方のお手が杖代り

早合点させて実らすハウスもの

幸せがじわり沁み込む露天風呂

ゼロ一つ間違え妻にうんと言い

脇取の澄む声に聞く吾が雅号

明日止める覚悟の酒がうますぎて

うっかりのせいにしておき今日も晴れ

イメージ写真で誘う旅ごころ

亡くした子の歳を数えた母も逝き

堺市 羽 田 野 洋 介

高槻市 片 山 か ず お

追う者の強みだなんて負け惜しみ

先走るクセを妻には咎められ

志望校本人よりも親が決め

どうしても美人に甘くなる血筋

おしゃべりのタネはいつでも週刊誌

お金には渋いお方が出すお口

孫の目に確かめさせて飲む薬

不自由を知って自由のありがたさ

罪のない顔で言うことにくらしい

鍛錬の乾布マサツで風邪をひき

豊中市 谷川勇治

ラッキーマウンテン喜寿もラッキーマウンテンありますか

にんげんを解く公式を知りたいな

秋風がわたしの弦を弾き去る

天国の下見でしたか麻酔覚め

酒があるまだまだ暮は閉めません

豊中市 松尾美智代

昨日手抜き今日はしつかり主婦をする

消し壺へ今日も小さな愚痴入れる

どきどきの心静めて封を切る

旅仕度心はずでに紅葉狩り

夕焼けのグラデーシオンに癒される

富田林市 古田千華

パワフルに生きて余白は埋めておく

正面を見据えて研く詩心

良し悪しを打ち据えておく幼年期

美辞麗句並んだことが畏だった

頂上から老舗の屋台軒げ落ち

寝屋川市 岡本勲

損ばかりしても懲りずに夢を買う

今日一日生きて感謝の手を合わす

携帯で夫泳がす妻の知恵

再会を誓った友の計報きく

感謝して感謝しきれぬ母の愛

寝屋川市 森田麗

仏壇の花もいきいき秋最中

いつの間に話題がそれて孫談義

譲られたシルバースhirtこそばゆい

鬱飛ばす深呼吸する朝の風

愛犬の餌もダイエット食になり

羽曳野市 仲谷真一

幸福の扉はいまだ開かれず

ゆさゆさと私歩けば床きしむ

裏金で接待を受け大もうけ

吉兆よ老舗がなげくおまえもか

防衛費やっぱ高い謎とけた

羽曳野市 福田悦子

古時計亡母と最後に聞いた曲

介添えはいつか自分の日と重ね

そつと出す手には善意が満ちあふれ

思い出を大事にしたいリサイクル

百までは生きるつもりで飲む薬

羽曳野市 森下一知

仕合わせがメタボの腹にてんこ盛り

立ち退きが路地の情けを滅多斬り

通院へ日向を拾う冬帽子

路地住まい勝手口から声が来る

生まれつき人を笑わす顔に出来る

羽曳野市 吉村久仁雄

妻の掌に命の重さ転がされ
服に腹合わせてメタボ免れる
憲法が熟して風がきな臭い
三猿を通し正論譲らない
ヘルパーの元氣足音からもらう

枚方市 小川良吉

特攻の潔い拳手忘れない
あの世へは往きたくないが覗きたい
あの世には戦はないかふと思う
あの世往き切符を抱いて今生きる
あの世へは弥陀に連れられ往くつもり

枚方市 小林わかこ

鮎生きる古里生きる城下町
負の記憶ふる里にもう消えている
今日もまた一歩いっぽとひとり言
おばあちゃんと半分こする午後三時
半値という魔力が耳に心地好い

枚方市 坂本ミヨノ

バーゲンに急ぐ女性の競い合う
黒ねずみ盗んだ神酒運んでる
平凡な倅せしみて絵馬奉納
噛み合わぬ夫と言葉で揉め笑う
呑めないがそろそろ舐めて二次会に

藤井寺市 伊藤アヤ子

冷房も暖房もいらぬ七五三
新米が届きふるさと近くなり
心地良い秋の空と菊花展
食欲の秋にちよつぱりダイエツト
紅葉がひと足早い飛驒の旅

藤井寺市 津田シルク

短日の陽ざし背にうけティータイム
涙はよそう先にお空が泣いたから
美容院居眠つてる間に超ショート
何買わすつもりかただでたんとくれ
仲のいい夫婦演じた日が暮れる

藤井寺市 増井ヨシ枝

人生のマサカの坂で立往生
もうねずみ食べない猫を飼っている
初詣で絵馬のねずみの大きこと
笑い袋入れてあります年玉に
甘言があふれる蛇口しめなおす

藤井寺市 俣野登志子

感動の一冊友に勧めよう
部屋の灯り消して十五夜お月様
悪口のお詫び夫にみやげ買う
預金高愛の残高ほぼ比例
どの子にも厳しくやさし母の背な

箕面市 寺井柳童

救急車すぐ近くまで来て止まる

銭湯に今も変らず富士の山

サウナ風呂我慢競べをしてしまふ

秋日和廃線辿る紅葉狩

豊かさには悲鳴あげてるゴミの山

八尾市 赤木妙子

孫に手をひかれて照れてVサイン

度忘れを思い出すのも四苦八苦

道譲るゆとりの人のいい会釈

猫撫でた手でゴキブリを打つ矛盾

合併後故郷の地図が描けない

八尾市 笹倉ひろし

朝食で晩のおかずを妻が聞く

不揃いであつても固い家族愛

つるべ落し秋と人生駆けて去る

人生を賭けても小さな二階建て

スーパーで必ずチェック産地国

八尾市 田中トシエ

おとなりと密度を保つ匙加減

長寿してこれでよしとは未だ言えず

一言が心の袖に引つ掛かり

煮詰った話ライバル水を差す

煩惱を捨てよと響く除夜の鐘

八尾市 寺川はじめ

物忘れまるでゲームの古いふたり

ほどほどがつい盛っているバイキング

ずっしりの稲穂が悦に入る田刈り

肩書も脱いでどっぷり旅の宿

にこにこ切手が笑ってくる便り

八尾市 中島春江

そぞろ寒隣もおでん換気扇

夫の忌に思いおこして温め酒

七五三お腹にもおりもう一人

曲る腰しゃんと伸ばそう師走来る

背の温み娘の手編みちゃんちゃんこ

八尾市 西川義明

友情という情の字について甘え

親切につい涙腺がゆるみがち

いい天気友と汗かく散歩

太っ腹そうに見えたがセコイ奴

DNA かいくら食べても太れない

八尾市 前田紀雄

俺流で頭丸めて日本一

今年こそ鼠算して金溜める

我家では常にハンドル妻が持つ

美しい国残暑と共に去って行く

同じ事習っていても差が開く

八尾市 松葉君 江

豊かさの裏で荒廃する日本
浮き沈み支える妻の太っ腹
言った事忘れ言われた事覚え
産科小児科危い橋は渡らない
病気怪我失うものと得るものと

大阪府 太田 としお

他人のときかぬ明治の頑固者
ステーション日本語英語韓国語
真実を伝えてからは社を追われ
物覚え悪い分だけとんがらず
半分もローン残して雨が漏り

大阪府 神野 宇乃子

グツグツと本音が煮えているおでん
鍋の中主流争うコロと揚げ
市民権まだ貰えないロールキャベツ
こんなにやくに付けた辛子に泣かされる
爛付けて帰り待つてるおでん鍋

大阪府 神野 千恵子

不自由になって道具のありがたさ
退屈は余力があつて言えること
影だけが妙に主張をする月夜
知らぬふり知ってるふりのこそばゆし
左右の手それぞれにある悩み事

大阪府 高木道子

白壁に命からめる蔦かずら
長生きにブレイキかける世の軋み
真ん丸の絵も上手くなり六十路半
通天閣ビリケンさんに指紋つけ
終焉を仏となりて浄土道(心き)

大阪府 西川 冷子

異常気象油断の隙間小夜時雨
保津峡の濁り気になる船あそび
吊し柿カビのこぬうち冬よ来い
小春日に真白なシーツ反射する
干し大根異常気象に汗をかき

大阪府 畑中 節子

悔しさを笑うあなたも物忘れ
ローカルの駅弁秋の香がうれし
新米という喜びの香りあり
読書するちがう世界は夢の中
読書して遅れを埋める余命表

神戸市 武田 恵美子

鴨池で晩の食事は鍋にしよ
来世の趣味の世界は紙と筆
仕事だと稲穂見習い頭さげ
早朝割昔スケートいまカラオケ
老いてまだ色々な服ほしくなる

尼崎市 加川 靖 鬼

花褒めて育てた人もほめておき
こだわりの料理が素材殺して
酔っている自転車の輪も千鳥足
面舵をまかせて家の無駄が減り
ぬか床へビール飲ませば旨くなる

尼崎市 小池 幸子

釣瓶落とし油断のならぬ秋の暮れ
背伸びした付けを背負って強く生き
仕残した事があるから頑張ろう
夏痩せず怖い味覚の秋が来た
口出して他人の荷物背負う羽目

尼崎市 藤岡 りこ

初めての味に真顔の離乳食
思い出だけ母に残して子ら巣立ち
公園デビューー世の中泳ぐ術を知る
氷枕替える母の手温かい
早送りして孫だけを見るビデオ

加東市 黒崎 美紗子

宴会もカラオケはずみ盛り上がる
お向かいの部屋も同じく宴会中
降りる度買ってふくらむみやげ物
おみやげと陽気な笑顔バスの中
痛い膝こらえながらの旅帰る

篠山市 谷田 多美子

祭りすみ一人世帯にもどり冬
つくり方食べ方亡母のおほえ書き
名月に明日から寒くなる兆し
五線譜に昔の夢を組み立てる
胃袋が休む間もない一人留守

三田市 上垣 キヨミ

年金を襲う年末クリスマス
忠告をされて親交深くなる
良縁を願って止まぬお節介
カレンダー趣味の予定で埋められる
検査値が全て良しとは呆気ない

三田市 白井 二英

元気です小学校の側に住み
思い出す昔ならったCO₂
靈魂は信じてないがあつてよし
固苦しい話も聞いて呆け防止
怖くないほんとの地獄知らんから

三田市 辻 開子

日々介護いろんなスパイス愛感じ
湯めぐりと紅葉狩りもと欲が出る
道の駅旬の作物笑顔まく
足止めたウインドーの服夢の夢
リハビリは孫の笑顔が頑張らせ

西宮市 石野 照代

みかんむくしぐさよく似て親子だね

初詣で何も願わず手を合わす

仲直りきつかけほしくて柿をむく

三が日過ぎれば元の家事全般

松の木に菰のマフラー冬支度

西宮市 藤本 直

嫁姑孫の笑顔が渡し守

耳の奥内緒話が詰まつてる

また来たか口の悪さも友の情

ケータイを見つめる孤独群れている

陽だまりに心を少し預けてる

西脇市 七反田 順子

退屈は私の辞書に書いてない

孫が来て退屈の字が掻き消され

鼻息の荒い人ほど気が弱い

旅カバン土産話をたんと詰め

ブランドは横目でそつと見て通る

三木市 広瀬 房江

遊歩道河の瀬音を聞きながら

圧力鍋なかなか使いこなせない

しゅーと出る蒸気に眼鏡うるたえる

新米を送る倅せみんな無事

まろやかなコーヒーにウツとけていく

奈良市 乾 春雄

四季に咲くバラに詩があり夢がある

聞き上手忘れ上手で雑魚の群れ

男の胸に女の知らぬ地図がある

ふり向けばあの日が還る風の音

今日も吐き明日を吸い込む深呼吸

奈良市 岩本 浩二

知らぬ間に無断建築つばめの巢

葉より熱爛が効く秋の風邪

爺ちゃんは歯が取れるのと見詰められ

天高く嫁さん美味そに芋を食う

寝坊の娘通勤電車で化けている

奈良市 田中 賢治

故郷の大魚節に盃重ね

今日だけは馬子にも衣裳参観日

利の匂い官を抱き込む小判鮫

褒め叱るスキンシップの幼稚園

よく笑い繁盛亭で年忘れ

奈良市 辻内 げんえい

ノートより頭の記憶確かです

スーパードブランド秋刀魚見つけたよ

稲田には日本の心秋景色

短くも元大臣の箔が付く

大相撲病んでいるのは協会だ

生駒市 小西 稔

岩出市 村中悦男

挨拶を交わす言葉で和を保つ
奈良の鹿挨拶上手餌求む
浴びるほど飲んだ昔がなつかしい
温暖化遅まきながら冬仕度
温暖化昔に戻す知恵いそぐ

和歌山市 坂部 かずみ

靴下の破れから本音が覗く
値上がりの古紙回収の声高く
カタカナに消化不良を起こしてる
今日もまた取り残された予定表
忙しく鼠も走る年賀状

和歌山市 田中 すす

敗北は先手打たれた丁寧語
引き継いだ位置で挽回しいられる
周りみなお偉い人と心得る
真っ直ぐにただ真っ直ぐに来た迷い
動じない石とゆっくり話し合う

和歌山市 山田 侃太

指先に喜怒哀楽がある点字
指先を銃口にして上司の背
当たる顔してるお天気お姉さん
雑踏を泳ぐとたどり着く飲み屋
始めから煮崩れていた特措法

衣替えクリーニングの印取り
生け花に花の命を頂いて
叱られた父のことばを思う年
奥様が逝った重たい喪中状
叱られて叱ってかためた夫婦道

海南市 小谷 小雪

信じてるからできてくるけんか種
みんな見て大きな虹が出ましたよ
一周でこだわりを解く観覧車
楽しげなザクロぱっくり歌ってる
久々に手を組み歩く秋日和

紀の川市 宇野 幹子

聞き流すために二つの耳がある
口笛が響き合わない仲たがい
背を凍と引いて昨日は振り向かず
走らないペンにストレス絡みつく
心臓を一突きされた鎌の月

紀の川市 北山 絹子

自分史を塗り替えたくて恋をする
キムタクとこっそり逢った白昼夢
歯車が狂い出してる少子国
夜更かしへ右脳左脳がうるたえる
一匹の鬼とグラスを傾ける

紀の川市 辻内次根

先入観で描くと見落とす個所がある

無為徒食一日分の髭の量

吸って吐く呼吸の中に僕がいる

生きていくからわからない明日のこと

西高東低一氣に冬が来てしまう

煩惱にわたし個人の天があり

凝り性が昂じて肩凝りまで貰う

峰もみじ紅も錦も地へ下ろし

脳味噌に父の教えが漬けてあり

晩成を信じ太陽ばかり描く

和歌山県 森下よりこ

波長合う美容師さんと二十年

もうけもののように生きてる癌その後

三世代老いの孤立はかなしすぎ

晩秋へ庭のドラマが吹き溜る

秋の段取収穫祭を祝わねば

鳥取市 近藤秋星

成仏の相で臨終飾りたい

芋パーティー園児歓待してくれる

冬將軍今かと出番待っている

早いもの明けりゃ平成二十年

風邪の神僕を愛してくれている

鳥取市 坂本智子

夢多き私の余生これからだ

噛みごたえある回答を消化中

散歩道なじみの顔と笑み交わす

一本のそびえ立つ木が実を結ぶ

フラダンス個性豊かに腰動く

満月に腹の底まで見つめられ

一人寝に枕在りし日連れてくる

愛犬は切っても切れぬ仲となり

人並と言いつぶつかる壁だらけ

夏帽子別れ惜しみつゴミを取る

鳥取市 山岡紀子

買わないで試食するのも女です

離縁状出して女は強くなる

おばちゃんが三度も並ぶ特売日

健康に感謝しながら歯をみがく

気が付けば雨になつてる長電話

鳥取市 山口千代子

静かに枯れて音もなく落ち土になる

どん底に落ちて育つた子は強い

悲しみに会うたび悟り深くなる

卒寿が来ても手足自由に動く幸

黒白グレー頭の並ぶ同窓会

鳥取市 吉田 弘子

住めば都スローライフの心地よい
そろそろと歩く杖から学ぶもの
誤入力にんげんである証です
足踏みがいつまで続く消費税
雑念を一時忘れ筆を持つ

倉吉市 酒井 芙美子

一人立ちせよと子供を突き放す
あれこれと言っただけ言って何もせず
妻の舵上手にとれて羨ましい
残り火をちろちろ燃やし白寿まで
屑かごにぼとりと捨てた過去の傷

倉吉市 前田 喜美子

川柳と出合いしみじみありがとう
ダイエツトやせた女が好きですか
気丈でも明日の約束ない命
反対を唱えてみても多数決
歛洗う小川も消えた里の秋

境港市 遠藤 那珂子

風呂敷に亡母の思い出包み込む
やさしさを素直に出せば良かったに
うっかりが大きな渦に巻きこまれ
石ころも役に立つ日を待っている
母命削ってまでもくれた愛

境港市 中井 虎尾

平凡という暮らしにも背伸びする
ああいやだアカギレ肌の荒れる冬
オレ流は優勝せずに日本一
恐い妻むかしやさしいホの字の娘
ブランドの気持で着てる安い服

米子市 小塩 智加恵

夫人院庭の管理の処方箋(夫人院 2句)
夫人院検査検査に病ふえ
風に舞う落葉掃除が朝仕事
次つぎと老舗の悪事後断たず
十薬をつるす軒下風通る

米子市 見山 温子

年金が荒れた田畑の税払う
名水に活気が湧いた過疎の村
ささやかな抵抗妻が耳塞ぐ
クラス会セレブの輪には入れない
口下手も優しさにじむ人集う

鳥取県 岩崎 和子

カレンダー心新たにメモ記す
八十歳まだまだ元氣主婦してる
明け方のうつつか夢か心地よい
ハードルを下げて笑って壁を越え
五七五私の想いちりばめる

鳥取県 大塚 美代子

こうのとりに降りて初孫やつと抱き
産んだ事忘れた母が子にかえり
過去の傷洗いたい核兵器
地球から追放したい核兵器
真珠玉揃え美人の首を待つ

鳥取県 岡本 幸枝

世の流れ変えなければと声ばかり
付き合つて見ればやさしい人ばかり
好物をそろえて夫の誕生日
金次郎の美談さく児等正座して
明日は未知ブレーキ友に夢を追う

鳥取県 岡村 孝明

散歩道朝日に出合い希望湧く
ガソリンがどんどん家計攻めたてる
合併後互いにまつり盛り上げる
海の草食べて健康とりもどす
病癒え野良へ出る身に感謝する

松江市 相見 柳歩

蹴躓くことで始まる恋もあり
耳掃除までしてくれる理髪店
身長は超えたが超せぬものだらけ
次の世も同じ時代に生まれたい
訛り聞くためにローカル線に乗る

松江市 山根 邦代

孫が来るパワー入れ替えしてもらう
高い空雲の流れを飽かず見る
満天の星があしたを弾ませる
約束の土産に笑顔連れて行く
お出掛けの靴がうろうろする時雨

雲南市 武島 ちよえ

ふんだんに秋を使つてもてなされ
暑さにも寒さも弱い痩せ蛙
賞味期限切れでも気分まだ若い
老斑の出来た我が家を慈しむ
皆脱いで無口になった冬木立

雲南市 福岡 博利

お茶口は小さい方へ手がのびる
節食につとめ体重減つてこず
過ぎ去った昔話の窓の月
蕎麦枕まわしてみてもねつかれず
風邪ひいてあれやこれやと軋む音

宇部市 高山 清子

燃えるもの秘めて八十路のイヤリング
想い出の旅湯上りの紅うすく
夕茜そぞろ人恋う古い独り
ごめんねと言えば済むのに口に出ぬ
ゴミ出し日鳥が鳴いて急きたてる

府中市 藤岡 ヒデコ

高知県 いの 静 草

老いては子口は慎しむ方がいい
傷癒えて同じ過ちくり返す

心地よくページをめくる秋の雨
やる気なら自薦を恥じることはない

明日と言う広いページへかける夢
共生を求めて狸里に出る

食って寝て歩けることの有難さ
平穏な暮らしに勝る杖はない

殊の外短い秋に未練あり

今治市 塩路 よしみ

香南市 近 森 功

哲学は持たぬが秋へ涙する
のほんと手の鳴る方へ行く平和

一病も大事にしよう守り神
卒寿まで五年日記と駆け比べ

人間の森でこころの詩探す
大袈裟に笑うざくろは身を焦がす

爺ちゃんが未だ持っていたハーモニカ
立冬へ待ったをかける温暖化

水中花 一期一会の風知らず

今治市 渡邊 伊津志

唐津市 岩崎 實

温かくないと寂しさ湧いてくる
温かくすると笑顔が湧いてくる

死ぬ前の握手の強さ手が覚え
老い二人共に気遣い口げんか

弾け飛ぶ笑顔に今日を癒される
悩む事が少なくなつて爪が伸び

おとなりもそのお隣もおとしより
目に見えぬ力が肩にのしかかる

叙勲の栄それから余生縛られる

大洲市 花岡 順子

唐津市 北村 松風

償いは自分を許すためにある
比較など出来ぬ父は父母は母

セールの伸びに鞭打つ棒グラフ
傷つけた言葉私も消えぬ傷

償えぬ荷物ばかりが増えてくる
左手の意志を右手が記録する

想い出は楽しかった日だけに
誘われたことに行きゴルフ場

人間の中を泳いでいる独り

メルボルン 藤原ボン吉

チャーハンの後はきれいな冷蔵庫
酢豚にはパイナップルが謎のまま
フカヒレのスープ我が家は春雨に
エビチリを最初に頼む給料日
ジャスミンの香りで閉じる華宴

シドニー 三谷たん吉

この国は主義を変えねばこわれそう
間違うな議員はただの国民ぞ
政治屋の息してるとこ別社会
猫ならばハラも立てまいこの時世
血の流れさらさらなんて感じるか

札幌市 小沢淳

簡単に話に乗ってドジを踏む
間を置いて話せば重みついてくる
間髪を入れずに真紀子節が飛ぶ
書道展知った振りして眺めてる
押す人や引く人あつて道ができ

取手市 葛西清

小細工が効かぬと知って忍び足
言うことを黙って聞けば妻が酌
誕生日忘れられてる秋夜長
世話好きの仲人料が死語になり
年金に取られちゃつてる前まわし

日立市 加藤権悟

燃え上がる初日に賭ける駄馬の夢
電飾にまさる故郷に天がある
お日様と約束がある父の鍬
どの子にも死角に父の傘がある
CMの保険よ誇張すぎないか

草加市 飯土井健夫

負け嫌いな人の十倍汗をかき
暇の無い一生だった良い余生
腰痛と両膝痛み明日は雨
投句する内は呆けないから励み
老い独りフライパンの料理好き

東京都 井上つよし

鰯雲しつこい残暑追い払い
葱も人も霜を潜って味が出る
暖冬に背筋が寒い温暖化
最高齢少うし呆けた弁が受け
傘寿卒寿順序不同で生きている

昭島市 野口忠

永田町活断層が動き出す
舌が首傾げて気付く期限切れ
参道でウソは売るなどお伊勢さん
頭数揃う前から飲み始め
よく喋る夫の腹が透けて見え

京都市 藤井文代

聞く耳は持っていないのに地獄耳
妻に先立たれしあとに羽根失くす
まあいいかこれが重なる腰まわり
人の世話視点変えたらおせっかい

大阪市 安藤なつこ

肥満猫からかいに来たチュー太郎
夢だけはネズミ算してふくらます
どの家も賞味期限は妻次第
メモを手は何て書いたのこの私

大阪市 尾崎黄紅

憂国の志士が揃って縄のれん
きっかけは足を踏んだの恋でした
すぐ嘘と解る嘘からでた真
明日はあすそんな若さに戻りたい

大阪市 岸田幸子

よく歩く足に感謝のハイキング
甘いもの辛い物まぜ味になる
目で合図なんでもわかる仲間です
明ると考え事もはずむ部屋

大阪市 田浦實

茶寿皇寿知りて何だか出る元氣
七十歳自然に出ますお蔭さま
ひゆるると風の声にもお国柄
恵みの雨連れてくるから憎めない

雑念も永代経に封じ込め

大阪市 吉内福世

好きなこと出来る元氣で夢を追う
土ついた里芋もらう里ぬくい
テロ国会ストレス溜まるニュースづけ

池田市 多田契子

消費税ない暮らしても辛かった
一握の砂抱いたまま半世紀
人よりもなじみの犬にご挨拶
ブランドのカバン年金出している

門真市 矢阪英雄

秋日和家族久しく散らし鯨
鼻のきく仲間忘年会幹事
早や師走秋の風情が残ってる
季節無視働く蟻は誰のため

河内長野市 内海綾乃

孫にいくつまで生きると聞かれとまどうよ
何時もの処ポストなくなり淋しいね
日光に当って食べる弁当おいしいよ
老舗にも内部告発風吹く

河内長野市 木太久正一

庭木剪定見る見る庭の晴れ姿
顔色を誉める挨拶罪がない
正義感仮面が欲しい時があり
年賀状まだ届かない友の顔

河内長野市 黒岩靖博
まだおしゃれしている間は艶がある

路地裏でにぎわう重地蔵盆

福祉など世話になるまいやせ蛙

知床の夕日に溶ける鹿の群れ

岸和田市 坂口英雄

二度とあつてはならぬ謝罪が多過ぎる

ストレスも花一本で癒される

野村さんのばやきはいつもいいヒント

食べるほどベルトがゆるむ秋夜長

岸和田市 中岡香代

つらい時うれしい時も涙ぐみ

親鳥の苦勞知らずにねだる雛

落日が心の炎燃え立たす

パパよりも僕に希望をよせるママ

豊中市 荒巻夢

何やかやすることのあるありがたさ

あの母が自分を忘れ子を忘れ

苔むした墓の割れ目に野菊咲く

生きているコップの中の温い尿

豊中市 源田啓生

宇宙論読み味噌汁を掻き回す

恥らしいの賞味期限はとうに過ぎ

票賭けた政治ゲームに明け暮れる

おしおきと思ひ痛みを我慢する

前線も私も揺れていた初秋

涙こぼすぐらいロケットもできる

こぼしたらあかん言いたくなる介護

アメーバがヒトのその後を訊いている

寝屋川市 小嶋みさと

イベントの屋台はしごで童心に

あつあつのおでんの湯気に癒される

忠告を聞かずに今の不倅せ

無頼には仇になつたか正義感

羽曳野市 宇都宮ちづる

葉はたんを苗から育てお正月

久し振りホテルでランチすまし顔

宝くじ運が開けて三千元

真つ白も真つ黒もいやスケジュール

羽曳野市 松本静子

不如^{はじきやす}婦今年も無事に咲きました

夫は逝き共白髪とはいかなんだ

古里は星降るような町でした

寒い冬おでんで酒を酌みかわす

枚方市 二宮紫風

秋色に染めて醍醐寺夫婦旅

それなりの我が箱庭も秋に入る

秋雨にぬれて色増すとうかえで

出番待つ胸の高なり発表会

藤井寺市 吉田 喜代子

尼崎市 河津 正治

友は旅わたしテレビで紅葉狩り
あーあまた脳もこわれて来たらしい
物あふれ何故か荒廢した日本
敵しかった人の氣弱を知るつらさ

八尾市 田邊 浩三

定年で重い看板無事下ろす

ゲーセンでいじめの仇討ってる子

お化粧に念を入れての始球式

死ぬほどに求めた自由持て余す

八尾市 脇 俊子

風船とぼし夢が空気を独り占め
振り出しに戻って吉となる予感
弾まない歳相応が邪魔をする
子の自由芯に親の目届いてる

大阪府 小栢 こずえ

幸せがはいって来そう窓を開け
困るなど思っている人が来る
氣遣って世話する人が先よろけ
寒くなり酷暑の夏が恋しなり

大阪府 若月 祐作

台風の進路気ままに蛇行する
独身のくらし気ままに五十年
アンケート大正生れの欄がない
涙ほど金利が上がり物価高

爆音にかき消されてるサヨウナラ
わがままで済まぬボタンの掛け違い
背伸びする澄んだ瞳に媚売れず
忘れ得ぬ今は昔のテーマ曲

加東市 岩本 美緒子

赤富士の手拭きみやげは飾つとく

三代色ぼかしてゐるわが立場

色紙画の好しを選んで差し上げる

晩餐の味噌汁おいし歳となり

篠山市 永井 かほる

錠剤の裏マジックで日付打つ
降下剤忘れ途中で引き返す
姑を愛せる人になれたなら
いい雨だ明日は野菜と語ろうよ

三田市 阪本 藤朗

今日もまた耳が拾った人の口
濡れ手拭い提げて見ている縄のれん
駅の灯が消えてコンビニ浮き上がり
父母は星か風かと夜の道

宝塚市 丸山 孔一

入れ替えたペースメーカー命の火
探しても見えぬ段差に蹴躓き
何となく過去を流して年が明け
故郷の鎮守で一人初詣で

奈良市 阿部 茶々

甘い玉子焼き優しい祖母の味
気短かでおうちよこちよいで怪我をする
運動会先へどうぞと譲る孫

絶世の美女に化けたは男の子

奈良市 尾畑 なを江

ナツメロに聴かされている若い頃
もらわれる仔猫に諭す処世術

人並にこれがなかなかむずかしい
のんびりと時計を追って日々多忙

奈良市 矢野 良一

路地を吹く風の匂いが堪らない
傷口にやさしく触れる里の風

誰もいない淋しい霧の散歩道
秋の夜は心にしみる古賀メロデー

和歌山市 根田 よしこ

大臣もパートの主婦も明日は謎
何見ても面白くない困った日

ゆったりと二時間ドラマ活貫う
虹見つけ老母と眺めた嬉しい日

紀の川市 木村 徑子

運はわたしに天使のように降って来た
善人にされて背中が照れている

大地震その日来るまで脅される
とれとれのサンマの目玉威嚇する

橋本市 石田 隆彦

過去すべて洗い流して空の碧
九条のバツジをまとい海外へ
末っ子の心の隅に棲む甘さ

両親がハンドル握り子を潰す

鳥取市 大前 安子

箸持って右も左も使い分け
ひよいと出る女心をオブラート

イメージに度胸集めてチャレンジだ
もみじ葉をねぎらい厚く流す川

鳥取市 津村 律子

申し訳ございませんが流行語
堪忍袋孫の笑顔がガスを抜く

おから煮た母が大きな声で来る
あげ上手土俵の上に旦那様

鳥取市 松岡 照美

ひんやりに緩んだ肌がピンと張る
干し竿に柿や芋陽と戯れる

裕福さ腹の辺りへついてくる
手品のように鍵盤すべるピアニスト

倉吉市 藤井 美津恵

十三夜雲のない事祈ります
誕生日くる度孫が歳を聞く

秋日和笛と太鼓の響く村
これ位思った坂も息切れる

米子市 吉田陽子

元気をあげる人が待つので元氣出す
八方ふさがり紅茶が渋くなる
ささやかな望み孫でも欲しくなる
若作りほどほどの方が若く見え

鳥取県 飯野菖子

お月様ヒントください明日の道
運動会走る種目はみんな出た
悔しいが走ってみても追い越せぬ
振り返る事もないままうろうろと

鳥取県 大田勝誉

残り坂を越える夫の手を引いて
自己主張反対ばかりしています
好きな事やらせて下さい先がない
太公望歩幅合わせる妻で居る

鳥取県 北村稔

初孫が笑った泣いた大さわざ
腹立つがにつこり笑顔仕事です
スポーツでやつと親友出来ました
痛いのがまんしている俺の子だ

鳥取県 斉尾くにこ

軒下でそっと満月おもてなし
過去の自分と今宵もシャドーボクシング
なよりの癒やしあなたに森がある
許される嘘友のハートへそっと入れ

鳥取県 田口清帆

夢を叶えるのはやる気次第
団塊の余生じっくり夢を描く
大根がおいしくなつて足が冷え
政局の秋波乱含みのテロ新法

鳥取県 橋谷静江

おでん鍋囲めば会話弾みだす
六回目歳女にもある元氣
秋取りの野菜友から届く日々
いやな事忘れたいのに寝つかれず

松江市 松浦登志子

固まった心を解かず熱い酒
還暦と厄年親子餅を焼く
趣味あふれ私の部屋は雑居ビル
パンひとつ長蛇の列をする都会

安来市 原 煩惱児

雲という伴侶名月引立てる
ずっしりと重たい稲へ微笑む祖父
恵美須大黒それより孫のいい笑顔
眠られぬ秋の夜長に思うこと

雲南市 渡部好栄

年金で今度は赤い靴買おう
つっぱってみてもたんぽぽ風に舞う
犬と猿不思議な縁で露天風呂
人間の本音聞いている聴診器

尾道市 木曾一徳

初心者はオーロラペンク化身色

風景画キャンパスに塗るイエローオーカー

百号のイーゼル支えコバルトバイオレット

行き尽くはチタニウムホワイト無心彩

府中市 岩本雅代

安全を祈って赤い靴を買う

柿のれん夕陽に映えて甘さ増す

無二の友明かせたくない言葉秘め

菊の花父母の墓前につい涙

東かがわ市 赤澤貞月

我が影が無理はするなと呼びかける

これからは母さん頼むとしおらしい

諦めやプラス志向で七十路坂

孫の夢叶えさせたし気も漫ろ

山鹿市 阿部ミツ子

阿蘇路にてススキ波うつ秋の風

人も稲も雨風に耐え秋日和

遠き人病に臥すとつたえ聞く

里帰り隣近所に御挨拶

栃木県 岡野すみれ

格差社会昔々の姿なり

老いてなおひまを愛するむずかしさ

理で動き次は利にゆく欲の皮

米を炊くこともなくなり朝はパン

(柏野遊花・長島亜希子両氏の句は53頁に掲載)

温故知新

一年の第一日にプランなく

豆秋に

あはははは君までがもう還暦か

大阪府 麻生路郎

遺産より欲しいと思う父の歳

会わず人あらばと聴診器をしまい

ホノルル市 内藤草一郎

句集刊行

師の序文三尺下がりにいただきぬ

大阪市 須崎豆秋

云いたりぬ下手を相手は知っている

猫の事まで近所なら聞いてやり

米子市 三鴨美笑

淡路州本にて

三日程洲本で庄助さんを真似

歌の鳥絵の鳥宿は詰め込まれ

鳥取市 川村日満

「川柳雑誌」麻生路郎主宰

三三三二号(昭和三十年一月号)

同人特集

私の一句

(順不同)

人間を諸に見せ合う酒となり	堺市	河内	天笑
咲いて散るこれがたやすいことでない	大阪市	西出	楓 楽
水際には物言いたげな石ばかり	米子市	八木	千代
味噌汁が匂う確かに生かされる	出雲市	園山	多賀子
バツカスに叛かぬ程度酒を酌む	鳥取県	小西	雄々
虚と実の狭間で生きてきたピエロ	弘前市	波多野	五楽庵
清貧の誇りか語尾が乱れない	唐津市	仁部	四郎
花束を贈り波紋を楽しまん	堺市	柿花	和夫
傘寿きて器のたがを締め直す	出雲市	富田	蘭水
一石を投じる海と知りながら	松山市	宮尾	みのり
蛇口から朝の息吹が溢れ出る	東かがわ市	木村	あきら
突き当る壁が教えた一呼吸	鳥取市	有沢	せつ子
愛情を測る機械は無いものか	吹田市	野下	之男
お蔭様今日も元気に生きている	大阪市	松尾	柳右子
口だけの男に顔だけの女	羽曳野市	酒井	一壺

火種なら持つております風よ吹け
 晴れ着着て精一杯に袖を振り
 悲しくて別れの言葉絵にならず
 片減りの靴が彷徨う砂の数
 幸せがいつしか枷になる指輪
 歩のままに真っ直ぐ生きてきた誇り
 まほろばの歴史を深く学ばんか
 お釈迦様あなたも妻子捨てた人
 散り急ぐ花よ待つてよ母が来る
 督促状混じる郵便受けの鬱
 言い訳の知恵を絞っている歩幅
 友達がくれる大きなにぎりめし
 家族寄る狭い茶の間にある温み
 生きてゆく水をしっかりと飲んで飛ぶ
 格言もジョークも通じない神秘
 五月の風がオペにも耐えた妻を撫で
 現在地いい妻ですといつておく
 どうでも良いことがゆっくり忍びよる

高槻市	横浜市	大阪府	松江市	米子市	大阪市	羽曳野市	茨木市	枚方市	大阪府	橿原市	奈良市	泉佐野市	枚方市	平川市	雲南市	河内長野市	鳥取県
富田	小野	粉山	安食	白根	河井	吉川	藤井	丹後屋	八十田	居谷	天正	山本	海老池	小寺	毛利	植村	山下
美義	句多留	隆盛	友子	ふみ	庸佑	寿美	正雄	庵肇	洞庵	真理子	千梢	蛙城	洋	花峯	幸代	喜代	節子

昔々大黒柱だった父

米食はずサブリメントが売れている

人生は迷路達観して生きる

妻や子が凭れてくれる壁になる

世話好きでいつも渦中の人となる

まあいいかここまで来たら神まかせ

無添加の空気を吸いに旅に出る

絵手紙の外までこぼれ出る愛よ

菜の花のようなサラダで春をよぶ

暮れなずむ空に流れる千の風

娘に鍵を亡夫に留守番託す旅

咲くときは覚悟散るのはなお覚悟

輝いたあの日を辿る並木路

断ち切れぬ思いと歩むおぼろ月

花を愛で今日一日は心満つ

ありがとうほんの五文字にある重み

おおらかに老いたし泰山木の径

おいと呼ぶハイと空気が応えてる

和歌山市 宮本三喜夫

大阪市 小糸昭子

和歌山市 堀端三男

鳥取市 岸本宏章

鳥取市 岸本孝子

唐津市 井上勝視

東京都 清原悦子

神戸市 田中章子

米子市 青戸田鶴

東かがわ市 伊勢八重子

和歌山市 松尾和香

和歌山市 木本朱夏

美作市 大石あすなろ

弘前市 高橋岳水

岸和田市 土橋房枝

尼崎市 春城武庫坊

尼崎市 春城武庫坊

桜井市 河合茂雄

身に合った歩幅で生きている限り

豆の蔓天向いている初日の出

娘は銀婚私は花と五十年

家族みな脱がせ洗濯機が踊る

湧き水の滴り落ちる間の祈り

苦を楽の種にしてくれない政治

愚痴きいてくれるロボットいませんか

美しい日本語話すおばあちゃん

生かされて生きる男の黒い影

あこがれて天を目指すも竹とんぼ

空眺め射手座生まれと言うロマン

人間の花はきれいな笑顔です

行間にある真実が掴めない

近頃は伊達や酔狂で生きている

ひらめきが欲しくて風に触れてみる

本当の事を言うから嫌われる

孤独にも耐える気力の有無を問う

親子の絆枯れないように水をやり

尼崎市 長浜美籠

西宮市 亀岡哲子

松江市 佐野木みえ

大阪府 澤田和重

堺市 山本半銭

宇部市 平田実男

八尾市 村上ミツ子

堺市 河内月子

鳥取市 土橋螢

鳥取市 土橋はるお

鳥取市 土橋陸子

神戸市 池田善守

美祿市 安平次弘道

大阪市 谷口弘義

三田市 久保田千代

吹田市 穴吹尚士

吹田市 瀬戸まさ代

出雲市 多久和敬子



良い事が聞こえるように耳そうじ

まだ夢を昨日今日明日探す旅

美辞麗句百より響くぶつきらぼう

さりげない心遣いがむつかしい

一筆を添えた賀状の温かみ

贅沢な夫婦喧嘩の味忘れ

メタボにもならず本日金婚日

神様がそっと一病くれました

輝いて太陽の塔凜と立つ

いい目覚め神がチャンスをまたひとつ

追い越してみたい綺麗な足の人

一病があるので他人思いやり

心地よい言葉が誘う落し穴

昨日までの柳友今日は黄泉の人

気を持たすほほ笑み貰てから迷い

一本の藁の向こうはみな他人

運命と納得までの迷い道

金婚で妻に授ける助演賞

東かがわ市 川崎 ひかり

西宮市 坪井 孝一

大阪市 大川 桃花

寝屋川市 森 茜

大阪市 津村 志華子

岸和田市 森元 ふみよ

寝屋川市 平松 かすみ

大阪市 榎本 日の出

交野市 山川 日出子

河内長野市 村上 直樹

豊中市 藤井 則彦

岸和田市 堤 檜代

静岡県 園田 猿杓

弘前市 今 愁女

大阪府 米澤 椒子

八尾市 宮西 弥生

鳥取県 石谷 美恵子

高槻市 傍島 克治

満願のお百度石は温かった
 生きてることが錯覚かも知れぬ
 白菜漬おえると姑の冬が来る
 千枚田千の命の風が吹く
 還暦になつて踏み出す未知の国
 玉手箱煙は元に戻せない
 孫達が順番に鉦鳴らすなり
 残された日々を楽しむしやれた老い
 過去未来よりも私は今が好き
 花ほめて西洋の名はすぐ忘れ
 満月が空気も丸くしてくれる
 縄ノレンくぐればおでん煮えている
 退くことを知つてた母の処方箋
 妥協点見えて来るまで四股を踏む
 次週切る胃痛と回転ずしを食う
 安らいだ気持になれる人と居る
 人生の下流はゆっくり好きに漕ぐ
 四面楚歌藁一本を見逃がさず

奈良市	亀岡市	岸和田市	吹田市	高知市	熊本市	奈良市	藤井寺市	尼崎市	交野市	池田市	松江市	東京都	大阪市	高知県	東かがわ市	海南市	大阪府
米田	井上	雪本	早川	小川	永田	宮口	若松	山田	森本	栗田	川本	岸野	鶴田	赤川	清川	三宅	桑田
恭昌	森生	珠子	清生	てるみ	俊子	笛生	雅枝	耕治	弘風	久子	畔	あやめ	遠野	菊野	玲子	保州	ゆきの

好奇心青い果実が熟れ急ぐ

ピンチにはチャンスとルビを振っておく

一冊の出会いに明日が光り出す

嫁ぐ孫に人生訓を書く手紙

駅弁もいいけど母の手弁当

一芸に徹しきってる趣味の道

不揃いの一粒だけがよく光る

七転び八起きわたしが付いてます

インテリが三段腹で様はない

思いっきり空気を吸った呱呱の声

よくできた優しい母は避雷針

ときめきの種にも水を忘れない

分相応までもって可もなく不可もなし

献血を一度もせず期限切れ

平熱に戻りご飯の味になる

丁寧に残り時間を生きてゆく

怠け癖メタボリックに嗤われる

印を結んで風の吹くのを待っている

羽曳野市 安芸田 泰子

大阪市 井丸 昌紀

枚方市 伊達 郁夫

高槻市 井上 照子

米子市 野坂 なみ

枚方市 二宮 山久

芦屋市 黒田 能子

西宮市 山本 義子

岸和田市 小島 笑司

河内長野市 山岡 富美子

鳥取県 谷口 次男

羽曳野市 徳山 みつこ

京都市 都倉 求芽

堺市 西村 りつえ

八尾市 生嶋 ますみ

大阪市 前嶋 たもつ

和歌山市 玉置 当代

京都市 高鳥 啓子

すり切れたものばかりなり父の部屋

スタミナを目指す傘寿へ温める

踏んばっても足出ぬ飛行機は恐い

虹画いて遊び心を埋めている

マナーモード話し上手で聞き上手

銀砂利をほおぼり想う鶴彬

太陽の愛を知ってるこぼれ種

土壇場で浮輪を投げてくれた人

極楽の矢印がある寺の門

アキアカネ追いつ追われつ里ぶらり

億ション完売ネットカフェ満席

誤字脱字正坊さんに叱られる

青空は万の微笑をふり注ぐ

知るまでは幸せだった泥の船

笑顔ぶかふか被災地のテント村

水平線キリりと孫の名は航

句読点つけたぼちぼちみまかろう

ありがとう娘のひと言が嬉しくて

西宮市 牧 上 富喜子

河内長野市 井 喜 醉

富田林市 片 岡 智恵子

和歌山市 武 本 智恵子

大和郡山市 坊 農 柳 弘

富山県 島 ひかる

八尾市 吉 村 一 風

大阪市 西 川 更 紗

篠山市 遠 山 可 住

箕面市 広 島 巴 子

さいたま市 星 野 育 子

大阪市 川 端 一 歩

大阪市 平 嶋 美 智子

豊中市 吉 田 あ ずき

堺市 近 藤 豊 子

竹原市 小 島 蘭 幸

弘前市 櫻 庭 順 風

伊丹市 山 崎 君 子

相槌を打ってるだけで聞いてない

花束は目立つし心そつとあげ

拉致の子を抱きたい親が老いてゆく

まず豆腐あとはゆっくり考える

尻取りが終ってしまいうメロンパン

今年も無事を願って屠蘇を酌み

ろうそくの炎愛憎から解脱

うつらうつら眠る楽しみあるこの世

極楽が満席らしいまだ行けぬ

千の風迎えて風いでくるわたし

欠点をはずせばわたしはなくなる

心配を止めたら羽根が生えて来た

自分史へ誇りを持っている野良着

白寿まで生きるつもりで米を研ぐ

きれぎれの想い出つなぐ故郷の道

深夜走るナス天使の羽根をつけ

続きがらは妻と書きたい二輪草

大阪に鶴彬句碑建てたいな

堺市 齋藤 さくら

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

神戸市 伊勢田 毅

松江市 恒松 町紅

八王子市 播本 充子

高知市 川竹 松風

生駒市 飛永 ふりこ

出雲市 伊藤 玲子

川西市 西内 朋月

奈良県 渡辺 富子

大阪市 川久保 睦子

高槻市 指宿 千枝子

和歌山市 上地 登美代

米子市 光井 玲子

東かがわ市 原 賢

神戸市 木村 貴代子

出雲市 石倉 芙佐子

羽曳野市 塩満 敏

飯の世を曲がりくねって来た卒寿
 子供らが親を成長させてくれ
 道祖神時空を越えて笑み給う
 時々は回り道してわれを見る
 追う夢がある内惚けちゃいられない
 天眼鏡のぞいて薬確かめる
 箱入りのメロンが届く筈がない
 自分史の真ん中あたり花の章
 取り敢えず今日一日は無事でした
 苦しさを吐き出したのに聞いてくれ
 夢実現残りの命楽しもう
 どこへやったお前知らんかといつも
 パンドラの箱開けさせぬ護憲する
 置き場所がどうのこうのと妻の愚痴
 早朝に起きてカボチャに浮気させ
 健康に感謝笑顔が湧いてくる
 花達に背中おされて生きのびる
 休肝日つくったことはいい事だ

愛知県	米子市	香芝市	黒石市	和歌山市	熊本市	大阪市	熊本市	大阪市	高石市	岸和田市	大阪市	寝屋川市	高槻市	松江市	鳥取市	寝屋川市	東かがわ市
早川	中井	大内	相馬	喜田	高野	古今堂	岩切	神夏磯	浅野	岩佐	岩崎	高田	乙倉	小川	近藤	富山	神保
遡行	ゆき	朝子	一花	准一	宵草	蕉子	康子	典子	房子	ダン吉	公誠	博泉	武史	注湖	佳子	ルイ子	坊太郎

ペン先でわたしの殻を突き破る
命きらきら煩惱が捨てられぬ

砂漠化が進む大地も魂も

泣き虫もやんちゃも描く未来像

無防備を守りの武器として生きる

特攻の年齢を数える親も古い

してもらうよりも自分で出来ること

光より影のドラマに味がある

くたくたの私支える靴の底

こだわりを脱いで余生が軽くなる

母のほほ両手で撫でる抱くように

来た孫にくせ真似られてこそばゆい

いくつもの扉をあけてゆく炎

無人駅から東京へ行ったきり

ペコちゃんの瞳信じていいかしら

玉などに誰が混じるか俺は石

失ったゆとり花屋でとり戻す

爪を切るテネシーワルツ聞きながら

松江市 三島 浜 丘

松原市 玉置 重 人

堺市 村 上 玄 也

神戸市 山 口 光 久

豊中市 江 見 見 清

豊中市 坂 上 高 栄

鳥取市 春 木 圭 一 郎

西宮市 奥 田 み つ 子

東大阪市 笠 井 欣 子

河内長野市 水 谷 正 子

和歌山市 松 原 寿 子

大阪市 渡 部 さ と 美

鳥取市 徳 田 ひ ろ こ

堺市 志 田 千 代

シドニー 坂 上 の り 子

河内長野市 坂 上 淳 司

吹田市 山 本 希 久 子

寝屋川市 籠 島 恵 子

心臓が止まったほどの出合いです

奥さんが選って離れた蟹を買う

空仰ぐ蟻と私の武者ぶるい

初盆にお供えをする愚痴の山

五十年ずつと愛した訳じゃない

順調な老化と診られほつとする

産んでくれ産まれてくれてありがとう

箸文化心安らぐ節料理

無茶を言う人だが金はすぐに出す

六十年添うと夫婦も貴重品

夕焼けに今日の迷いを放りこみ

広重につげ口したい富士のゴミ

値打ちでは妻は空気の次くらい

言われてストレス言えないでストレス

週刊誌一冊分の長電話

どなたの辞書もボロボロになってるか

白無垢のころに戻る襖して

もくろみの芯が沖ってゆく大樹

勲章の匂いもせぬが生きている

大阪市 榎本舞夢

鳥取市 武田帆雀

寝屋川市 太田とし子

唐津市 樋口輝夫

大阪市 小泉ひさ乃

横浜市 菊地政勝

堺市 矢倉五月

岸和田市 井伊東吉

守口市 石森利昭

大阪市 中村叡子

西宮市 井上松煙

西宮市 緒方美津子

大阪市 池上清治

堺市 奥時雄

大阪市 升成好

鳥取市 中原汲香

鳥取市 中原みさ子

鳥取市 中原諷人

鳥取市 森山盛桜

麻生路郎句抄

(句集「旅人とその後の作品」から)

「川柳の社会化運動と一冊のこの句集。私にも多くの夢がある。私の一生はまだピリオドを打たれていない。せめてそれを力ぐさに歩き続けよう」。

右は昭和三十八年秋、川柳生活五十年記念として、路郎先生の手によって発刊された句集「旅人」の巻頭にある先生の自序の一節である。

「旅人」以後に遺されたたくさんの句の中から、到底亡失してはならない百句を追加拝載、ここに「旅人」普及版刊行に至ったのである。

—中島生々庵(昭和五十二年)



志賀高原にて(昭和34年)
麻生路郎・麻生葭乃
写真提供 西出風楽理事長

人生の雑音

二階を降りてどこへ行く身ぞ

見渡すとユダのこころをみんな持ち

天井にいつまでおさへられて生き

往来で夢を見てゐる男にて

大臣になれぬことだけわかつたり

紙屑をまるめてすてるに等しき

お元日坐るところへ坐らされ

居候もおんなじやうに家をあげ

往診の誤診を飯を食ひながら

戯れに死ねればこころやすからん

今日も店にゆきたるのみ杓のほこり

ひとり立てば風ふところに入りにつけり

無情とや猫も錦魚も死んでみせ

川柳塔碑合祀祭法要

於高野山大靈園

十一月十日、曇天ながら雨には降られず、例年のような冷えもなく、淡い紅葉の中、ご遺族様を併せ二十二名で第十九回の合祀祭が行われました。
(西内 朋月)

囀目吟

合祀者は帰ってほしい人ばかり
紅葉賞で亡き人偲ぶ高野晴れ
みつ子 楓 楽



高野山住職による読経



法要参加者

新合祀者
黒川紫香・澤裕子・
安本晃授・沖浜正
宏・乾喜与志・門谷
たず子・井上直次・
石川侃流洞・田中正
坊・藤岡花梢 以上
十名
御供養拝受(敬称略)
安本さん・乾恭朋・
田中千代子・迫之上
澄子(黒川)・沖浜
忠枝

先輩に今年も会えた合祀祭

塔の碑の前で先達偲ぶ秋

散りかかるともみじに集う俱会一処

雲海のはるか師の顔友の声

東から西に向かっているこの世

紅葉に一期一会の高野山

われもまた何れ祀らる高野山

正坊さん眠る高野は深い秋

香煙立つ高野の森に柳友眠る

秋冷の世界遺産よ合祀祭

阿茶せんせ逢いに来ました高野山

紅葉の高野と偲ぶ合祀祭

たもつ

玄也

朱夏

美籠

恵子

瑠美子

東吉

ダン吉

昭

富美子

茶々

朋月

第五十九回 大阪川柳大会

平成十九年十一月十八日(日)

於 アピオ大阪
出席者 一五七名

秀句(太字本社同人)

「電車」

岩田 明子選

指揮棒もぐったりして終電車

柴本ばつは

「籠」

長浜 美籠選

どこまでも独りを通す乱れ籠

森中恵美子

「誘う」

坊農 柳弘選

誘われるままに月まで花摘みに

播本 充子

「仲間」

筒井 祥文選

風の神も補屋も仲間ではないか

森中恵美子

「温暖化を詠む」(詠み込み不可)

前田咲一選

秋風が吹いてもヘソを出している

みぎわはな

「しぶしぶ」

嶋澤喜八郎選

しぶしぶしぶしぶと人間を終わる

森中恵美子

「磨く」

田中 新一選

刃こぼれを磨くと潮が満ちてくる

小谷 小雪

愛染帖

新家 完司 選

河内長野市 坂上 淳司

飲兵衛が銚子の口で遠眼鏡

(評) 酔っぱらうと知能指数も行動も三歳児ぐらゐになつて、おもしろいことをする。さて、お銚子の口から何が見えたのだらう。

三田市 上垣キヨミ

石段を眺め下から掌を合わす

(評) 足が痛い人は石段の下からでも構わない。体の不自由な人はベッドからでも構わない。祈りが真摯なら、どこからでも構わない。

高槻市 佐甲 昭二

妻が留守ゆつくり耳を休ませる

(評) いつも同じ愚痴ばかりなので、聞き流していると「聞いているのー」と突っ込まれる。妻の留守は耳のみならず五感の休養日。

大阪市 森田 明子

絶不調五つまとめて歳をとる

(評) そのような日もあるが、絶好調になると一度に十歳も若返る。肉体年齢はやむを得ないが、精神年齢は気の持ちよう。

吹田市 大谷 篤子

ブランドの靴も片側減っている

(評) 高価なブランドの靴といえども、片減りすると貧乏くさく見えちゃう。大切に履いていたのに、まことに残念なことである。

倉吉市 松本よしえ

生きている間は立つて歩きたい

(評) 百歳まで歩けたら、病気で倒れても長思ひせずポックリ逝けるだらう。そのためにも、がんばつて長生きしなければならぬ。

三田市 北野 哲男

過労死はないが過遊死ならひよつと

(評) 遊ぶために生まれてきたのに、食べるために働いてきた前半戦。これからは思ひ存分遊び回つて、そして優雅に「過遊死」だ。

枚方市 丹後屋 肇

気に喰わぬ人も一票持っている

(評) 泥棒も詐欺師も、怠け者も馬鹿者も、みんな同じ重さの一票を持っている。それが民主主義。独裁政治よりマシとするか。

和歌山市 上地登美代

不祥事をした大臣の名は覚え

(評) 大臣がテレビニュースの主役になるとロクなことがない。こんな奴等に高い歳費を払っているのかと思うと、本当に腹が立つ。

和泉市 千葉 武

何したか知らねど生きて年の暮れ

良くなれば何覚だつていいんだよ

京都市 高島 啓子

卵生み終えると廃鶏と言われ

加速度のつかないように下る坂万華鏡よりおもしろい顕微鏡

和歌山市 古久保和子

タンゴにジルバ踏まれた足は踏み返す

切り干し大根君もいい味出してゐね
結局はシンブルがいいボールペン

松原市 玉置 重人

大丈夫痛い痛いと言つてはる

噂ではすぐに別れる派手な式
ハローニカ上手な人は戦中派
保釈金ボンと払えるのが不思議

弘前市 高瀬 霜石

飲むために生まれたような夫です

更年期のお薬でしたパスポート
隣国のよしみ黄砂まで貰つ
食洗機で洗つた皿をチェックする

鳥取市 岸本 宏章

押入れの奥から三丁目の夕日

ATMに叱られながら生きている
人ちがいに必ず返すご挨拶
喫煙の歯科医のにおいマスク越し

寝屋川市 北田ただよし

柿熟れて村は祭りの色になる

松江市 津川 紫見

命がけて生んでもらった命です
鳥取市 岸本 孝子

久々のお世辞にころり乗せられる
三田市 堀 正和

おばちゃんの手備軍騒ぐ女学生
大阪市 古今堂蕉子
枚方市 海老池 洋

嫌がらせの音しか出せぬクラクシヨ
交野市 山川日出子

料理屋の紅葉をそつとハンカチに
海南市 三宅 保州

遠路はるばるご苦労さまでした切手
操縦を誤ったのか流れ星
吹田市 早泉 早人

過疎の町呼んだ木霊が返らない
逆転を狙う策あり帰郷する
鳥取県 細田 裕花

換気扇悩みの種が絡み付き
叩いたらどんどん落ちてくる偽装
西宮市 藤本 直

水抜いた風呂人生の垢少し
長針がいつ動くかと眺めてる
姫路市 古川 奮水

とまり木に土手焼きで呑む温かさ
もみじ狩り敬老会は昼の酒
和歌山市 木本 朱夏

団塊のひとり羅漢に紛れ込む
寂しさが埃のようにつもる秋

金銭に執着のある黄の財布
話好き他人の話聞いてない
今治市 渡邊伊津志

いろいろと聞いた話を整理中
頷いて呉れている人を見て話す
和歌山市 喜田 准一

老母介護長女の気概見せてます
若い日に恋女房と言った夫
和歌山市 根田よしこ

赤ちゃんのおんぶ姿が微笑まし
次々と有ってはならぬ事が起き
横浜市 金森 徳三

バツカスとじやれる淋しくなんかない
大丈夫自分ごまかすのは上手
榎原市 居谷真理子

定年後もつい足が向く通勤路
さばさばした妻にうじうじした夫
堺市 村上 玄也

古いも見放す神に近い歳
聞き上手誰でも出来る人助け
豊中市 吉田あずき

七五三文化を守る貸衣装
陽を吸ったフトンで悪い夢ばかり
池田市 上嶋 幸雀

戦い勝ったゴキブリが顔見せぬ
私を謙虚にさせたダンゴ鼻
倉吉市 野口 節子

軒下に三年転ぶビール瓶
大阪市 岩崎 公誠

病院へ行けば病氣の人がいる
紀の川市 辻内 次根

青い目の子等に手ほどきキュウリ巻き
豊中市 安藤寿美子

天気予報のウソツキ傘は杖にする
しみじみと禪問答のような寂
米子市 政岡日枝子

通勤のどこに落としたのか元氣
精一杯生きてきたのにまだ貧し
堺市 加島 由一

盗つ人に気付かれぬようかける鍵
思い出すたびに色づく里の柿
唐津市 樋口 輝夫

画用紙をはみ出す生き方もあるな
神風を信じたことは伏せておく
豊中市 水野 黒兎

目には目を私も嘘をまぜておく
西子市 黒田 茂代

ゴキブリとカラスの知恵に負けられぬ
お天道さまに顔向けられるかと自問
西宮市 牧瀬富喜子

病院へ行けば病氣の人がいる
紀の川市 辻内 次根

青い目の子等に手ほどきキュウリ巻き
豊中市 安藤寿美子

天気予報のウソツキ傘は杖にする
しみじみと禪問答のような寂
米子市 政岡日枝子

通勤のどこに落としたのか元氣
精一杯生きてきたのにまだ貧し
堺市 加島 由一

盗つ人に気付かれぬようかける鍵
思い出すたびに色づく里の柿
唐津市 樋口 輝夫

画用紙をはみ出す生き方もあるな
神風を信じたことは伏せておく
豊中市 水野 黒兎

古里へ急ぐ喪服を携えて

吹田市 穴吹 尚士

ポケットの小銭で一日を暮らす

八尾市 高杉 千歩

バッテリーと噂が絶えて計報欄

米子市 中井 ゆき

引力に逆らう私ジャンプする

海南市 小谷 小雪

無意識に足を踏んばる着陸時

奈良市 岩本 浩二

姉妹ですかと言われて娘苦笑する

岸和田市 土橋 房枝
鳥取市 夏目 一粋

いただいた松茸一つ大波乱

香芝市 大内 朝子

化粧する皮を被ったしやれこうべ

大阪市 谷口 義

一日の終りに母の手を握る

堺市 羽田野洋介

銭湯の出会いあの人誰だった

松江市 相見 柳歩

悟れない滝にうたれりや濡れるだけ

美作市 福原 悦子

濁流の川は他人の貌となり

宇部市 平田 実男

柳歴も結婚歴も五十年

豊中市 神野宇乃子

浮き沈み女の指は太くなる

さみしさを溜めてる小指薬指

和歌山市 たむらあきこ

十代に習った筆のまま老いる

和泉市 横山 捷也

ネクタイが少し歪んでいる魅力

藤井寺市 太田扶美代

賞味期限わたしの舌を信じます

芦屋市 黒田 能子

孫ほどの小娘なのに騒ぐ胸

唐津市 坂本 蜂朗

がらくたを集めていたが投げちゃった

鳥取市 土橋はるお

向き合って話すことない人と居る

加東市 中上千代子

相合傘したくて雨の紅葉狩

奈良市 矢野 良一

新聞で包んでくれた温か味

熊本県 高野 宵草

思い出し笑いを日記から貰う

大阪府 澤田 和重

弾みすぎケーキ皿割る誕生日

堺市 西村りつえ

文系と理系に割れた孫四人

香南市 桑名 孝雄

秘めやかに秋しのび寄る身の上に

米子市 白根 ふみ

ストレスの受け皿で妻老い重ね

吹田市 太田 昭

息を潜め隣の喧嘩まく夜長

和歌山市 田中 みね

後れずに忘れずに来る誕生日

東大阪市 箕井 欣子

想い出も恋もどどん歳を取る

和歌山市 楠見 章子

中流目指すわが家発展途上中

高槻市 傍島 克治

売れぬ土地草は気兼ねもなく育つ

鳥取市 有沢せつ子

駆け足で過ぎた年男であった

美作市 小林 妻子

針を持つ幸せ今日も着物縫う

寝屋川市 富山ルイ子

白い飯おかず何でもよい世代

尼崎市 山田 耕治

今日もまたノート開いてみるばかり

鳥取県 岩崎 和子

百円のノートいちばん性に合う

橿原市 安土 理恵

若き日の罪類かむり経を読む

唐津市 井上 勝規

故郷の顔した柿を買ってくる

松江市 松浦登志子

絶品の煽てに乗って豆を煮る

尼崎市 小池 幸子

真つ白なスケジュール帳眺めてる

大阪市 井丸 昌紀

秋風にふわり来た蝶ふわり消え

鳥取市 近藤 秋星
藤井寺市 若松 雅枝

おばちゃんの集い陽気な唄になる

美作市 山本 玉恵

息吐いてはいて石段とのいくさ

鳥取市 倉益 一瑠

三食昼寝自分の影が褪せている

大阪府 川原 章久

出来ちゃったらしやあないなあと許す親

池田市 栗田 久子

正直に男が軽く泣く時世

海南市 堂上 泰女

卑下もせず威張りもしない子が自慢

大阪府 萩原 大朔

早合点させて儲ける悪い奴

紀の川市 木村 徑子

変わりにくいかわりにないぞと子のメール

鳥取市 吉田 弘子

六十七億の一人と添って五十年

大阪府 伏見 雅明

スタンドに飛びかう野次を聞きに行く

大阪府 桑田ゆきの

思い出を溜めた着物をリサイクル

立川市 柏野 遊花

飢えをしのいだ芋が品格上げている

堺市 和田つづや

不便でもあるね奉行のいない鍋

三等星いつも私をみつめてる

八尾市 宮崎シマ子
鳥取市 山岡 紀子

院号へ寄付もでつかく付いてくる

高槻市 富田 美義

脳と足鍛えて他人を当てにせず

大洲市 花岡 順子

優等生と比較されては堪らない

堺市 矢倉 五月

薬より娘の気遣いが効きました

大阪府 福岡 末吉

二人旅柿の葉寿司を膝に置き

和歌山県 森下よりこ

ごはんおいしい病と縁が切れたから

鳥取市 岩崎みさ江

ウイルスも健気に変化して困る

大阪府 神夏磯典子

慰めに傷つけられる自尊心

東大阪府 北村 賢子

余生もう素顔に戻り生きてゆく

鳥取市 中宇地秀四

食べ物も家も政治も皆偽装

羽曳野市 吉川 寿美

子に何も残すものなしこぼれ萩

奈良県 渡辺 富子

万歩計へ膝が文句を言っている

豊中市 谷川 勇治

柿ほめて三つもらった散歩道

執燭が恋しくなつてくる冬至

鳥取県 竹信 照彦
東大阪府 中岡 妙

子に触れる娘優しい手になつて

岩出市 村中 悦男

秋の空下校の声を吸いあげる

和歌山府 福本 英子

ピーマン一袋今日で三日も食べている

高槻市 片山かずお

愛しさについ口を出し嫌われる

堺市 山本 半鏡

極楽の居眠り寂聴きながら

河内長野市 村上 直樹

低気圧でかいぞドアの閉まる音

西脇市 七反田順子

まだ若いうろろできるネオン街

砂川市 大橋 政良

自分史に足踏みのおと風の音

河内長野市 針生 和代

ポキポキと骨が老化を歌い出す

藤井寺市 鈴木いさお

ナツメロを唄えば昭和魅る

大阪府 奥村 五月

ひと言にくつと我慢の会議室

堺市 志田 千代

うますぎる人ひとりいてはもらない

鳥取市 津村 律子

惚けぬため没句おそれず張りとする

誹風柳多留一一篇研究 29

伊吹和男・山田昭夫

増田忠彦・山口由昭

小栗清吾

清 博 美

196 子の寐びへよく日夫婦けんくわ也

伊吹 朝起きると子どもが鼻をグズグズさせている。どうやら寝冷えをしたようだ。お前さんが雨戸を開けたままにして置いたからよ、おのれが布団をかけてやらなかったからだし、たちまち夫婦喧嘩がおっぱじまった。まだ若い夫婦なのだろう。

山口 賛。かるくていかにも川柳的。

小栗 賛。どっちもいい親です。

清 賛。

197 百両はぶらついて居てとかまらず

伊吹 富籤の百両。箱の中の一の富の木札を

刺す雛の先が、ぐらぐらして一向に自分の買った紙札の番号に行き当たらない、というところか。だいたい一般に百両から百五十両富の興行が一番多かった。谷中の感応寺・目黒不動・湯島天神を江戸の三富とする。例句一句目は、謡曲「東北」の「神明仏陀の冥感に至る」の文句取。

神明仏陀の冥感で百両

傍二 7

百両を錐で突つく谷の中

五四 14

山田 ぶらつくは、「③すぐ前にちらつく」

〔日国〕。

一の富の百両が目前にちらついているのに、つかまえることが出来ない、ということでしょう。

一のとみどこかのものがとりハとり

一五 11

山口 山田説賛。時に番号は近くまで行くのだが。

小栗 同右。万句合（安・玄・満・之）は「ぶらついて居て」。「すぐ前にちらつく」とされる山田説の通り。

清 同右。

198 七くさに遣りても長い爪をとり

伊吹 七草爪といって、一月六日の夜から薺を入れた水や、または七草の当日の薺の湯がき汁に指を浸して、邪気を払うため七日に爪の切初めをする習慣があった。

なにかと便利なので小指などの爪を長く伸ばしていた遣手も、縁起ものことなので切ることになる。

七くさに遣り手もおしいつめをとり

一四 26

やりてか爪を笑ふ七種

武一 74

山田 「出す事は舌をも出さぬ」ようなケチな遣手、爪を切るなど思いもよらぬが、七草爪なら仕方がないので。

山口 賛。長い爪Ⅱ「爪を延ばす」は欲深いこと。従って欲深い遣手でさへ。

小栗 山口説賛。「爪を延ばす」「爪が長い」（いずれも欲が深いことのとえ）を踏まえ

て作った句で、実際に遣手の爪が長いかどうか、爪を切るのを惜しむかどうかは関係ない。

清 同右。

199 わつくと泣てかたみを持って行

伊吹 悲しかったのか、形見が欲しかったのか、遺族としてはどちらかわからない。

泣なからまなこをくばるかたみわけ

一三九

なき〜もよい方をとるかたみわけ

一七四

山口 賛。おかしい。

小栗 賛。たしかに、おかしい。

清 賛。

200 なんにしろつきやか喰った跡の事

伊吹 搗屋は、店構えと大道の二種類あるが、この句の場合は大道の貨搗米屋。臼をころがし杵を持ち歩いて、呼び止められたり、得意先を回ったりして、食事は雇い方で出し、重労働であるためその量も多く、動物性蛋白質として魚なども添えた。たくさんの食事を出したのにすつかり無くなり、さすがは貨搗屋の喰いっぷりだ、と雇主の感想。

げつふうをしてからつきや二はいくい

六二四

山田 賛。「おひつ」が空になったのを見ての依頼主の言葉でしょう。

増田 賛。朝炊いためしの残りが、家内の昼飯には十分過ぎるほどにある。炊き足しをすべきかどうか、下女などが質問するのに対する家の者の言葉。

山口 前説賛。感心もするが困つてもいる。

小栗 増田説賛。

清 「搗屋が食った跡の事」である。伊吹・山田説に賛。

山田説に賛。

201 とむらいにむす子おこわにかけられる

伊吹 お強に掛けられるは、だまされる。落語「明烏」に出て来るような、うぶな若旦那のたろう。葬式帰りに大一座を組んで吉原へ行くのに、皆になんのかのと言いくるめられ、まんまと一緒に連れて行かれた息子。ではあるが、これからやみつきになりそうである。

くろ豆のおこわにむす子かけられる

増田 賛。縁語がミソ。

山口 賛。黒豆のおこわは葬式に付き物。落

語「明烏」に出て来るような、うぶな若旦那のたろう。葬式帰りに大一座を組んで吉原へ行くのに、皆になんのかのと言いくるめられ、まんまと一緒に連れて行かれた息子。ではあるが、これからやみつきになりそうである。

くろ豆のおこわにむす子かけられる

増田 賛。縁語がミソ。

山口 賛。黒豆のおこわは葬式に付き物。落

語「明烏」に出て来るような、うぶな若旦那のたろう。葬式帰りに大一座を組んで吉原へ行くのに、皆になんのかのと言いくるめられ、まんまと一緒に連れて行かれた息子。ではあるが、これからやみつきになりそうである。

くろ豆のおこわにむす子かけられる

増田 賛。縁語がミソ。

山口 賛。黒豆のおこわは葬式に付き物。落

語「明烏」に出て来るような、うぶな若旦那のたろう。葬式帰りに大一座を組んで吉原へ行くのに、皆になんのかのと言いくるめられ、まんまと一緒に連れて行かれた息子。ではあるが、これからやみつきになりそうである。

くろ豆のおこわにむす子かけられる

増田 賛。縁語がミソ。

山口 賛。黒豆のおこわは葬式に付き物。落

語に「強飯の女郎買い」もある。

清 賛。

202 月夜からとうくやみへいこのばし

伊吹 江戸時代の買掛金の支払は、七月中旬の盆と十二月末の暮の年一回。金回りが悪く、盆の支払の都合がつかないので、なんとか暮まで待つて貰うようにお願いした。それを月夜から闇夜へと表現した句。それでもなかなか払えるものではない。

いひわけをきかぬハやみと月夜也 一〇一五

山田 賛。月夜は十五日、晦日は闇。

清 賛。

203 帰朝して一のはなしハ蜘蛛の事

伊吹 吉備真備の句。遣唐使として入唐し、そこで野馬台の漢詩を読めと試されたが判らず、長谷の観世音に念じたら一匹の蜘蛛が降りてきて教えてくれた、という伝説がある。だから我国に帰ってきて一番にした話は、何はともあれ蜘蛛のことだっただろう、という想像句。

御帰朝に取あへす先蜘蛛の事 一五五六

清 賛。

御帰朝に取あへす先蜘蛛の事 一五五六

清 賛。

御帰朝に取あへす先蜘蛛の事 一五五六

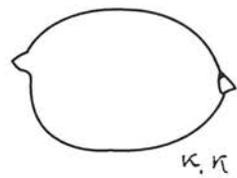
清 賛。

御帰朝に取あへす先蜘蛛の事 一五五六

共選欄

檸檬抄

(薰風書、カットとも)



「これから」 鈴木公弘選

これからの人ですあなた頑張って
動きたい気持ちだけですこれからは
団塊のまだこれからと言う気遣
老いた身にこれから波がきつくなる
これからを築く二人におめでと
長いとも短そうとも十年後
これからという切り札がある若さ
これからを生きる枕を低くして
妻の手にこれからもどるプーメラン
これからはつまらぬ事をして暮らす
これからはゆつくりしたい砂時計
見送ってまだこれからが見えて来ず
これからは木枯らし吹いて寒くなる
問題はこれから生きる子の未来
これからと言っても先は見えてる
案するよりまずこれからへ乗ってみる

高石市 浅野 房子
門真市 矢阪 英雄
府中市 藤岡ヒデコ
鳥取県 岡村 孝明
京都市 三宅 満子
寝屋川市 森 茜
和歌山市 福井 菜摘
大阪市 津守 柳伸
松江市 津川 紫晃
京都市 高島 啓子
吹田市 木下 敏子
和歌山市 堀 富美子
鳥取県 飯野 葛子
シドニー 坂上のり子
八尾市 村上ミツ子
鳥取市 松岡 照美

「これから」 西口いわゑ選

子年から未知の世界に挑みます
フラダンスで余分なものは揺り落とす
これからが老いて夫婦の茶漬味
これからのお国のためと道徳科
これからは社長必須の謝罪学
これからは頑張らないで生きよつと
平行線これから先にある火花
これからをつらつら思う梅の種
自然体ですこれまでもこれからも
これからの人生行路ひらがなで
この指に生まれこれから鬼こっこ
どうぞよろしく植山へビクニック
これからはつまらぬ事をして暮らす
胃も肺も切ったのだからタバコ吸う
これからを全部譲って三世代
句読点さてこれからの策をねる

生駒市 飛水ふりこ
立川市 柏野 遊花
岩出市 村中 悦男
唐津市 仁部 四郎
香南市 桑名 孝雄
弘前市 福士 慕情
西宮市 片山 忠
羽曳野市 吉川 寿美
西予市 黒田 茂代
大阪市 神野千恵子
犬山市 吉田 幸子
羽曳野市 徳山みつこ
京都市 高島 啓子
堺市 奥 時雄
美作市 小林 妻子
松江市 三島 淞丘

手術成功生きなおす気になりました
出直しのチャンスだレモン絞り切る
これからもひとり暮らすと意地を張り
本を閉じさあこれからはお昼寝よ
茶柱が立ったこれから籐を買っ
これからの日本は問わぬ試着室
紙人形作りつづけるこれからも
家計簿を手にこれから誓わされ
これからも蟻にならないキリギリス
大根がこれから華になる季節
催促へこれから丁度出るところ
嫁がせてこれから先も大変だ
散りぢりに暮らしこれから闇の坂
明日のこと考えながら寝てしまい
五分前これから勝負仕掛けます
欠け茶碗これから先が心配だ
終章のさあこれからを朱と燃える
蒙古斑バトンタツチはまだ続く
飲みネー食いネーこれから先に尻

秀句
軸吟

東京都 岸野あやめ
枚方市 小林 わこ
泉佐野市 稲葉 洋
大阪市 榎本日の出
鳥取市 津村 律子
唐津市 仁部 四郎
鹿児島市 五反田 榎子
河内長野市 村上 直樹
大阪府 森田 明子
堺港市 遠藤那珂子
竹原市 石原 淑子
鳥取市 中村 金祥
大阪市 岩崎 公誠
大阪府 高田美代子
藤井寺市 齊藤 苺
弘前市 米子市 吉田 陽子
香芝市 大内 朝子
弘前市 高瀬 霜石
鳥取市 武田 帆雀
藤井寺市 太田扶美代
豊中市 江見 見晴
大和郡山市 坊農 柳弘

これからは母に抱かれて眠ってる
これからは軽いつづらを選びます
これからは半円を描き生きて行く
これからは是非主義で行くつもり
これからの期待してます花の種
陽だまりの噂これから風に乘る
削除キー押しこれから頑張ろう
これからも挑む鈍刀研いでいる
今一度生きていく捻子巻いてみる
古希過ぎてもうこれからはロスタイム
これからだそんな呪文をくり返し
これからもやっぱり欲しい忙しさ
これからはうつらうつらの夢になる
これからの闇にいつぱい窓あける
これからは私の好きな色で咲く
これからは分らないから生きられる
これからの私が映る万華鏡
これからは賞味期限を遵守する
これからも個々の時計で一つ屋根

秀句
軸吟

八尾市 赤木 妙子
東大阪市 森下 愛論
今治市 渡辺伊津志
大阪市 川端 一步
尼崎市 長浜 美籠
東京都 清原 悦子
札幌市 三浦 強一
河内長野市 山岡富美子
枚方市 小林 わこ
吹田市 穴吹 尚士
大阪府 升成 好
池田市 上山 堅坊
寝屋川市 太田とし子
八尾市 宮西 弥生
和歌山市 古久保和子
鳥取市 岸本 宏章
寝屋川市 籠島 恵子
八王子市 播本 充子
三田市 久保田千代
芦屋市 黒田 能子
堺市 加島 由一
大阪市 谷口 義

寝たままで願うと神に見放され

内緒内緒きゅうり封じの願掛け

願いごとひとつにしほり鈴を振る

一晚寝ればまた変つてる願いごと

病巣を取つて年金蘇生する

初もうで願うは暮れのジャンボ籤

願わくば天国までの道標

願いごと口に出したら崩れそう

鰐口を力一杯叩きます

お願いの筋に天の邪鬼がいる

願望を見透かすように誘い水

願望の椅子若いのが来て座る

今年こそきつときつとの鈴を振る

願い事バイトの巫女に手に合わす

願いごと叶つて青い鳥になる

住

お守りをグツと握っているピンチ

風車他力本願過ぎないか

困つたら鰻私のナンデモ教

中吉のあたりで何も言いません

散骨希望リサイクルとはいえないが

人

泣き落しもう知っている三歳児

明日願う男は荷物おろさない

地 天

もう無駄と知つても母は願かける

離農離村なくなるように鎮守さま

軸

米澤俣子

一粒

善信

菜摘

日枝子

充子

いさお

強一

明子

藤朗

妻子

典子

正雄

ばっは

孝一

婦美子

恭昌

碧

みつこ

ふみ

霜石

正和

美義

着物

島 ひかる選



初詣で少し派手目の帯にする

はんなりと着物姿はみな優し

人形の頃は着物で屠蘇を受け

屠蘇を酌む妻の和服へ惚れ直し

お着物で是非とゲストを困らせる

溜息を置いてきました着物展

見捨せずに着物も一度着てみよう

嫁ぐ娘のついでに妻も買う着物

ゆかた着る度にはあちゃん呼びにゆく

わたくしを見て見て見せとお振袖

よそ行きの声で晴着を見せに行く

幾度目の見合い振袖板に付き

着物地のドレス着こなす長い脚

七癖を包んで軽い裾捌き

着物の日好きなどんねに手は出さず

パリコレの喝采止まぬ日の和服

お召物までも花咲く華道展

着物着て妻よそ行きの顔になり

帯ボンと叩いて暖簾出す日暮

帯をとき茶漬けサラサラ生き返る

戦時中母の着物を食べました

米になった着物どうしているだろう

形見分け祖母の着物を服にする

古着からパッチワークの炬燵かけ

亡母の想いこもる着物は切り裂けぬ

畳紙の膚になつてゐる着物

虫干しの着物と昔話など

綿入れの羽織へ母の温み抱く

和服着た祖母の背筋がのびている

銘仙に明治の意地を覗かせる

袖通す母の着物が蘇る

着物きる背筋しゃきつと日本人

紅葉へ着物が似合う古都の秋

炎と燃えた女を包む鮫小紋

燃える恋十二単のもどかしさ

血の濃さを確かめに行く喪の羽織

造宮に白装束の匠たち

住

表彰状着物も晴れの陽を浴びる

絹ものはなかつたははの古筆筒

生計を支えた亡母の仕立物

三世代好きな着物で初詣で

代表で父に着物を着せて屠蘇

人

ははに似た着物の人を尾行する

振袖に未来の虹を抱く二十歳

地 天

しつけ糸きらぬ羽織と白袴

軸

野仏の雪のきものを素手で掃く

妻子

智加恵

のり子

登美代

ミツ子

信子

シマ子

忠

悦子

朝子

可住

ひかり

時雄

岳水

隆盛

彩子

愁女

東吉

ルイ子

四郎

霜石

菜摘

土橋

螢

初歩ノ教室

題一 絵馬

三宅 保州

今年もご投句いただいた皆さんの句とともに勉強させていただきます。

お題の、「絵馬」の由来は、我が国では古くから馬は神の乗り物として神聖視され、呪術的儀礼として生馬献上の習わしがあったものが、馬形、板立馬とだんだん簡略化されて、現在の絵馬になったものだそうです。

神様の死角で朽ちる絵馬の数 岳水
春の絵馬春の願いがたんとある 重人

【総評】

絵馬に合格等を祈願するという句では、平凡な発想過ぎます。同じ祈願を詠んでも、そこに意外性や劇的な展開と表現の非凡さがあれば佳句が生まれるものです。そのことを常に心掛けて作句したいものです。

【添削・批評句】

次の四句は「絵馬」と解りにくいからい。

原 好き勝手書いて叶えば安すぎる 裕之
添 好き勝手書いて叶えば安い絵馬

原 匿名で書き連ねてもきけません 宣子
添 匿名の絵馬に返事が出来ぬ神

原 今年のはスーパーマウスが良く売れる 紀雄
添 今年のはスーパーマウス売れる絵馬

原 願いごと書いて隠した日も遠く 冷子
添 裏向けて絵馬を吊した青春譜

次の四句は誤字脱字等の絵馬を詠んだ句ですが既に同想の句が何句かあります。

原 絵馬結ぶ神も読めない誤字があり (細)節 子

原 絵馬の誤字神様困る願いと 柎子

原 誤字脱字書かれた絵馬は虚ろなり 道子

原 神様もあきれられる絵馬の国語力 千代子

次の五句は、発想が常識的で平凡な感が免れないので、少し発想を変えてみました。

原 祈願した絵馬が賑賑しく揃う 絹子

添 おびただし絵馬もライバルだと思つ

原 絵馬かけてサクラ咲く日を待っている

添 絵馬掛けただけでサクラは咲きますか

原 入学を絵馬にたくして初詣 周子

添 入学の祈願も親に託す絵馬

原 願いこめ絵馬に何度も手を合わせ (節) 子

添 その願い無理だと言われそんな絵馬

原 絵馬つるしあとのすべては神だのみ きぬ子

添 絵馬吊っただけでは虫がよすぎます

原 御利益の無い絵馬もあり不合格 秋星

御利益の無いと不合格が重言気味。
添 不合格の絵馬の行方を知らないか

原 息子の病祈願全回絵馬奉る 雅代

何かも読み込みすぎ二十一音字の破調。

添 せめてもは絵馬に祈願の子の病

原 苦しさを絵馬にたくはつとする 正二

中へ。「絵馬に託して」で良くなります。

原 絵馬一枚重ねてたのむ恋心 那珂子

主人公をはつきり自分にした。

添 君の絵馬に私の絵馬を掛ける思慕

原 受験始まり絵馬を書く為神社へ 綾乃

破調。リズムの良い句を心掛けてほしい。

添 絵馬祈願口実にして骨休み 隆彦

原 雪積り私の祈願消えた絵馬

消えたことを強調しませんか。

添 雪積もり私の絵馬が消え失せた 堅坊

原 川柳の上達祈願しよう絵馬

添 川柳の上達祈願したい絵馬 智加恵

原 大き絵馬求めて高く神の目に

添 神の目へ大きな絵馬を高く吊る 美智代

原 絵馬だつて読みにくい字は後回し

添 読みにくい絵馬に神様四苦八苦 和

原 気の精か絵馬の杉板良い香り

添 香ばしい絵馬に効き目がありそうなの 三ヨノ

原 平凡な俸せしみて絵馬奉納

結語の納まりが悪いですな。

添 ほどのしあわせでよい小さな絵馬

原 名を伏せて恋の成就を祈る絵馬 大 朔

添 恥ずかしくて名前を書けぬ恋の絵馬 弘 子

原 縁結び受験と共に絵馬の列

添 縁結びも受験も並べられた絵馬

原 今年こそ恋成就する絵馬に書く

添 今年こそ恋の成就を祈る絵馬

原 絵馬に書く時だけ心発起する

添 絵馬に書くときは神妙だったけど

原 願い事いっぱい書いて笑われる

添 絵馬の裏まで書いてある願い事

原 願い事どれにしたらと絵馬悩む

添 願い事全部叶えてみたい絵馬

原 新しい余生を絵馬と折り合い

添 余生とや神と折り合いつける絵馬

原 大幸府の絵馬と縁に会いに行く

添 大幸府の絵馬にあやかりたく詣る

原 お受験へ道真公もご多忙で

添 お受験へ道真公もご繁忙

原 棚のすみ絵馬十一枚よう寝てる

添 棚に十二支の絵馬眠ってる

原 絵馬頼み少しは肩が軽くなる

添 神頼みの絵馬でも肩が軽くなる

原 お賽銭きばつて絵馬に掌を合わす

添 お賽銭きばりましたと絵馬に告げ

原 絵馬だけで願いかなえばラッキーね 弥 生

添 絵馬だけで願い叶えばよいけれど

【少し工夫すると佳くなる句】

原 大学の職員みんな絵馬を書き

添 学校は受験者増える絵馬を書き

原 特別にお祓い受けた絵馬にする

添 悪くはないがストレートに詠む方法も。

原 神様にお分りですか高い絵馬

添 実力の足りない分は絵馬頼る

原 入試より倍率きびし絵馬の数

添 入試より倍率高い絵馬の数

原 塾よりも神のご加護を願う絵馬

添 塾の上に神のご加護も願う絵馬

原 少子化というに変わらぬ絵馬の数

添 少子化というのに減らぬ絵馬の数

原 絵馬の数千のドラマを掛けてある

添 千の絵馬の一つひとつにあるドラマ

原 希望校絵馬三枚にしほります

添 三枚の絵馬に絞った希望校

原 神様の都合きかず吊す絵馬

添 神様の都合も聞かず吊る絵馬

原 神様は絵文字の絵馬は読めません

添 「は」の重なりが惜しい。「神様に」か「絵馬を」にしたい。

【佳句】 恋の絵馬一番奥に吊り下げる 直

願掛けを啜ってた子も絵馬を下げ 亜希子

絵馬一つ捧げ未完の夢を追う 信 子

キュービット背負う絵馬には羽根が生え 弘 泰

偏差値の低いところに絵馬吊す 宇乃子

絵馬吊すこんなことしかしてやれず 光 子

絵馬の中春駒たちが天駆ける 映 子

おみくじが吉と出たとき絵馬掛ける りこ

絵手紙を神に捧げるような絵馬 像 山

絵馬よりも神にメールをしたい子ら 徑 子

鈴なりの絵馬で支えている社 昇

絵馬吊つてもう合格をしたつもり 幹 子

【今月の推せん句】

いるいと絵馬に書き込み高斟 三浦みち代

虫がよいのか度胸があるのか、愉快な句。

鈴生りの絵馬をつないだ蜘蛛の糸 田浦 實

「蜘蛛の糸」はほんとうの蜘蛛の糸なのか、

しがらみなどの比喩なのか。味わい深い句。

ご時世か絵馬に情報保護シール 片山かずお

個人情報保護も極まれり。発想、風刺秀逸。

【私の句】

神様に背中を向けています絵馬

役割の重さに走れない絵馬よ

(登載洩れの方は役員が添削して返送します。)

秀句鑑賞

同人吟 奥田 みつ子

—12月号から

編集を担当していた平成十二年九月号まで

は毎号全ページに丹念に目を通していただいたの
その後、家人の看病に追われ、再び川柳界に
復帰しても編集から離れたのをいいことに、
申し訳ないが塔誌を隅から隅まで読むことか
ら遠ざかってしまっていた。

今、改めて川柳塔欄をじっくり読ませて頂
いて、七年前と趣が違っているのに気付かさ
れた。時の流れもあり、新しい同人も増えて
賑やかになっているのは喜ばしい。

世の中、どちらを向いてもあまりの乱れ方
に唾然として句にする気力さえ失う感じだ
が、逆に言えば、句材には事欠かない現在だ
から社会諷詠が多かった。その反面、しんみ
りとした句、皆の共感できる句、あたたかい
句もページの許す限り頂いたつもりである。
私が大切にしている路郎先生の言葉を最後に。

～麻生路郎の言葉

句はその人の心であり

十七音字はその人の姿であり

リズムはその人の呼吸である

深読みをしては胃の腑を重くする

高杉 千歩

千歩さんですか。十年前程、ある柳友か
ら「ほらまた考えすぎるから わからなくな
る」の手彩色絵はがきを頂いたことがある。
みつ子さんにピッタリと思うからと言われ、
それ以来、目のつく所に貼って自省している。

お隣の芝生もすでに枯れかかり

志田 千代

青々として、いつも憧れの的だったお隣の
芝生も万物流転の世の中、枯れかかっている。
「すでに枯れかかり」の表現に味がある。

焼きトリの串横に引きコップ酒

割り勘のレジはみんなに釣りが必要

北野 哲男

「焼きトリの串横に引き」と実にリアルに、
活き活きとした飲み屋の情景が浮かぶ。飲ん
だ後のレジは割り勘で気兼ねなく、お店の方
も小銭をちゃんと用意して……。高橋千万子さ
んの「割り勘のもつれへレジの無表情」とい
う二十年前の句を思い出す。

生きる糧に少しばかりの自尊心
哀しみの深さへ浮輪いだいた

岩崎 みさ江

「ご主人を亡くされたみさ江さんの気持、痛
いほど胸に響く。挫けそうになる心にはんの
少しいいから自尊心は大切。家族・友人の
浮輪の何と有難いことか。鈍感刀も救いに。」

MRI受けてごらんよ講事堂も

徳山 みつこ

血税を吸った自覚が無い社保庁

鶴田 遠野

満月へ遠吠えしたい税その他

山本 蛙城

この庶民の怒り・嘆き。MRI・遠吠えな
ど生ぬるい。即乗りこんで大手術したいほど
の庶民の憤懣をどこにぶつけたらいいのか。
立泳ぎしつつ世間を斜に見る

井丸 昌紀

庶民は仕方がないから、不安定な立泳ぎで
世の中を斜に見ているより他はない。

大臣の子が大臣になりはった

神夏磯 典子

老舗の味とか、学問・技芸の奥義などの一
子相伝は頷けるが、選挙の地盤・知名度など
で有利な親子が政治家になる。「なりはった」
の大阪弁が実に効果的に使われている。

窯の火をくぐって白磁透きとおる

升成 好

この辺りで一服の清涼剤のような句に出会ってホッとす。高温の火をくぐってこそその硬質な透明感。人間もこうありたいもの。

影法師へマしないかと従いてくる

早川 遊行

どこへでも従いてくる影法師は、そんな心配をしながら従ってきたのか。いじらしい。

絶滅の危慎種なんだよ人間も

柿花 和夫

朱鷺や鶴を絶滅から救う為にいろいろな手段が講じられているが、他人事ではなく人間そのものが絶滅の危機にさらされている。

軒に雀嬉しい事のありそうな

残照に吾が影のびて喜寿の道

山本 半銭

半銭さんには怒られそうだが、路郎先生のその日ぐらしも軒に雀がこぼるよ、という句を思い出した。家の豊かさとは関係なく軒の雀は嬉しいもの。残照にのびた喜寿の影も吾ながら力強い。

人情もテレビも薄くなりました

西村 りつえ

テレビの薄くなるのは有難いが、人情までどうしてこんなに薄くなってしまったのか？

避けている方へ方へと転ぶ縁

山本 希久子

神さまの意地悪！と叫びたくなるように行って欲しくない方へ方へと転がる。縁だけでなく諸々の運も。それが世の中なのか？

無理するな無理をしないでどう生きる

浅野 房子

「無理しないで！お大事に」とよく言われるが、本当に無理をせずにどう生きたいのかと考えさせられる時もある。程々に無理をして上手に休めばいいのだろうか？

父としてしかとバトンを子に渡す

海老池 洋

このように言い切れる父親がどの位居るのだろうか。父権失墜の世に心強い句である。

いつか来た径少女が秋を知った径

春城 年代

何度か口遊んでいると、自然にメロデーが浮かんでくるような句。久しぶりに昔の少女に会ったような気がする。

娘には王子僕には掠奪者

堀 正和

多くの父親はこのように感じるらしい。でも次第に打ち解けてくると良きお酒の相手として喜んだり…。結婚してから娘さんが愚痴を言えば、反対に掠奪者の肩を持つたり…。

理性とや燃える炎を折りたたむ

大内 朝子

中七から下五の表現の美しさに脱帽。前の句に自分に負ける腑甲斐なさがあるが、腑甲斐ない人には、燃える炎を折りたたむるはずがない。理性だけではない真の強さが見える。

自分にも判らぬ自分居て困る

植田 一京

自分にも判らぬ自分が居るから面白いのは…。困ると言いながら、力を貰ったり、思わぬ喜びに小躍りしたりしているのでは…。

いい予感にっこり笑顔すれ違ふ

奥谷 彩子

にっこりが来ればにっこりしたくなる

西川 和子

にこにこ懐火種持ち歩く

最上 和枝

笑顔三句。一人がにっこりすれば、その火種は皆に広がって心地良い和やかさになる。人情の薄くなった世の中、せめて笑顔だけでも絶やさず、和やかに過ごしたいもの。

父がくれたちさな畑に夢をまく

澤田 千春

「夢をまく」が素晴らしい。それもお父さんからのちさな畑、広い畑ではなくとも、夢は無限大に広がってゆくはず。

—水煙抄

秀句鑑賞

—12月号から

柴原道夫

スランプを抜けた回遊魚になつた

お静かに晩学が今羽化をする

木村 徑子

一句目。スランプを抜けて個性的に生きていくのかと思うと、集団に埋もれてスイスイと泳ぐ回遊魚になつてしまつた皮肉。とほけた表現に世相への鋭い風刺が感じられる。二句目。「晩学」が「羽化をする」という比喩が新鮮。晩学の羽化を、期待を持って静かに見つめ、その誕生を祝福しようという気になる。熟年社会をこのように瑞々しく捉えた句を読んだのは初めてだ。

丘一面的の花が叫んでいる平和

柏野 遊花

一見するとさわやかに感じるが、この句の「平和」はきれいごとの「平和」に過ぎないようだ。そもそも平和は、大勢で声高に叫ぶものではないからだろう。

着古したスーツに飾る赤い羽根

平野 あずま

政治家のキラキラしたスーツに、赤い羽根は似合わない。偽善的な胡散臭さを感じてしまふ。清楚な赤い羽根により、着古したスーツも少しは見栄えがよくなる。「飾る」が適切。ところが、何日か経って赤い羽根がくたびれてしまうと、スーツの古さがより一層目立ってしまうことになるのだが。

根性に少々しわが寄ってきた

田邊 浩三

折つるの形がだんだん丸くなる

石野 照代

老いを詠んだ二句。

一句目。根性の衰えを「しわが寄ってきた」と喻えて表現している。「少々」から、まだ精神的なゆとりのあることがわかり、それにより、ユーモアも増した。「根性にも」「も」を入れるとあざとくなつてしまふ。「根性」に焦点を絞つた点が良い。二句目。若い頃は折目のはっきりとした鋭い感じのする鶴を折っていたのが、いつのまにか柔らかかみのある鶴を折るようになってきた。折る気持ちちが丸くなったせいで鶴の形も丸くなったのだろう。「折づる」は、「折鶴」の漢字のままだよ。

台風が去つて無罪のような空

上嶋 幸雀

「無罪のような」の「ような」に注目。台風が去つた後の空は真っ青だが、空気も湿っていて、まだ少し罪を含んでいるような空だ。山の端にふくらみ出した月を見る

坂道でひとり惜しい月を見る

松尾 美智代

薄雲を静々脱いで月ひとり

藏田 光子

月三句。いずれの月も好もしく愛おしい感じのする月だ。吉田兼好は『徒然草』（二三七段）で、「椎柴・白樫などの濡れたようになる葉の上に（月光の）きらめきたるこそ、身にしみて、心あらん友もがな（≡情趣を解する友がいたらなあ）と、都恋しう覚ゆれ。」と言つたが、同様に風流心のある友とながめたい月である。

船が出るテープがひとつ切れぬまま

北田 ただよし

情景と内容とがびつたりと合った、申し分のない句。切れぬままのテープは未練の象徴。出航した船にしばらく海面を引きずられていくが、やがて海水に濡れたテープは切れて、船も遠ざかつていく。

川柳と絵画

藤井則彦

絵画の鑑賞はクラシック音楽と並ぶ私の趣味である。三十年來多くの名画に接してきたので、これまでの川柳にそれらがどう詠まれているのか、私なりに辿ってみた。

一つは、画家の名前を入れた句であるが、よく見聞きする西洋の著名な人が圧倒的に多い。やはり親しみやすく胸を打つからであろう。紙幅の関係でごく一部ではあるが、画家の年代順にみてみよう。

- スクと立つ自由の女神ドラクロー
- 田中 正坊
- 自画像のゴッホに熱く見つめられ
- 森田 明子
- ルノワールの裸婦はどこかに妻を秘め
- 尾谷 清風

モジリアニのその目の如く秋はきぬ

寺尾 俊平

モネの絵を買ったわ息が美しい

時実 新子

ムンクの絵外真つ青な雪景色

橘高 薫風

ユトリロの絵に生きている白い町

村上ミツ子

ピカソの絵見てから言葉から回り

西出 楓楽

シヤガールの青に抱かれて昇る天

木本 朱夏

また、日本の人気画家も沢山詠まれている。

北斎の富士は波間に見え隠れ

吉末 賢治

夢一描く人妻の絵は猫を抱き

藤井二三三

ゆつくりとちひろの絵から虫の声

川原 章久

六郎の絵から聞こえる祭り笛

岩屋 美明

白い道の果に夢ある魁夷の絵

高島 良

絵の題名を入れた句もある。特にモナリザを詠んだ句は抜きん出て多い。

モナリザの唇のあたりのごはんつぶ

河内 天笑

モナリザを吊つてやっぱり妻がよい

小池しげお

ゲルニカの前で呼吸を整える

嶋澤喜八郎

同じ絵の一つは脱いだマハ夫人

大澤おさむ

最後に美術館を織り込んだ句や自ら絵を嗜んでおられる句を紹介しよう。

美術館掠奪の史を誇るよう

早川 清生

オルセーで心美人になった旅

仲谷 弘子

満足感個展の隅で座る椅子

藤井 正雄

入選が生涯絵筆握らせる

吉川 道子

これからもこのような佳句に出会うたびに私の絵心がくすぐられることを期待している。

本社 十二月句会

十二月七日(金) 午後一時
アウイーナ大 阪

本年度最後の句会のお話は、いつも司会会の席に居る川柳塔理事の太田昭氏。

今年一年間の、本社句会で色々な方々が語ってきた、趣味の話、仕事の話、川柳にまつわる話、等々、多彩な顔ぶれと多彩であった話題を振り返る。

そして、本日のお話は紀行文の中の和歌や俳句の面白味や俳句と川柳の趣の違いについて、例句を挙げながら進められた。

川柳を含め、短詩文芸の奥の深さを物語るものであったが、理路整然としていて、馴れた話し振りに集まった柳人たちは、ますます川柳へ興味を抱いた事だろう。

在りし日の薫風先生と交わされたという短い川柳談義にもまた、会場は懐かしく温かい空気に包まれたようである。 扶美代記

出席は98名。

月間賞は京都市の高島啓子さんに輝く。

(司会) 美籠 (脇取り) 月子・千代

(受け) 舞夢・寿美 (清記) 直樹

席題 「晦日」 西内 朋月選

重詰めの残りて今年飲み納め (矢)五月

悔い残るばかりしよっぱい晦日そば 希久子

お父ちゃん一寸邪魔です大晦日 萬的

大晦日生きてるだけで丸儲け 保州

しめくり焼酎飲んでる晦日 美花

災難もあつたが手を合わす晦日 深雪

大晦日まだ探しもの忘れもの 希久子

晦日そばは賞味期限を確かめる 集一

フルムーン秘湯の宿で晦日そば 更紗

子が居ても結局二人大晦日 勝弘

憂さすべて水に流して晦日そば 富子

晦日そば食べて今年の暮を引く 鐘造

晦日には帳尻合わす酒のピン 弘風

せかされて散髪に行く大晦日 好

元旦に備えて飲んで寝るとする 保州

一年の罪を流して除夜の鐘 寿美

大晦日ひまな夫は映画館 千里

大晦日脱皮促す音がする 蛙城

来年も妻と聞きたい除夜の鐘 集一

大晦日その場凌ぎの傘をさす 寿美

お茶の間で笑い納めの晦日そば 一風

晦日そばは僕はうどんが好きなのに 勝弘

町工場晦日いつも灯が点り 公誠

もの忘れ言い忘れて除夜の鐘 好

ドライブは晦日避けている無職 象山

子が煮しめ届けてくれる大晦日 (奥)五月

大晦日紅白消して独り酌む 蛙城

晦日にも五・十日も縁のない無職 修

氏神のお札を変えておく晦日 啓子

反省と期待で食べる晦日そば 美籠

泣いて笑った一年の大晦日 能子

大吟醸あてにいたたく晦日そば 天笑

佳 抄らぬおせちへ妻の尖り声 幸雀

小姑がどつと帰ってくる晦日 恵子

妻の風邪でんやわんやの大晦日 一風

正月は禁酒するぞと呑む晦日 幸雀

一〇八ツ晦日に詫びる罪の数 森子

御節詰め終ってオリオン座仰ぐ 扶美代

地 年金が晦日を遠く遠くする 弘風

天 諦めて大の字になる大晦日 ダン吉

軸 ばらばらの家族が揃う大晦日 ダン吉

兼題 「びったり」 土橋 房枝選

手計りでびったり当てるお母さん (志)千代

生きたくて酒はびったり二合まで 直樹

叱られた言葉びったりだと気付く 見清

びったりの忠告耳が固くなる 葉子

町内の外灯本が読めそうだ 月子

初恋の灯が消えぬまま古稀を越え 天笑

もう一つ上を狙っている灯り 扶美代

万能細胞ヒト科の明日へ灯をともし 楓 楽

恩讐を越えた一灯から学ぶ

兼題 ヲーム 山本 義子選

この国に来て欲しいのはベビーブーム 美 義

東の間のいのちを競う流行語 雅 明

ペットブームうちに二十の猫がいる 志 千

浅田真央の真似して捻挫した妻よ 保 州

ヨン様に意見が揃う嫁姑 好

星野さん野球ブームに火をつける 奥 五

イケメンの顔にもブームあるらしい 天 笑

ちよい悪のブームに乗って生やす髭 和 夫

世知辛いこの世ブームの三丁目 朝 子

魚野菜サプリメントになるブーム 水 昇

ワンちゃんもネイルアートをするブーム 賢 子

ブームにも少しの気の宝くじ 求 芽

シート晒してブームには無関心 啓 子

ブームではなく底流になれエコライフ 深 雪

ブームには乗れずに汗の小商い 一 風

駐車場おしやれな軽がくつと増え 天 五

ふうせんが割れて迷走するブーム 柳 昌

手術理に惚れてわが家も星三つ 直 樹

生前の謝辞はハガキの家族葬 直 樹

テロリスト旅行ブームに水をさす 啓 子

ブームには背を向けずべてわたし流 弥 生

文庫本のブーム嬉しい粋な帯 深 雪

ブームには乗らずに一段ずつ歩む 靖 鬼

ブームにはよそ見をしない父の貨車 希 久 子

ブームなどちつとも気にせぬ貯金箱 千 里

眠つてらうちにブームが遠ざかり 月 子

ブームには付かず離れずひとり鍋 美 籠

うきうきとブームに乗つたのは誤算 ルイ 子

ブームには距離を置いてる亀の甲 森 子

ブーム等わたしはわたしの道を行く 森 久 子

ブームには背を向け魂を磨く 修

一呼吸待つてりゃブーム飛んでゆく

ブームには乗らずにいつもビリの椅子 公 誠

エコ上手湯タンポブーム呼んでいる 俣 子

円高でブームせわしいバスポート 一 風

告発のブームに揺れている日本 尚 士

ブームなどどこ吹く風とマイペース みつ 子

アイドルはどうあれ僕はサユリスト 保 州

ロボットがブームを起す近未来 扶 美 代

石路が好きでブームに縁がない 天 五

ダン 吉

老古学ブーム見に行くだけの弥次馬

兼題 「去る」 六吹 尚士選

通り過ぎてから名前を思い出す 雅 明

去る人を眺めていたら一人きり 美 義

喋るだけ喋って波紋置き去りに 寿 美

潮時を見計らい辞す通夜の客 玄 也

ゼロの数かぞえ立ち去るウインドウ 好

引き抜かれたらしい我が社のホープ 恵 子

栄光は去り挑戦は果てもなし 希 久 子

戦の世去つて九条できたのに 丹 吉

ブーム去つて引き出しにある万歩計 千 枝 子

容赦なく若さが去つてゆく悲哀 朝 子

賞味期限時は静かに去つて行く 哲 子

去る者は追わずと言いが追つて行く 水 昇

去る者は追わずと妻に言えぬ僕 弘 風

群を去る象振り返り振り返り 洋

去り際の美学男は背中で泣く 直 樹

去る時の美学笑顔を忘れない 集 一

去つてゆく背中へ未練ほとばしる 賢 子

美しく去るといふのもむずかしい 香 代

去つたものすべてみんなが美化される 保 州

もし生きていたらと思う人ばかり 能 子

鳴りやまぬ拍手おしまれ去つていく 啓 子

立ち去ればどつと起つた笑い声 弘 風

帰るなら割り勘だけは出してゆけ 天 五

去りたくて去つたわけではない議席 月

ヘルバーが帰ると機嫌悪い母

父の日か何も言わずに去んだけど

ありがとも言わずに猫が出て行った

退職金握った妻は去って行く

出て行く母に追うなど父の空元氣

男ならだまって消えていきなさい

また意見合わんと云うて去にはった

同じ空氣吸うのも嫌よさようなら

佳

消去法でやつと残った椅子にいる

去ったあと誰も困ってないなんて

去る人を追う馬力などもうないの

残ったのがベストと言えぬ消去法

肩書きがはずれ取り巻き去ってゆく

人

カリスマが去って良くなる風通し

地

倦怠期去って空氣にはじめ

天

またしてもチャンス去る音聞いている

軸

惜しまれるうちに去ろうと決めている

兼題 「沈黙」

河内 天笑選

名優の腹芸沈黙の舞台

口数は少ないけれど子沢山

沈黙に馴れてしまった夫婦仲

黙つてるとまた消費税上がりそう

保州

耕治

ダン吉

更紗

恭昌

理恵

月子

楓楽

修

葉子

月子

月彦

則也

富美子

五月

みつ子

沈黙を突然破る孫の声

三猿の時代は遠くなりにけり

逆風が去るまでだんまりでいよう

だんまりのふたり歯がゆいレモンテイ

だんまりが二日もたぬのはあんだ

旗色が悪くなったぞ黙つとこ

沈黙を破ってカミナリが落ちる

いさかいの後は沈黙妻の勝ち

沈黙の海ひと言で荒れ狂う

無言劇先ず音をあげるのは夫

箸の音だけの夫婦で善ない

沈黙の妻ほど怖いものは無い

疲れ氣味少し黙っていてあげる

沈黙考軽率を悔いている

怒鳴られるよりだんまりが怖い父

沈黙の夫婦へ猫が口をきく

富士山もいつかは噴火するだろう

沈黙を破ってからは軽くなり

ダンマリ術押し通す妻の勝ち

沈黙の空気に焰静止する

沈黙が続くと眠くなってくる

いつも黙って笑ってござる地蔵さま

沈黙の下手な男のニラメッコ

喋れないことは拷問にも等し

沈黙は中止そばでも食べようか

黙つてる妻とこわごわTV見る

沈黙を武器にしている反抗期

沈黙の妻に近付くのは無謀

更紗

千枝子

扶美代

寿美

千代

光久

美代子

俣子

義子

淳司

美龍

いさお

能子

扶美代

シマ子

太郎

加お里

直樹

郁夫

瑠美子

哲子

哲子

保州

月子

蕉子

千里

淳司

沈黙を守り通して悪でいる

佳

余計な事聞かせたくない黙ってる

喋つたら爆発しそう黙つとく

もの言わぬ地球が溜めている怒り

まだ金に物を言わせたことがない

思わぬ出会い声もなく見詰め合う

人

おばちゃん黙っていたら病氣です

地

黙つてるだけで男を上げてはる

天

毒草の本をだまって読んでいる 高島 啓子

軸

沈黙の臓器に畏れ抱いて飲み

◇

平成19年度本社句会の月間賞杯水久保持者

は柿花和夫氏堺市に決定しました。

平成19年度本社句会皆出席者(順不同)

穴吹尚士 井伊東吉 上嶋幸雀 岩佐ダン吉

榎本舞夢 江見見清 大内朝子 奥田みつ子

太田 昭 鍛原千里 川原章久 太田扶美代

小谷集一 都倉求芽 谷口 義 鴨谷瑠美子

西内朋月 西出楓楽 長浜美龍 鈴木いさお

坊農柳弘 藤井正雄 藤井則彦 平嶋美智子

村上玄也 前たもつ 三宅保州 宮本三喜夫

米澤俣子 吉岡 修 矢倉五月 山岡富美子

山本希久子 (二三名)

いわゑ

賢子

玄也

幸雀

富美子

みつ子

見清

富美子

むねのめづり

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

川柳塔打吹

野口 節子報

賞味期限過ぎてわたし安全よ
僕だけは安全祈願して無事だ
コウノトリ電柱の上安全と
電化して安全確保しています
五十年無事故無違反強運か
堂々の妻の強気に負けている
うしろから一位堂々テープ切る
大漁旗立てて堂々港入り
遺伝子に由緒正しい困子鼻
息ころし粘りねばって牡蠣おこす
粘られておもちゃを買って小言聞く
しょうぎさす一年生の粘り勝ち
彼岸過ぎ粘る曇りに腹が立つ
皿回し粘ってみたが目が回る
五十年粘り続ける崖つぶち
まだ粘るしかない生きている五体
晩酌はチョコ三杯に貝柱
借景の富士を柱にはいチーズ

美姜子 照彦 貴恵 孝恵 隆一 睦子 みち子 佳女 芳光 重忠 龍枝 やえ 公恵 富恵 三津子 きみ子 楨元 玲子

伸びてくる蔓に支柱が間に合わぬ

私は柱になれぬ杖でいい

輪の中の柱がゆれてまともらぬ

死にかけていても農業は柱だ

柱とも杖ともたのむやまのかみ

電柱が信号無視を掴まえた

よろめいて若い柱にしがみつく

いつの世も家の柱はお父さん

電柱の数ほど悪い奴がいる

人の輪が丸い柱によりかかる

大黒柱に明治維新の刀傷

一本の柱にすがり付いている

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

店員のお世辞気分がのってきた

来年のことなどと思う花の下

ぎりぎりになっても答え出てこない

ピラミッド近代の人震えさす

コンクリの割目で咲いた底力

上役になったしるしの赤頭巾

あこがれた都会に孤独ビルの中

八十年古にだけある底力

あこがれの海外旅行をはばむ足

ローズ川柳会

山崎 君子報

京子

紀美恵

美知江

石花菜

玲坊

和枝

美代子

和子

完司

善江

節子

螢

ちよえ

伸子

聖子

はるみ

恵美子

好栄

かつ子

博利

清泉

てる

みつき

人生に逆転と言う運不運

洗濯は今日に限ると秋の天

コオロギが秋を奏でる草の中

背後から匂い被さる金木犀

逆転の山場つくっている絆

逆転という空間へ弾みつけ

寂しい秋の日暮れの早いこと

老いの身を甘えさせたり叱つたり

電池交換逆転劇を待ってます

この一球逆転決めるストレート

和歌山三幸川柳会

玉置 当代報

わいわいと意見飛び交うピカソの絵

ワイワイとテレビばかりが笑つてる

クラス会ちゃんと呼び交う幼顔

わいわいはしぐおと三案山子してやろう

ワイワイと首相になる人なれぬ人

わいわいは幻だった波の音

欲いえばあの娘の笑顔みたい

親の欲目は重たくて逃げてゆく

安産と聞けば気になる目鼻立ち

欲深い人だ両手が空いてない

老いて尚負けず嫌いの欲が出る

膨んだ欲が疑似餌に引つ掛かる

ジーパンへ折り目をつけた御節介

藍

哲子

トミエ

孝一

美龍

いわゑ

武庫坊

年代

義子

君子

孝子

かずみ

瑛子

宏夫

桂香

朱夏

信子

一步

町子

昇

孝義

武

准一

美枝子

次根

どの釘も折れたがこんな床柱
誘惑に負けて手折った夏椿

九十九折り越えたふたりに今がある
舞台袖にマリオネットが折れている

雑魚だつて数の力の嘆願書
未知数の二人で積んできた歴史

未知数の想いが明日を輝かせ
未知数のわたしを試す赤い靴

チチンブイ数字に変わるバーコード
一枚一枚蝶もそして万札も

切り捨ての端数の中にある誤算
ライバルに数歩下がつて爪を研ぐ

百万ドルのえくぼ皺へと紛れ込む
数のうちに入れられてから偏頭痛

折鶴が命の重さ知っている

川柳塔おっぱひ吟社 木村あきら報

堪忍の袋つぎはぎたんとある
こだわりを捨てると余生軽く生き

隠し持つ秘密だんだん重くなる
検診を終えて晴ればれ空の碧

ふる里の風は何時でもあつたかい
苦しみに負けず戦い強くなる

名物の五感で味わう旅の宿
テレビ観る字幕に難聴助けられ

信じてる事に理屈など要らぬ

起世子
イセ

当代
和子

純子
幸

菜摘
徑子

登美代
章子

碧
幹子

みね
保州

絹子

ひかり
いさむ

賢
八重子

あきら
よしみ

放任
弘

はつ恵

年期だけ誰にも負けぬ細工物
背中の毛立てて威嚇は家の庭

松露川柳会 小西 雄々報

縁談で投げたボールを待つている
縁あつて異国の人に嫁ぐ姪

家事不得手娘縁談さき思ふ
結納をおさめ幸福祈る親

決断ヘリダー迷うこともある
逆風ヘリダー言葉見失う

頼りないリッターまたも負け試合
縁談もプライバシーで進まない

タイミング良くて縁談まとまった
政界のリッター替り重いつけ

プロポーズされる予感の風が吹く
誕生日母のパレード有難い

川柳ふうもん吟社 夏目 一粹報

お役所が煮えたら食わあでは困る
三度目でやつと無心になれた汗

煮えたらくわあばかりで山は動かない
長らえた命のうたをペンで編む

嫁さんが我が家のサイズ変えてゆく
太公望鯛のサイズのサバを読み

お母ちゃん呼ぶとほんわかあつたかい

寿々女
貞月

昌子
敦子

美明
鈴枝

公美枝
信雄

弘子
静江

和代

久子

智恵子
雄々

洋々
無限

美恵子
玉恵

雅女
蟹郎

かをる

佳句地十選 (12月号から)

岩本笑子

誤解かもしれぬしこりを割ってみる
遣伝子の不思議も嬉し孫育つ

人間にいつもなりたい猿である
出直そう白紙の僕が試される

帆を下ろす男の顔が丸くなる
人間の脆さを包み込む深夜

簡単に貸して下さるのも怖い
ゴミ拾い見えないものが見えてくる

成せば成る明日を夢みるひとり言
どの星にいます母なる仏さま

三度目の挫折八起きが待つている
煮えたらくわの男に利かす釘一本

明日の絵がかげずもがいている私
煮えたらくわあ噴火するのかもしれないか

言い訳も三度目となり泣けてくる
人間の奢りを論ず海の時化

天高く益々増える皮下脂肪
ししのサイズ買つてももへソが出る

期限切れももちろん捨てず食べている
閻魔にももちろん歳暮送ります

遺す物ないがお骨は拾つてね
ビール腹普通サイズじゃありません

ケセラセラ煮えたらくわの人生よ

輝美
一路

すみこ
ダン吉

典子
柳弘

梓
純

君子
國治

地佳平
あすなろ

美雪
一瑤

善夫

孝男

秀四

行男

圭一郎

殺
あしび

妻子
一京

工、年だ煮えたら喰わあ言つとれぬ
あの背にはもちろん言えぬ傷があり
よく似てるもちろんですよ子ですもの

志げ緒
茂登子
稔

夕焼けももちろん貴方いて映える
休肝日三度目までは守れたが

菊香

パパはエムママのエルエルよく目立つ
山の神にサイズは聞かぬ方が良い

節子
春名

三度目の見合い成立深呼吸
子の成長靴のサイズが追いつかぬ

金祥
益子

張り詰めた空気がもちろんみな無口

喜子
一粹

川柳ねやがわ 森

宿敵に塩を送った偉い奴

鈍甲

宿敵に一泡ふかす策を練る

仁清

握手して手を洗いたい憎い奴

寿男

宿敵に脳が生き生きしてきます

とし子

宿敵の姉にべっぴんさんが居る

博泉

宿敵があつて男の貌になる

洋

公園のハトに餌やる車イス

頂留子

鳥餌のような配給食べて来た

一笑

目の前の餌は食わない慎重派

ただよし

ヘルパーは餌やるように匙運ぶ

じゅんこ

撒き餌には一番先に雑魚が寄る

弘一

小魚の餌でイルカの芸達者

さとし子

餌掛かる蜘蛛徐に動き出す

庸佑

猪が餌を求めて墓地荒らす
テレビ族みんなおんなじ顔かたち
動物の育児本能唯不思議

三郎
あやめ
高栄

大型テレビだけが友達寝たつきり
テレビ見るように亡父も観てるかな

典子
亜成

テレビには映らぬ所でポランテア
古希過ぎたアランドロンが現れた

かすみ
麗

ありがとうたと言つた日よく眠る
感謝しても感謝しきれぬ母の愛

薫
茜

健康に感謝笑顔が湧いてくる
感謝の心あれば人生老いも逃げ

朝子
一風

耳栓をとると噂が唸つてた
赤福がお伊勢さんまで裏切つて

あさ子
敬

先々で所払いの煙草飲み
大根の葉っぱ青虫おいしそう

ルイ子
賢子

奪われた命へ痛恨の炎

修

長柳会 村上直樹

墨痕の滲む余白にある威厳
よつこらしよさつと立てない膝と腰

直樹

欲出して仮面はがれて泥の中
母さんが福祉頼らず野良仕事

登美子
マサ

こめ余りちから入らぬ稲刈機
植木剪定庭は見る見る晴姿

よしお
たけし

仮面つてなんと便利な隠れ蓑
笑顔でも心の仮面隠せない

正一
もこ

敬二

福祉など世話になるまいやせ蛙
生き甲斐を無くした酒のほろ苦さ
散發屋街の噂の発信地

靖博
靖子
不二雄

行くあてもないのに天気気にかかる
青田刈りされた次男も肩叩き

正博
正子

老婆は色気補充にエステ行き
私いまあなたの色に染まりたい

明信
明子

八十路越え妻は色気を出し惜しみ
終電車仮面を脱いだ顔ばかり

武男
和代

煩惱の芽を刈り取つて古稀に入る
ブランドの仮面の裏に嘘疑惑

一慧
三和子

剛腕も色を失う被告席
灰になる日まで色気のあつた人

輝子
幸雄

さつと紅刷いて心に活入れる
さまざまの色で織りなす人生譜

史
けい子

ちよつとずつ色々がよい老いの膳
頬染めた頃もおましたなあ婆さん

芳野
淳司

愛されてピエロの面が外せない
休耕田あわだち草を刈る孤独

富美子
和子

別別の色で夫婦が丸く咲く

正美

竹原川柳会 時広 一路報

畑にはやすらぎがある愛がある
山畑に通う母の背まるい風

蘭幸
淑子

畑には不思議な魅力を振る
山畑に楽しみあつたミカンピワ

栄恵
慶子

一 緞入れる畑の温みよ故郷よ
 一 坪にわたしの癒し四季の花
 いのししが毎夜試食に来る畑
 胸を打つ言葉一日豊かなり
 職人が打った打ったよ二千本
 雨の日は金子みすゞが心打つ
 種を蒔く土でいねいに打ち返す
 水を打ったような後での大拍手
 相打ちの握手が無二の友となる
 職人の釘は行儀よく打たれ
 時々は衝突もある夫婦です
 楽しいね犬と尻尾で会話する
 お日様とかけひきしながら布団干し
 岬までジョギング秋の風に会う
 少年が亡母に抱かれにくる岬
 岬をぐるぐる夫の叫ぶ声がする
 分校のピアノが響く岬です
 マグロが戻ったぞ海猫の舞う岬
 出船入船お大師さまの坐す岬
 美しい国が霞んでいる岬
 昼も夜も海のロマンを見る岬

川柳塔唐津

仁部 四郎報

貞子 汎美 規代 笑子 節夫 輝恵 房子 民恵 敬子 不朽 太虚 千枝 史子 千代美 静風 幸子 比呂子 あゆみ 厚子 力 一路 勝視 實 晴翠

政治家の詭弁を手本弁論部
 ひこばえが伸びる地下鉄の上の田
 涙腺の掃除に孫がやって来る
 ワケはあと先ず欠席と書いておく
 外交は恫喝した方勝ちらしい
 川柳クラブわたの花 西川 義明報
 煽やかに揺れてコスモス靡かない
 穴探しゲーム楽しむ二党の乱
 何時からか野良猫家族小屋に住み
 探し物不意に出てくるミステリ
 ゲーム感覚で恋して産んでポスト入れ
 妻のボヤキ馬耳東風と太っ腹
 おだてとは知りつつ乗った太っ腹
 太っ腹の父に母さん爪に灯を
 オリソビック汚れた貴族ドーピング
 赤い羽根諭吉が踊る太っ腹
 笑い方忘れんようによく笑う
 ありがとう何度聞いてもいい言葉
 先が見え自己採点が甘くなり
 鏡見て艶ある顔に戻りたい
 相談をまとめる父の一言
 老人と言つてはダメよ七十は
 金は無い我が家有るのは笑い声
 十指皆神より役目つかわされ
 愚痴小言言わにゃ日本で一の妻

水笑 四郎 蜂朗 輝夫 高明 高 耀一 知佐子 民 君江 博子 愛子 ミツ子 宏至 幸枝 莊司 美はる 克美 いつふみ 義明 宏

欲の皮どこまで厚い面の皮
 ゆっくりと訳聞いてやる父の顔
 擦り減った指紋が過去を語り出す
 太っ腹母は家族の頼み綱
 被災対策たつぷり脂肪溜めている
 女性ならメタボリックにならぬの
 わたくしを生きたる看板笑顔です
 あの人が看板娘高齢化
 取り上げたゲームにはまるパパとママ
 脳トレにはまって家事はそっちのけ
 余生もう根性捨てて丸く生き
 大原川柳社 山本 玉恵報
 新人社猫をかぶっている仮面
 仮面脱ぎゆつくり鍋を磨いている
 仮面つけ言葉上手な村姑
 何時までも仮面をかぶりどうする気
 逃げ足の飛ぶより早い孫がいる
 元気な子獅子の仮面がいかじり
 痛いところつかれて仮面剥がれ落ち
 負け犬も尻尾回してにげて行く
 怖いのは仮面の下にある素顔
 老眼に仮面の裏がよく見える
 一日の仮面をとりまり木で洗う
 子を叱る仮面の下は泣いている
 仮面剥ぎ素顔の我れを取り戻す

正春 欣子 妙子 俊子 晴美 浩三 朝子 孝子 和子 ますみ 一風 とめの あやこ 恵潮 文代 エミ子 己吉子 絹子 静子 敏夫 さちこ はじ芽 地佳平 南花

柩の中で父はゆつくり仮面脱ぐ
 天高く仮面はいらぬ鉄を振る
 宴終り仮面のずれにふと氣付く
 団塊の仮面を捨てた日本晴
 仮面だな並べすぎて美辞麗句
 信頼の仮面大事として生きる
 仮面取れやさしい里の風に逢う
 逃げる場所やっぱり母の膝がいい
 よそ行き仮面作っている鏡
 ためらいも無く捨てる日の鬼の面

高知川柳社 川竹 松風報

妻子 辰江 悦子 喜美子 巴子 美佐子 美さえ たつ子 あすなろ 玉恵

不都合を知らず知らずにする若さ
 御都合主義やがては友も背を向ける
 カラスにはカラスの都合はやくまい
 川柳塔わかやま吟社 牛尾 緑良報
 あまい汁吸った足元から雪崩
 女だから女にだけは負けられぬ
 馬耳東風猫の背中を撫でている
 音量を上げたラジオに笑う母
 団塊の靴よ踊ろうもう一度
 嬉しい日の朝は足元からルンバ
 足元を磨き直して第二章
 ごめんごめん知らずに踏んだ蟻の列
 足元の銀河とながい話する
 足元の闇とり除く一歩から
 足元はよれよれ靴で武装する
 使命感欠いた老舗が揺らいでる
 人生の草鞋念には念を入れ
 足元の揺らぐ政治の後始末
 足元を固め作戦練り直す
 女房の影武者で居て無難です
 残照、弱い女を押し通す
 七坂を越えた女の虹の橋
 脚線美女性の武器に理性負け
 すさまじい女心が鐘を巻く
 あずま下駄粋な女を見かけない

千鶴 千鳥 朱夏 保州 翠子 徑子 登美代 輝子 あきこ 寿子 小雪 東吉 和子 英子 三男 准一 紀子 富美子 佐一 利治 三喜夫

言い訳すると東へ陽が沈む
 東奔西走祭り男の持つカメラ
 東北の訛無口にさせたのか
 東から西へ月日も人の世も
 反抗期東と言えば西と言う
 玉音が流れ平和を取り戻す
 忘れない玉音流れ終戦日
 寒くてもラジオ体操欠かさない
 ラジカセで何度掛けたか黒田節
 サークル檸檬 吉田あずき報
 まだ捨てぬ夢来年へ手帳買っ
 魂がゆつくりとける日向ぼこ
 ぬかみで愛のかけらを探してる
 浮かばなくなつた顔にも書く賀状
 ぬかみの中に映っているむかし
 ロボットに家事万端を任せたい
 味の仕上げに一滴の毒が要る
 ぬかみがなくなり威張りだす車
 枯葉舞う迷いころが軽くなる
 目から鼻に抜ける男の背が寒い
 ぬかみが緩衝剤となつて今
 ぬかみの中にいるとぬかみよく見える
 あと一押しここでいつでも挫けてる
 ぬかみの中でも星は光つてた

大輪 裕美 順子 克子 よしこ 紀久子 和 豊太 さら子 清生 たもつ 千代 遠野 楓楽 房子 扶美代 昌紀 美籠 みつ子 光久 義子 あずき いわゑ

公平に分けているのに出る不満
 面子など捨ててしまえば楽になる
 美辞麗句途中に毒が混ざってる
 毒を盛る皿はきれいな花の柄
 毒舌もカンフル剤になる夫婦
 毒消しの効かぬ思いになつて
 三叉路で方向音痴迷うてる
 作曲の才にあふれている音痴
 音程が狂つたままの妻の笛
 老いの樹海へ方向音痴迷い込む
 面子捨て私の空が広くなる
 垣根半分取つて陽が差す嫁姑
 負けたふり母は上手に顔立てる
 海に線引いて領土を主張する
 追伸に一滴おとす母の毒
 音階をはずし踊っているお面
 面子などつくと捨てた背なの汗
 こっそりと辞書を開いている面子
 鉛筆の芯から毒がほとほとはしる
 血を分けた姉妹仲よく離婚歴
 生きる道いつも迷っている音痴
 毒少し混ぜてコラムがおもしろい
 音痴から慰められている音痴
 景気には音痴サンマが日々旨い
 公園の鳩と無聊を分かち合う
 秋のバラ言葉にちくり毒があり

千梢 満作 章久 とし子 弘風 六助 茂雄 真理子 惠美子 富子 ダン吉 隆盛 一風 和夫 道子 比呂志 美千子 洋子 孝子 弥生 朝子 秋雄 良一 隆子 寿美 ふりこ

年上の面子裏から意見する
 高槻川柳サークル卵の花 釜野 公子報
 迂闊にもライバルの背を押してやる
 うっかりと脱いだ仮面を置いてくる
 子のリズムもらつて朝の台所
 オカリナの澄んだ音色に救われる
 うっかりが続く脳が溶けはじめ
 諭吉さんが留守でデートが弾まない
 遠い日の記憶の底を虫が食う
 茶も菓子も出さず口ではごゆつくり
 美しく鳴いてはみても籠の鳥
 お隣は留守ですかと問われても
 より高く澄んだソプラノ恋謳う
 妻が留守ゆつくり耳を休ませる
 缶ビールの軽さで約束が増える
 排水の陣の後ろにマットレス
 うっかり手を握つてからのややしきさ
 飢え死にはしないだろうと妻は旅
 軽い咳一ツ落して王手飛車
 苦虫を捨てに行きます縄のれん
 軽い約束ならば受けます紙コップ
 造形の神寝過した目鼻だち
 引き金を引かぬ力を子に教え
 噂待つ扉はいつも開けてある
 命とりになるかも知れぬ封を切る

國治 昭 郁夫 篤子 惠美子 一央 公子 活恵 かずお 幸雀 宏章 孝一 昭二 節子 勲弘 晴美 尚士 比る志 守 雅文 美稲 美義 典子 求芽

この時間きつと留守だと思えます
 虫好きの子供が母を困らせる
 美しいひと虫も殺さぬ顔のまま
 信念は持つていきますとくつわ虫
 紙と知らぬ紙ヒョーキの回り癖
 良い方にとれば励みになるお世辞
 不揃いなバズル留守番させられる (北照子)

八斗藤 庸佑 葉子 律子 ろつぱ 泰雄 北照子 松本はるみ報

わかあゆ川柳会
 多数決の中で鴉の無表情
 苦勞してきたのか丸くなった人
 クリスマス賛美歌そつと口ずさむ
 思い出をふんわり包み紙風船
 賛成多数たつたそれ丈の議長席
 ライバルに見つけてほしい隠れ宿
 温度差があつて賛成宙に浮く
 アドレスの中から消えた戦友の顔
 アドレスが大回りして年賀状
 川柳茶ばしら 板山まみ子報
 日本つていいね着物にお茶お花
 殺人のニュース聞いても驚かぬ
 こんな歌まだ覚えてたカウラジオ
 労りの言葉下宿の子から聞き
 気がはやりまた買い過ぎる春の苗
 単身の夫料理も上手くなり

錦秋へ乙女の像も太り気味
いつの間に子が指図する家のこと
幸子 まみ子

川柳塔きやらほく 大家 恵子報

年老いてライバル意識もやの中
ふりあおぐ坂の角度はなおきつい
逃げた鯛また釣るチャンス待つ磯辺
残暑残暑ハガキに今も書いている
めまぐるしい世間にいつも目を回す
木せいの香りやさしい顔になる
悲しくて今でもふれぬ兄の死を
身の上話親身に聞いてついはろり
半分はマスコミにある挫折感
山山が紅葉する日 wait っている
柔い髪は母よりもうけしもの
生きる張り大山さまのおかけです
りんりんと母屋の下で秋の虫
折々にやさしい風を吹かせたい
有難う秋には秋の菊の花
そばの花こは花野が陽が落ちる
遠い絵の中へ隠れて遊びたい
秋深く活字大きい本扱ふ
曼珠沙華紫苑も亡母の道に咲く
新発見老父にも髪が生えていた
こんな話せるお方でしたか福田さん
初枝 すみえ 天雀 亜弥 寿々子 那珂子 玲子 瑞枝 晶子 やえ 章江 恵子 雪江 田鶴 なみ 春枝 ふみ 日枝子 千代

ほたる川柳同好会 水野 黒鬼報

孫宛にドングレりも詰め柿送る
おなじみの三枝を聞きに繁昌亭
話ネタ幼なじみの出世振り
なじめないカタカナ語です辞書を書く
寄り道のドングレりコロリ鳴るかばん
アルマーニの鞆に漫画資本論
重そうな鞆の中味接待費
嫁はんになじみの店は内緒です
先様の空気になじみ波立せず
おなじみのあのユニフォーム何故変える
かばん持ち何時かなりたい大物に
詰込んで庫内で賞味期限切れ
職を退くかばんにそつとありがとう
息をつめ目をしばたいて針に糸
カラオケのなじみの店が老人会
添加物つめたサブリを飲まされる
ばあちゃんの胸にぎっしり生きる知恵
ちよつとした靴のマニアの古女房
思い出をみやげに入れる旅かばん
美智昆 勝 助 骨 契子 黒兎 勇治 禮子 長一 祥風 久子 幹治 宇乃子 見清 桂子 昭子 雪子 柳童 信男

川柳大版 長井 善純報

一瞬が命を左右する怖さ
反論のタイミング待つのだ仏
勇気出し一歩踏み出すタイミング
タイムング外した後はよく笑う
あまえない己の術で生きている
引きつける話術が心地よい落語
情けない医術あるのに医師不足
天敵を逃れ野性の生きる術
カツ丼で刑事の術に落とされる
九条に戦術などはありません
術がないが元氣だけがとりえです
忍術で女難を逃げることにする
さわやかな誘いとうまくのせられる
やんわりとせこい算術する女将
止める術ないのか地球温暖化
生きる術教えてくれたみつをの書
豪快な双葉山が泣いてます
豪快にママでも金と投げとばす
豪快に笑いとばして居るオカン
僕の事誰かが言うたうわばみと
本心を隠して笑う豪快に
暮れの第九大合唱が豪快に
豪快な笑いに野心などはない
豪快に笑うおやじは大きな手
豪快な夢を描いて見る宇宙
川童 まつお 朝子 芳香 信醉 美花 勝弘 鉄心 五月 ダン吉 紀雄 重人 一風 章久 青道 柳弘 喜楽 花笑 司 珠生 東吉 和 美籠 孝一 善純

尼崎いくしま川柳会 田原 宏一報

味の街ゆれるネオンの浪速橋
すき焼に松茸うまい酒の味

惜しまれて味ある人が雲に乗る

沈黙は金といえども喋りすぎ

洗い人老いてますます惹かれます

忘れん坊今聞いた句が居着かない

梅干しのうま味しじみみ粥する

偽装だつたか鼻を折られた味自慢

恰好つけシャルウイダンスと声かける

なまけ癖ついた体にムチを当て

美人とは言えないけれど味がある

取り調べ洗い顔して待つ白

洗い顔少し笑ってみる鏡

八尾市民川柳会

宮西

弥生報

絶景にうっとり見とれ立ち止る

ゴキブリを叩いて歌う鎮魂歌

真大な命に怖いものがない

南向きの縁側福が寄ってくる

面影を憶ぶツタンカーメンのミイラ

五カラット只うっとりと見てるだけ

古酒の色うっとり砥めて夢に酔う

関りを持つからなおのこと淋し

花嫁に仕上がる君をみつめてる

野 薫 武庫坊 寛之 道子 幸子 年代 和子 勝巳 宏一 純 ゆき子 東園 半蔵門

刃こぼれ鎌と帰ってきた夕日
ゆく秋を惜しむワンカップの孤独

後ろめたさをコートで包む逢いに行く

盆栽に亡父の面影見えかくれ

うっとり見惚れて飽きぬ十三夜

ことばみな忘れてあなたの前にいる

赤とんぼ歌うと母の目が光る

唇に歌太陽を友にする

座り心地の悪い椅子で唄い終る

スーパールのリングゴにリングゴの歌聞かす

尼崎尾浜川柳会

田原 宏一報

恋は今悩みはじめて秋深む

水割りの氷は今日も元気です

花の下われも人の子団子賣う

ああ幸せ手足のばしてあろの中

どん底と言われた底が見えて来ず

めっちゃ元気父似母似の七五三

明日からの折節祈る七五三

寝転べば悩み吸い取る秋の天

吐き捨てた言葉拾ってながい夜

ご先祖が泣くぞ赤福お前もか

レジ並び籠を覗いて列を変え

こちらへとシニアの席に座らされ

試着室に入る服は値で悩む

オパサンの欲を悩ますバイキング

秋雄 加央里 耀一 一風 寿鶴 アキラ ダン吉 柳伸 定男 弥生 紀乃 孝一 耕治 よし子 靖鬼 里江 宏一 勝巳 イサミ 義芳 美義 江見 五月 正治

悩むこと無いから困るひとり者
口に出して見ればなんでもない悩み

心までなりたくはない骨粗鬆

悩む度すり減ってくる糸切歯

むらくも川柳社

毛利 幸報

海あおくまだまだ老いの夢ふとく

回想のハートで桑の実が熟す

バゲンに一役買った虫めがね

山一つ動けば海が見えてくる

雲動く風もそよいでくれる秋

迷うことあつて人生泣き笑い

一日が暮れる家族の和がもどる

花生けて忘れたものを思い出し

寒風に厳しい人生教えられ

渋皮が剥けて仲良く八十路坂

秋風があの日思い出連れてくる

老いの知恵知つて人生糧とする

三年記無駄かと思つて手に入れる

寒風が冬の訪れ連れてくる

幼なきの指おり数え祭り待つ

老いの坂すこやかに日々登りたい

その日まで男で居たいあはら骨

庭の花今を盛りに萌えている

川柳茗葉の会

宮崎シマ子報

足の裏何故かユーモア持っている

あずき

朋月 桃花 求馬 美籠 蘭水 瑞枝 俊夫 秀夫 嘉寿子 惠美子 ます美 秀子 美恵子 美保 定子 彰 喜美 幸 久子 清子 義良 英男

表だけ見ないで裏も見て決める
裏道へ曲ると風がきつくなる
裏の裏表になると限らない
まさかと思ふ記事へ眼鏡をかけかえる
裏金なら僕も毎日でも欲しい
持参金あるけど夫には内緒
へその緒を証に持って亡母に会う
歩きましよう大地と足のある限り
裏切りか正義か告発内部から

能子
慶子
烈
ますみ
弘直
シマ子
加津子
喜美子
香住

岩美川柳会
石谷美恵子報

ラストページ支えてくれた札を書く
句集繰る没句に混じる赤マーク
今日生きるページしっかり書き入れる
昭和史のページに描くうろこ雲
青空のページに描くうろこ雲
破れてる甘いページは墓場まで
一ページ危機一髪を走り書き
二千五百ページの辞書をどっこいしょ
人間が人間らしく居る痛み
辞任するしないで痛い傷ができ
鎮痛剤になったあなたのありがとう
腰痛の時にしゃみが攻めてくる
痛いほど解るわかとそれっきり
輪になって痛みも円く分かち合う
野次馬の一人が痛い傷つき

清帆
公乃
一京
陸子
公子
幸安
幸枝
よしえ
孝男
圭一郎
一瑤
重忠
忠良
節子
きみ子

身も心も痛む事件が多すぎる
美しい心を照らすお月さま
鷲峰山の裾美しい霧の海
幾山河越えて綺麗な顔の皴
美しい声はいらない炭坑節
美しい国つくらずに消えた人
美しく老いる葉を捜してる
美しく見せたいバラに刺がある
美人薄命はつと一息ついたとこ
食欲の秋に崩れる脚線美
美しい嘘へ媚薬が塗つてある

雅女
螢
はるお
茶子
蟹郎
稔
たぬ
菖子
和子
幸子
美恵子

川柳塔打吹
野口節子報

選ばれてこの世に生を受けている
今度こそブツツンせぬ人選びたい
うちの夫選んで悔やむ生半可
児はみんな親を選んで産まれた
コトコトと煮物を忘れ鍋焦がす
コトコトにつまみ食いで火傷する
コトコトと秋を煮つめて子におくる
実印を押して隠居の席につく
里帰り母の押ししずし食べたくて
横車押したばかりにきらわれる
背をボンと押して下さい挫折中
風邪薬飲んで押し出すウイルス菌
孫と爺押しくらまんじゅう腰ざくり

たけ代
公恵
勝誉
貴恵
清
京子
やえ
美知江
孝一恵
美美子
きみ子
玲子
紀美恵

好きですの後一押しが出てこない
ベルを押す出て来る前の一呼吸
押し押せのムード壊した小沢さん
ばあさんに背を押されて医者にゆく
体中どこを押しても天国じゃー
暖簾押し額が先にご挨拶
偉そうに押ししても自動ドアだった
内視鏡一寸辛抱医者の声
三年は辛抱しよう桃と栗
辛抱の人がしこたま溜めている
闇の中奮を抱いて花は待つ
辛抱も限界になる犬の声
辛抱の出来ぬ女でもじつと待つ
一週間妻が留守でもじつと待つ
辛抱を爆発させた柘榴の実
桃よりも辛抱強い柿熟れる
辛抱ができぬ桜が狂い咲く

義人
和子
照彦
石花菜
三津子
滋
螢
和枝
美代子
玲坊
克枝
善江
美ツ千
禎元
重忠
芳光

川柳花の輪
妻谷重風報

お誘いは断れませんと上司です
お誘いにときめき覗くコンパクト
ペテン師に欲を誘われ無一文
利子通知パス賃高く損が出る
損得を天科にかけ投票す
損しても立てねばならぬ義理もある
時間切れその後に出来た名句です

一幸
勉一
ミヨノ
隆子
泰子
やすの

暗証番号結局孫の誕生日
風当り避けてナンバーツでいる
下二桁やっつ一枚年賀状

川柳塔みちのく

小寺 花峯報

難民の悲しい色の目が縋る

音成

主役にはなれないけれど柿サラダ

重風

避難勧告ないかも知れぬ非常口

善栄

導火線静かに燃えてからの恋

きよし

冬眠を止めて句会に出るマムシ

和香子

導いて下さい妻を天国へ

あすなろ

テスト前だんだん眠くなる英語

成柳

勝運に導く闘志ほとばしる

一呑

羊水に聴かすCDのプラームス

隼人

水切りの悪い右脳がまだ眠い

順風

逃げ道をいつでも視野に置くネズミ

花匠

七色の夢を運んだシャボン玉

愁女

眠そうな目だが盃まだ握る

岳水

天辺の柿は小鳥に差し上げる

花峯

先達のザイルが伸びる登山道

慕情

はびきの市民川柳会

五楽庵

徳山みつこ報

思いやり素直に受けてありがとう

フジ

プロの洗礼受けてポキンと折れた鼻

いさお

喝采を受けてあの世へ行くつもり

恵勇

甘んじて受けます天の采配を

美代子

どなたにも心開いて待つゆとり
開いたら愛があふれる亡父の遺書
枇杷の花さいて亡母と話す
定年の門を開いて趣味の道
小包を開ければ母の愛ばかり
ゆさゆさと頭を下げる稲の自負
吊り橋の前がつかえて進まない
秋風に猫も肥満の腹ゆすり
ゆさゆさと大関群の土俵入り
金星にゆさゆさはすむ大銀杏
ゆさぶると錆びた昔が活き返る
国会を揺さ振っている贈収贈
ゆさゆさと銀杏ゆらして秋拾う
ジャムパンを必ず一個買い添える
ヘルシーにこだわるジャムの砂糖抜き
匙加減やっぱり違う母のジャム
糖尿病ジャムなど食べていけません
ジャムパンを前にメタボの腹抱え
好きだったジャムを供える秋彼岸

川柳塔まつえ吟社

三島 沁丘報

囲炉裏端席順のない温かさ

一壺

でんといいた親父の席が空いている

悦子

立冬の句座席今日も温かった

みつこ

空いている席へ困った人が来る

かつみ

席を変えたら見えてきた青い空

喜久子

重人

りつえ

敏

かすみ

扶美代

ヨシ枝

ちづる

重人

泰子

敏

狭杏

重人

一知

扶美代

庸佑

ちづる

真一

泰子

久仁子

狭杏

志洋

一知

私と反比例して伸びる孫

柳歩

伸びる芽を親のエゴから摘んでいる

多喜

蔦がずら伸びて錦の綾を織る

小生

伸びる子は天井知らず天を突く

多喜

点滴の新陳代謝生き伸びる

知恵子

孫三人柱の傷はまた伸びた

茂美

和歌子

松丘

似る顔に世代は変わる法事席
階段の手摺に見染はもう張れぬ
階段へ終は独りで上るもの
いい事があって階段軽い足
挫折して昇れぬ階段恨めしい
階段の途中を行ったり来たりする
二階から声だけ階段降りてくる
色即是空ころを写す筆を持つ
私の心が写る鏡です
犬好きへ犬の写真を褒めておき
髪の毛の白いところがよく写る
戦場を写す必死のカメラ向け
紐落し写真屋さんも百面相
再会を約した小指もう時効
再びその日がやって来た笑顔
再々のミス笑つては済まされず
再会に時の流れをしみじみと
再びの言葉は甘いまつしぐら
再々の挑戦まるで絹の道

沁丘報

沁丘報

私と反比例して伸びる孫

スズコ

伸びる芽を親のエゴから摘んでいる

昌枝

蔦がずら伸びて錦の綾を織る

畔

伸びる子は天井知らず天を突く

ちえこ

点滴の新陳代謝生き伸びる

多賀子

孫三人柱の傷はまた伸びた

たけし

和歌子

薫

私と反比例して伸びる孫

松丘

伸びる芽を親のエゴから摘んでいる

茂美

蔦がずら伸びて錦の綾を織る

知恵子

伸びる子は天井知らず天を突く

螢

点滴の新陳代謝生き伸びる

小生

孫三人柱の傷はまた伸びた

多喜

和歌子

桂子

私と反比例して伸びる孫

多喜

伸びる芽を親のエゴから摘んでいる

小生

蔦がずら伸びて錦の綾を織る

多喜

伸びる子は天井知らず天を突く

多喜

点滴の新陳代謝生き伸びる

多喜

孫三人柱の傷はまた伸びた

多喜

和歌子

多喜

私と反比例して伸びる孫

多喜

伸びる芽を親のエゴから摘んでいる

多喜

蔦がずら伸びて錦の綾を織る

多喜

柳柳塔おとり 福田 登美報

吟行会ビールがうまい秋の空
公園の日だまり想う一家族
侘び寂びの面影残す屋形船
コスモスも紅葉にまけぬ咲き乱れ
一日を歯をくいしばり生きている
奥歯嚙む男へ意地が湧いてくる
その愚痴へやんわり奥歯嚙んで耐え
自転車で軋んだ道に歯がポロリ
人の世の流れに沿って生きている
ここだけの話流れに尾ひれ付き
若者は血潮流して燃えている
少子化で流れる桃が減り続く

南大阪川柳会 吉川 寿美報

この道とあの橋もしや談合か
流れ星若しやに繋ぐ糸電話
もしかしたらあの人男かも知れん
雑音をドンキホーテが追いかける
王様の耳に雑音届かない
雑音も時には欲しい淋しい日
雑音を避けて写経の無我に居る
過疎に住み雑音遠く生きている
勝負事淡泊故にいつも負け
あつさりと貸してひっこく取り立てる

由多香 艶子 風花 道子 真一 雄々 以和万津 小生 螢 ヒロ子 清子 登美 和雄 柳伸 太郎 郁夫 重人 千里 志華子 ルイ子 忠昭 栄子

あつさりと茶漬けが欲しいフルコース
あつさり負けると悔しさ残らない
あつさりと妻に同調して平和
ざるそばで午後のファイトは養えぬ
傷口をあつさり洗うコップ酒
額いて満足そうに愚痴を聴き
生きている笑みも涙もよくこぼし
はち切れる若さ笑顔こぼれ出す
反省でこぼした涙糧にする
自分でも愚痴が増えたと自覚する
十円で掌からこぼれる願いごと
只今の泥んこにママこぼす愚痴
両の手にこぼれるほどの愛を抱く
下心秘めてお世辞がにじり寄る
ああでもないこうでもない過ぎてゆく
稲刈りが一番似合う千枚田
九条の礎となる彬の碑
有難うの姿になって老いてゆく
退院間近病院食にあきて来る

昌紀 祥昭 弘風 東吉 楓楽 柳弘 とし子 直子 なぎさ 弘子 勝弘 寿美 章久 集一 尚士 たもつ ダン吉 洋的 見清報 庸佑 重人 啓生 慶子

あつさりと茶漬けが欲しいフルコース
あつさり負けると悔しさ残らない
あつさりと妻に同調して平和
ざるそばで午後のファイトは養えぬ
傷口をあつさり洗うコップ酒
額いて満足そうに愚痴を聴き
生きている笑みも涙もよくこぼし
はち切れる若さ笑顔こぼれ出す
反省でこぼした涙糧にする
自分でも愚痴が増えたと自覚する
十円で掌からこぼれる願いごと
只今の泥んこにママこぼす愚痴
両の手にこぼれるほどの愛を抱く
下心秘めてお世辞がにじり寄る
ああでもないこうでもない過ぎてゆく
稲刈りが一番似合う千枚田
九条の礎となる彬の碑
有難うの姿になって老いてゆく
退院間近病院食にあきて来る

もくせい川柳会 江見 見清報

核心に迫ると固く結ぶ口
密約を結んだらしいししおどし
弱虫ののび太励ますドラエモン
湯につかり虫の声聞く秋夜長

結び目がほどける夫婦増える世だ
つぎの世も女に生れ恋しよう
重い荷を下ろし夫の軽い靴
ノックしてこだま返らぬ子供部屋
友の心三年ぶりにノックする
ゴミ出しは夫の仕事に定着し
かぐや姫青い地球にお戻りを
職を退くこ苦母さんのシャクトリムシ
官と民裏で結んだ黒い金
もういいかい月の滴がノックする
職を辞し庭にも虫が居ると知り
くされ縁結ばれた一生同じ屋根
何んで泣く何んちゅう国やこんな国
年一度手書き賀状でノックする
逆境に流した汗が実を結ぶ
人類をノックアウトにするいくさ
ひらがなを書く心が丸くなる
浮気の虫理性にいつも駆除される
生き様も書体に見えるかすれ方
ノックせず入れる家のありがたさ
その顔で今日もゆくかと問う鏡
点滴が生きると命ノックする
結ばれた絆すれた日に涙
欲深い人のハカリを見てしまふ
害虫も益虫もいて地球の子
ネクタイを結び草に老いを知る

タミ 寿美子 美智代 早人 佳恵 千代 巴子 勇治 萬的 十八娘 見清 都代子 久太郎 千津子 幸雀 求芽 宇乃子 寅次郎 玲子 比ろ志 美義 知香子 満寿巳 肋骨 則彦

すみよし川柳会

岩崎

公誠報

要点をつい聞きもらし再試験

夜もふけてサイレンの音胸さわぎ

しつかりと聞いた法話をもう忘れ

耳貸しただけで感謝をさされている

幸せな耳で悪口聞こえない

左から聞いたら右へ抜けてゆく

社保庁の聞けば呆れる無能振り

同じこと何度も聞いて叱られて

聞き役に徹しストレス溜めている

相植をかあるく打って聞き役に

寝たふりの耳はしつかりロバの耳

妻の耳話次第で遠くなる

よく聞けば僕に半分非があつた

大臣のごめんなさいは聞き飽きた

なんぼしたおぼはんきつと聞いてくる

聞いてても知らん振りする処世術

悩みごとあるなら聞こう金以外

無人駅ボクの行先風に聞く

飢えたこと時々孫に聞かせる

聞かたびにはなし段々纏れだす

城北川柳会

伊達

郁夫報

憎いけど酒で仏に成る家路

見限った恋に幸せあつたかも

悔い一つ消えてしまった青い空

スパイスは日々の暮しの句読点

生返事に辛子たっぷりつけてやる

スパイスの効いた啖呵で切り返す

只一人座る幸福観覧車

今やつと幸せ駅を通過中

總足のように履いてる黒い靴

病院に通える内は大丈夫

使えない終身保険かけている

お招きがネクタイ締めて来いと言う

ペンキ塗らたでなんです棘を立てています

予定ない日の大の字もいもんだ

秋探し変る生駒の山の肌

お土産はお守りひとつ伊勢詣

忘れても忘れなくてもいい葉

ここにことコントロールした怒り

黒幕が筋書き書いた政治劇

ふいに来てお茶も飲まずに帰る父

割り勘にすると個性が顔を出す

大屋根が空を鋭く切り分ける

大空を屋根に構えている野心

雨音が子守歌だったトタン屋根

十指では足りぬ悔いあり老い生きる

酒癖がきつちりみやげ提げて来る

酒飲むとみんな美人に見える

言い勝つて少し悔いてる夜の道

志華子

東吉

一歩

順三

章久

ひさ乃

昭子

容子

千里

弘風

ますみ

美智子

桂作

倫子

求芽

ルイ子

正

和夫

集一

明子

とし子

麗

千歩

典子

修

支えあい肩を寄せ合う低い屋根

嫁姑接着剤となる夫

川柳さんだ

北野

哲男報

支えあい肩を寄せ合う低い屋根

嫁姑接着剤となる夫

朝子

喜美子

朋月

二英

光久

順子

茂山

歳子

一泉

好文

好文

紀乃

美紗子

哲男

キヨミ

哲夫

忠

正和

照彦報

節子

由紀子

重忠

睦子

睦子

睦子

目標の坂一つ越えひと休み
坂の上登って見ればよくぞ来た

私は反対へ行く赤トンボ
西の風風は東で勇みたつ

反対の向うにやるせない涙
許しても反対してる腹の虫

一徹な父だが反旗振られない
円陣を組む反対の中にいる

道迷い反対方向まっしぐら
反対を唱えた勇氣左遷され

反対ですけどどうぞご勝手に
宗教も政治も消せぬキノコ雲

蜘蛛よりも大きな網を張っている
庭歩き蜘蛛に投網をかけられた

雲間から月が見ていた露天風呂
吾が頭脳蜘蛛の巣はったガランドウ

雲一つない大空に手を伸ばす
我が狐場蜘蛛も必死で日々守り

あの時は桃の蕾も固かった
あの時の恩返しです機を織る

あの時のたつた一言心染む
暴動から母と必死で逃げ回る

あの時のくやしさが有り今が有る
あの時は二枚今はイケメンか

輝いたあの時のよう走りた
孫の雲いつもアンパンマンになる

和子
美津恵

完司
石花菜

康子
喜美子

かつみ
萩江

貞子
風露

瑞子
次男

螢
和枝

龍枝
泰輔

賀寿恵
日出子

よしえ
鬼一

勝誉
みちる

悠子
裕子

醉芙蓉
照彦

堺川柳会

河内 月子報

一札をして球場を出る球児
産んでくれ産まれてくれてありがとう

半分は貴方が耐えて今日の幸
日本より貧しい国の厚い礼

親しみと思ひこんでる無礼者
酔っていたことしておく無礼講

半分は神に預けている明日
婚礼も葬式も着る同じ服

お礼まだ言うてへんのに母が逝く
バイキングの礼儀見ている白い皿

行きずりの善意にあつく礼を言う
同じことしても兄貴はしかられる

片腕と信じていたが寝返られ
相棒が笑わないからやりにくい

お日様に礼いうように稲穂垂れ
すかたんの入れ知恵もろてすてんでん

スロートンポで十六夜の月澄み渡る
女性には体重聞かぬのが礼儀

衣食住足りて忘れたありがとう
スピードに命をかける砂時計

母親の言い分ばかり聞く夫
半分の値打も知らず捨てる本

ほほ笑みを返してくれる礼でいい
妻の愚痴半分ほどは聞いている

倅子
五月

半銭
和夫

時雄
好

みつこ
朋月

扶美代
りつえ

篤子
としお

伸子
公誠

像山
冬虹

八千代
さくら

鐘造
雅明

玄也
日の出

千代
かりん

お日さまへてる坊主ありがとう
上席は揺るぎもしない無礼講

一日の半分母の看護です
最敬礼お詫びの顔の裏を読む

喧嘩して泣く子にわけを聞くばかり
僕自身半分はとけ半分鬼

あかつき川柳会
山本 柳昌報

もう間近二の丸の庭彬の碑
猫の額で雑草の自己主張

やさしさを見透している禅の庭
指先があつと感じた水の冷え

ゲーム器で指のリハビリしています
技藝天指先までが馨しい

三つ指をつけてニッコリ別れましょ
大殺界ですよと人を煙にまく

履歴書をまた焼いている煙たな
硝煙の国に九条届けたい

うまく泳いでたのに金で躓く
腕一つ泳がせている夜の厨

泳がせておこう慰謝料増えそうだ
泳いでる顔は平行四辺形

ニートにはニートの泳ぐ海がある
口下手と狡く泳いでいる男

小さくなった身に大きな税
両党首あうんの呼吸乱れけり

惠勇
潤子

舞夢
喜子

綾乃
天笑

卓
正

たもつ
美智子

東吉
克己

賢子
蕉子

明子
ダン吉

ルイ子
富美

見清
義

たつお
勝弘

シマ子
明水

競い合い対決せず去つて行く
 メイドインジャパンも信用できないぞ
 飽食の裏で偽装というお化け
 百日紅の心根彬碑を祀る
 雑草の庭にも深い秋の色
 鯛にも背骨一本通つてる
 デッサンの通りにならぬ子の自立
 指編みで義母のマフラー喜ばれ
 指先で億が動いている世界
 雲の上泳げば八双釈迦に遭う

翠洋会 谷口

病室の窓から月が語りかけ
 人間ドック赤紙いつか届きそう
 献血に若者並ぶたのもしき
 病む友に重い受話器で聞く経過
 点滅の命白寿を前にして
 七分粥天声人語読んでいる
 病む母が居たこの部屋も空になり
 高官の墮落国病み民が病む
 病人同士自慢のように話し合い
 吐く息も吸う息もみな満たされる
 歳時記に真面目な祖母の庭いじり
 合格を息を殺して待つ電話
 冷えた手を温めてくれた母の息
 秋はストンとノートは白いまま
 とぼとぼでよし真つ直ぐに歩くなら

紀雄 尚士 朝子 柳弘 柳昌 保州 ゆうこ 美世子 美花 一步 義報 日の出 舞夢 蕉子 理恵 千梢 昭 さと美 春 集一 正雄 捷也 桃花 千歩 楓楽

とぼとぼと歩きたくない走りたい
 とぼとぼと歩けば人の情けあり
 足弱になつてふる里遠すぎる
 歩いて来た歩幅は今も変わらない
 青空に雲のペンキで文字を書く
 瘦身どっこいしゃあしやあ百二歳
 我が家宝鑑定されぬうちが華
 錦秋の美に酔つている絵の具皿
 ミシユランが日本料理を査定する
 献立に自信過剰の骨密度
 脳トレの本を枕に昼寝中
 あれがあの子のSOSだったかも
 新聞の隅にたまには良いニュース
 折角ののれんを棒にふる短気
 痩せても枯れてもと思うことがある

水昇 茶々 照子 孝一 満作 れんげ げんせい 志華子 叡子 すみ子 富子 恭昌 尚士 久峰 義

第一〇四回 大阪川柳の会

日時 2月4日(月) 17時開場
 会場 大阪市北区梅田第2ビル5階
 生涯学習センター第一研修室
 宿題 各題2句・18時出句締切・席題なし
 ▽遠い・黒嶋海童選 ▽やわらかい・中
 田たつお選 ▽壁・前たもつ選
 ▽お茶・磯野いさむ選
 会費 千円 欠席投句(会員のみ) 2月2日
 〒532 005 大阪市淀川区新北野1-3-4 706
 本田智彦

潜函病

阿萬萬的

潜函病と云うのを御存知ですか、例えば
 潜水夫などが、急に浮上して圧力の加わつ
 ている潜水服を脱いだとき、たちまち病氣
 を起して倒れてしまう。これなのです。
 私達の体を絶えず一気圧、即ち二平方セ
 ンチ当り一キログラムの大気圧を受けて、
 内と外とのバランスをとっている。だから
 何の異常も感じないのだが、このバランス
 がくずれたとしたらいろいろな故障を起こ
 してくることになる。
 だから潜水夫が水中にもぐるときは潜水
 服の内と外との圧力の均衡を保つために圧
 縮機で空気を送り込んでやらねばならな
 い。浮上するときには少しずつ減圧して一
 気圧になったとき服を脱がせるのだが、急
 に圧力を減らしたとしたら、血液などの中
 に溶けこんでいた高い圧力の空気が急に泡
 になつて発生し、血管を塞いで血栓病など
 になるのである。

汚職潜行もとに戻るにひまがいり

萬的 「科学のたむこと」より

柳界展望

○せんりゆうぐるーぶGOKEN第2回川柳大会は170名の参加を得て10月21日に開催された。本社同人の特選句は次の通り。

こめかみに触れるちいさ
い水の音 木本 朱夏

○第30回神戸川柳大会は、10月21日、兵庫県民会館にて開催。出席106名。同人の受賞。

神戸川柳協会賞

もう誰もいないが柿は生
り続け 亀岡 哲子

○川柳グループ草原五周年

の集いは、京都市立北文化
会館で10月25日、141名の参
加により開催。同人の秀句。

がんばっていると桜にま

た会える 新家 完司

○11月3日、尼崎ザ川柳は
尼崎市総合文化センターに
て開催。同人の天位。

明日被る仮面を準備した
余裕 両川 無限

笑っても泣いてもやがて
無に還る 両川 無限
友達をいつばい作る丸い
鼻 両川 無限

○第57回川柳塔みか月川柳
大会は11月25日、鳥取市鹿
野町山紫苑で開催された。

参加者は160名。当日の同人
受賞者は次の通り。

〈鳥取市長賞〉
てのひらはてのひらが好
き握手する 新家 完司

〈ふるさと鹿野賞〉
反響の高さに山が崩れ出
す 野口 節子

なお、みか月会員に贈られ
る多句入選者に中原みさ子
さん(同人・鳥取市)が選
ばれ、ジゲ起こし推奨知事

訪問記念杯を授与された。

○第23回藝誌上大会で中塚
礎石氏(同人・相生市)が
次の句で天位を獲得。

会者定難すべて約束こと
の中

なおこの句は5月24日、笠
岡市古城山公園で句碑とし
て建立される。

▽出版△

太田扶美代さん(理事・藤
井寺市)はなにわ柳壇百句
記念として川柳句集「アイ
スクリーム」を発刊。B6
版64頁。

▽同人動向△

○池森子さん(理事・富田
林市)は文化活動の功績に
より、富田林市から11月3
日教育文化功労賞を授与さ
れた。

○第四回鳥根県民文化祭
散文の部で、小川注湖氏
(同人・松江市)が金賞を
獲得、題名は「川柳の肉声

新同人紹介

吉よ 村むら 久仁雄

推薦者―楓楽・敏

松まつ 村むら 里り 江こう

推薦者―天笑・美籠・正雄・朋月

が語る大戦」

○第27回川柳塔みか月川柳
大会出席のため、11月25日
天笑主幹・楓楽理事長他5
名鳥取県鹿野町行。

▽訂正とお詫び△

12月号16頁下段10行目、
辛棒→辛抱。84頁下段13行
目、林昭之→林昭三。

▽新誌友紹介△

東京都	高岡	弥生	奈良市	岩本	浩二
紹介者	西出	楓楽	紹介者	米田	恭昌
紀の川市	北山	絹子	宝塚市	宮川	俊子
和歌山市	吉川	孝子	紹介者	奥田	みつ子

紹介者(右2名)木本 朱夏

岸和田市 上田 直正
岸和田市 田中実枝子
岸和田市 前田 啓子
岸和田市 田口 秀子
紹介者(右4名)井伊 東吉

羽曳野市 宇都宮ちづる
紹介者 徳山みつこ
鳥取市 野田 和

紹介者 上田 宣子

せりゅうくらぶ 翔 5周年記念集会

日時 3月1日(土) 午前10時半開場
場所 石水苑2F (JR亀山駅徒歩5分)

会費 1,000円 合同句集呈

第1部 事前投句「浮く」宮村 典子選
当日句 翔ルーム選者各氏 共選

「顔」 森 勝子 (詩人)

本城 恵美 (歌人)

前田 照子 (俳人)

「手」 鬼 香 (郷土史研究家)

久野 陽子 (児童文学作家)

植原富美子 (小説家)

第2部 当日句

「怒る」浅利猪一郎 (川柳きぬうら)

「ちらちら」竹内ゆみこ (川柳 草原)

「飛ぶ」川上 大輪 (川柳塔社)

各題2句 締切12時 披講13時半

懇親会 会場・関ロッジ 会費四千元

事前投句 〒519-0106 亀山市みどり町

3-6 大野たけお宛 締切1月31日(休)

- ▽常任理事会△
12月7日(金)、出席16名
- ①各地川柳会代表者会
 - ②高野山川柳塔碑合祀祭報告
 - ③部長連絡会審議事項の報告
 - ④定例確認事項(各地川柳大会の状況・川柳塔誌新刊残数の確認)
 - ⑤各部報告事項
 - ⑥次月度審議事項
 - ⑦その他。
- 次回1月7日(月)10時

平成20年度
川柳塔誌発送日

十二	十一	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一
月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月	月
二十											
七日											
(土)	(木)	(月)	(土)	(水)	(土)	(金)	(火)	(土)	(木)	(水)	(土)

第57回 西大寺会陽川柳大会

とき 2月24日(日)

午前11時30分投句締切り

ところ 西大寺ふれあいセンター

会費 1,500円(作品発表誌、記念品呈)

※各題2句吐、読み込み可

※各題特選3句、佳句5句呈賞(岡山県知事賞他)

兼題と選者 「旅」 新家 完司選

「冬」 古谷 恭一選

「初めて」 河内 月子選

「愛」 大森 昭恵選

「棒」 木下 草風選

「瞑想」 福力 明良選

「蓄」 今井 奎子選

席題(当日発表) 小林 一馬選

付記 あなたの雑詠一句をお持ち下さい。
発表誌に載せます。

主催 西大寺川柳社

後援 岡山県・岡山県教育委員会・岡山市他

協賛 西大寺会陽奉賛会他

第17回 播磨文芸祭川柳大会

とき 2月24日(日) 11時開場

ところ 姫路文学館講堂

姫路市山野井町84 TEL079(293)8228

兼題 各2句 締切 12時50分

「疼く」 長島 敏子選

「分身」 矢沢 和女選

「髪」 前田美巳代選

「座る」 西出 楓楽選

「雑詠」 森中恵美子選

お話し「時事吟の魅力～私と時事吟」

講師 川柳瓦版の会・運輸世界新聞川柳会

代表 前田咲二氏

会費 1000円 欠席投句拝辞、席題なし

賞 各題秀句(3句) 佳作(5句) 呈賞

会場に昼食設備がありません

主催 姫路文学館

明けましておめでとうございます

竹原川柳会

平成二十年 元 旦

〒725-0022 広島県竹原市本町1丁目14-3

小 島 蘭 幸 方

会 監 会
計 査 長

山	石	森	福	古	古	三	岩	時	小
内	原	井	島	田	谷	宅	本	広	島
房	淑	菁	万	太	節	不	笑	一	蘭
子	子	居	年	虚	夫	朽	子	路	幸

ほか
会員
一同

あけましておめでとうございます

平成二十年 元旦

堺川柳会

源河河柿奥荻大大太太大榎榎岩稲石河
田内内花野橋谷田田久保本本崎川堂内
八康月和時像鐘篤扶と伸舞日の公惠潤天
千浩子夫雄山造子代しお子夢の出誠勇子笑

川長西西西中中中中中富徳遠津高志齋小
西谷村内野崎川井井山山山守木田藤寺
真り朋健深アルみ唯な世千さ竜
澄彰つえ月吾雪楓萌キイ子こ教なさ紀代くら之介

和米山矢矢八元村宮升伏藤日樋原
田澤本野倉木永上本成見田野口
つ俣半五侑雅玄かり雅泰冬清
づ子錢梓月子子也ん好明子愿虹晋

新年おめでとうございます

西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日午後1時 西宮市立中央公民館
(阪急電鉄神戸線西宮北口下車南出口徒歩3分)
プレラにしのみや4F

事務局および投句先

〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子

川河亀片小小緒白岩石井浅秋阿奥西
島井岡山倉熊方井倉原上野元萬田口
諷庸哲 江悦二キ歳松房て萬みついわ
云児佑子忠藍美子英子子煙子る的子ゑ
長富都坪辻田田住小黒蔵久木北菊河
浜山倉井 辺中谷林田田田村野池原
美ルイ求孝開鹿章石わ能光千貴哲ト折
籠子芽一子太子舟こ子子代子男トミエ杭
山山山山丸松牧堀古藤春春林長西七
本田崎口山下測 川本城城 谷川内反
義婦君光一比富正奮 年武昭春朋順
子美子子久之志喜和和水直代坊三蘭月子

献 壽

平成 20 年

第27回“みか月”記念大会に際し、皆様からの温かい御支援
ところから感謝を申し上げます。ありがとうございました。

本年は第28回目の大会の年でございます。
何卒、旧に倍してのご支援をこころよりお待ち申しております。

川柳塔鹿野みか月

会 長 森 山 盛 桜

ほ か 会 員 一 同

※事務局 〒689-0405 鳥取市鹿野町1279 中原諷人方

明けましておめでとうございます
ことしもよろしくお願い致します

川柳塔きやらぼく

会 長 政 岡 日 枝 子

会 員 一 同

事務局 〒683-0845 米子市旗ヶ崎3-12-13

政 岡 日 枝 子

TEL 0859-34-1729

新家完司川柳集 (五)

平成二十年

A 5判・137頁 1,000円+税・送料80円切手2枚
〒689-2303

鳥取県東伯郡琴浦町徳万597 新家完司
TEL 0858-52-2414 FAX 0858-52-2449
Eメール shinke@mx1.tcbnet.ne.jp

あけましておめでとうございます

平成二十年 元旦

香川県東かがわ市白鳥

川柳塔おっぱこ吟社

会長 成重 放任 会員 角尾 いさむ

会計 川崎 ひかり " 辻上 よしみ

顧問 木村 あきら " 山崎 はつ恵

同人 原 賢 " 赤沢 貞月

" 伊勢 八重子 " 中塚 寿々女

" " 田中 弘

明けましておめでとうございます

いずも川柳会

会長 竹 治 ちかし
会 員 一 同

事務局 〒693-0006 出雲市白枝町 4 2 3
伊藤 玲子 方
TEL 0853-23-3200 FAX 0853-23-3201

医療法人社団

湯川胃腸病院

理事長 湯 川 絃 未

大阪市天王寺区堂ヶ芝 2 丁目 10 番 2 号
TEL 06-6771-4861

明けましておめでとうございます

川柳ふうもん吟社

会長 両川 洋々

会 員 一 同

事務局 〒680-0824 鳥取市行徳2丁目632

田中かをる 宛

月例会 毎月第4日曜日 13:00～

JR鳥取駅構内（シャミネ会議室）

4月は吟行会・12月は没句供養大会

福安大江古緒井志鴨指藤河
田達崎見今方上田谷宿井内
満忠侑見堂美津松千瑠千正天
州央子清子子煙代子子雄笑

田山加山松西藤角久池山
中口川本村内井谷田上田
幸不靖加里朋則克千清耕
代動鬼お里江月彦治代治

NHK川柳教室

明けましておめでとうございます

新年賀謹

埃斯シエイ

笑 天 内 河 師 講

中井 萌	津守 なぎさ	高木 世紀子	齋藤 さくら	源田 八千代	荻野 象山	奥 時雄	大谷 篤子	大久保 伸子	榎本 舞夢	榎本 日の出	石堂 潤子
米澤 俣子	矢野 梓	矢倉 五月	元永 雅子	村上 玄也	宮本 かりん	升成 好	伏見 雅明	樋口 冬虹	原 清晋	西村 りつえ	中野 健吾

あけましておめでとうございます

会 洋 翠

谷口 義	高杉 千歩	住谷 石舟	清水 絹子	佐々木 満作	小谷 集一	古今堂 蕉子	奥田 みつ子	岡本 久峰	太田 昭	大川 桃花	榎本 舞夢	榎本 日の出	井上 照子	阿部 茶々	穴吹 尚士	安土 理恵
渡辺 富子	渡部 さと美	米田 恭昌	米田 水昇	横山 捷也	山本 希久子	安永 春	藤井 正雄	原田 すみ子	西出 楓楽	中村 れんげ	中村 叡子	長浜 美籠	天正 千梢	辻内 げんえい	坪井 孝一	津村 志華子

賀正

いのちある句を創ろう

川柳塔のぞみ(銀座句会)
川柳塔のぞみ八王子支部
丘の上川柳会

今年も楽しく!!

① 田口麦彦先生をお迎え
しての勉強会

6月初旬

② 小樽(全道大会)へ行きましょう

7月27日

連絡先 播本充子

TEL 042-665-3172

明けましておめでとうございます

はびきの市民川柳会

会員一同

おめでとうございます

西宮ローズ川柳会

山	山	春	春	西	長	坪	木	菊	亀	小	奥	岩	秋
本	崎	城	城	口	浜	井	村	池	岡	倉	田	倉	元
義	君	年	武	い	美	孝	貴	ト	哲		み	キ	て
子	子	代	庫	わ	籠	一	代	ミ	子	藍	つ	ク	る
			坊	ゑ			子	エ			子	子	

明けましておめでとうございます

川柳塔みちのく

主幹 齊藤 昴

副主幹 小寺 花峯

福士 慕情

相談役 工藤 甲吉

森中恵美子

顧問 波多野五楽庵

岩渕 黙人

理事 櫻庭 順風

佐治氏加子

浅田 隆樹

肥後和香子

田中 叶

監事 相馬 銀波

小枝ふさゑ

會計 相馬 一花

福士 慕情

ほか同人一同

賀正

岸和田川柳会

平成二十年元旦

井伊東吉

長谷川 呂 芳

寺田 甚 一 岩 佐 狸 村

不破 仁 緑 山 本 蛙 さよ子

田口 穰 一 宮 野 本 蛙 さよ子

仲谷 弘 子 小 宮 野 本 蛙 さよ子

中島 寿 海 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

永田 壽 海 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

土橋 守 海 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

森元 房 枝 雪 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

中岡 香 代 堤 林 雪 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

林岡 春 栄 河 越 堤 林 雪 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

三宅 春 栄 河 越 堤 林 雪 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

小林 春 栄 河 越 堤 林 雪 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

小畑 春 栄 河 越 堤 林 雪 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

坪井 春 栄 河 越 堤 林 雪 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

加川 春 栄 河 越 堤 林 雪 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

田原 春 栄 河 越 堤 林 雪 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

軸丸 春 栄 河 越 堤 林 雪 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

西谷 春 栄 河 越 堤 林 雪 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

醉部 春 栄 河 越 堤 林 雪 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

村山 春 栄 河 越 堤 林 雪 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

松村 春 栄 河 越 堤 林 雪 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

木村 春 栄 河 越 堤 林 雪 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

岩城 春 栄 河 越 堤 林 雪 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

奥村 春 栄 河 越 堤 林 雪 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

松村 春 栄 河 越 堤 林 雪 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

林下 春 栄 河 越 堤 林 雪 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

田辺 春 栄 河 越 堤 林 雪 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

山西 春 栄 河 越 堤 林 雪 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

坂内 春 栄 河 越 堤 林 雪 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

河津 春 栄 河 越 堤 林 雪 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

長浜 春 栄 河 越 堤 林 雪 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

美正 春 栄 河 越 堤 林 雪 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

美治 春 栄 河 越 堤 林 雪 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

籠 春 栄 河 越 堤 林 雪 池 小 宮 野 本 蛙 さよ子

明けましておめでとうございます

尼崎尾浜川柳会

都大南小坪加田軸西醉村松木岩奥松林田山西坂河長
倉川 熊井川原丸部谷山村村城村下 辺田内本津浜
求桃全江孝靖宏勝イサミ 亀与子よし江美代子芳月志三太治月美治籠
芽花彦美一鬼一巳

季刊

「川柳展望」

A 5 判
一五二頁

年間誌代 四、九六〇円（年間）

☆見本誌進呈いたします。

茨木市山手台 4-6-3-101
〒567-0009
TEL 〇七二-六四九-五二二六
FAX 〇七二-六四九-二三三四

川柳展望社

謹賀新年

和歌山三幸川柳会

事務局

〒640-8111

和歌山市神通七-一七

TEL 073・423・8930

古久保 和子

主幹	三宅保州
理事長	木本朱夏
相談役	桜井千秀
副主幹	古久保和子
副理事長	喜田准一
理事	田中みね
"	楠見章子
"	川上智三
"	玉置当代

例会 毎月第四土曜日 午後一時
和歌山市勤労者総合センター
(和歌山市役所西側)

明けましておめでとうございます

サークル 檸檬

吉田あずき	山本義子	山本希久子	山口光久	前川たもつ	早川清生	西村哲夫	西出楓楽	西口いわゑ	長浜美籠	鶴田遠野	久保田千代	片岡智恵子	奥田みつ子	大塚節子	太田扶美代	井丸昌紀	浅野房子
-------	------	-------	------	-------	------	------	------	-------	------	------	-------	-------	-------	------	-------	------	------

川柳文学コロキユウム

五周年記念川柳大会

2008年3月2日(日) 11時開場

グランキューブ大阪(大阪国際会議場)

(リーガロイヤルホテル西隣)

事前投句「自由吟」 赤松ますみ 謝選

葉書で2句 締切 2月5日

宿題(各題2句)

「至る」 板野 美子選

「狭い」 井上 一箇選

「視く」 大西 泰世選

「場」 小山 紀乃選

「宇宙」 佐藤 岳俊選

「店」 新家 完司選

「鳥」 徳永 政二選

各題秀句に呈賞

席題 印象吟(選者は当日出席者に依頼)

自宅選。入選句は後日発表)

会費 2千円(発表誌呈)

懇親会 6千円

欠席投句 千円 原稿用紙、2月25日必着

投句先 〒576-0033

交野市私市2-6-8

嶋澤喜八郎

あけましておめでとうございます

川柳クラブ

わたの花

赤木妙子	本田たえこ	脇俊子	杉本晴美	馬場宏	砂田八寿子	井尻民	篠原いっふみ	乾美代子	八倉知佐子	山本宏至	村上ミツ子	吉村一風	生嶋ますみ	松葉君江	平川幸枝
	大内朝子	佐藤美はる	今川孝子	梅原克美	梅原莊治	葭正春	土谷耀一	飛永ふりこ	上田和子	小西博子	松浦愛子	田邊浩三	笠井欣子	寺川はじむ	西川義明

あけましておめでとうございます

南大阪川柳会

会員一同

事務局 〒540-0004 大阪市中央区玉造1丁目16-13-304

前 たもつ ☎ (06) 4304-1338

賀 春

川柳 ささやま 一同

代表 遠 山 可 住

明けてまして

おめでとうございます

熊本川柳会

高野宵草

永田俊子

岩切康子

謹賀新年

富 柳 会

池	河	田	村	古	村	林	久	坂	沢	前	中	大	中	小
他	野	嶋	田	川	山	澄	世	上	田	田	崎	橋	井	野
一	森	彦	伸	千	佳	高	高	淳	和	登	深	鐘	ア	紅
同	子	次	雄	華	子	鷺	鷺	司	子	子	雪	造	キ	紫
			巳代一											朗

謹 賀 新 年

川柳塔まつえ吟社

同人一同

事務局 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22
三島 湍 丘 方
TEL 0852-21-2810

明けまして

おめでとう

ございます

川柳塔

わかやま吟社

同人一同

事務局

〒641-0012

和歌山市紀三井寺

一一一―二

牛尾 緑良

電話〇七三―四四六―二八五五

賀 寿

川柳藤井寺 川柳みささぎ

会員一同

あけましておめでとうございます
鳥取県川柳作家連盟

会長 鈴木公弘
会員 一同

事務局 〒680-0843 鳥取市南吉方3丁目364
安田方 春木圭一郎
TEL 0857-24-2834

川柳ねやがわ

会員一同

会長 山本三郎
事務局 高田博泉

明けましておめでとうございます

尼崎いくしま川柳会

- 例会 1月11日 ■2月以降 毎月第一金曜日 午後1時
■会場 サンシビック尼崎 3階 (阪神尼崎駅西南5分)

明けましておめでとうございます

岩美川柳会

会員一同

〒681-0074 鳥取県岩美郡岩美町網代118-115

山下 蟹郎

TEL 0857-72-0762

「この会は、鶴彬をはじめ先覚川柳人の反戦平和と社会諷刺の精神を現代に生かす」(会則)

あかつき川柳会

川端	一步	加山	勝久
森村	美花	前田	紀男
岩佐	ダン吉	森松	まつお
山本	柳昌		
近藤	正塩	満崎	シマ子
江島	谷勝	弘宮	崎敏

◆鶴彬顕彰碑建立植樹

記念川柳大会

- 08・9・14(金) 13時
- KKRホテル大阪

JR環状線「森ノ宮」10分

・午前中は大阪城公園内で竣工式

〈事務所〉

〒596-1082 4

岸和田市葛城町891-22

岩佐ダン吉方

〇七二・四二八・〇三二五

謹賀新年

川柳大阪

高	長	山	大	玉	塩	中	長	森	森	森	武	川	山	山	手	中	西	火	坊	門	芳	田	
木	井	崎	野	置	満	園	川	松	松	村	田	端	本	崎	村	岡	口	農	野	中	会	同	
信	善	珠	照	重	お	ま	まつ	芳	美	青	一	か	よ	こ	昌	童	楽	醉	太	弘	司	風	同
醉	純	生	月	人	敏	功	司	お	香	花	道	歩	よ	こ	昌	童	楽	醉	太	弘	司	風	同

明けてまして

おめでとうございます

川柳茶ばしら

早川遯行	飯田秀水	片岡文男	関本かつ子	金子美千代	吉田幸子	鶴留百合	板山まみ子
------	------	------	-------	-------	------	------	-------

明けてましておめでとうございます

川柳塔なら

宮口笛生	中原比呂志	米田恭昌	坊農柳弘	大内朝子	吉川寿美	居谷真理子	渡辺富子	安土理恵	飛永ふりこ	森中博一
------	-------	------	------	------	------	-------	------	------	-------	------

会員一同

謹賀新年

川柳おたまじゃくし

助川和美	多田郁子	土橋房枝	堤橋檀代	中岡香代	林力子	原崇善	森元ふみよ	山本蛙城	雪本珠子
------	------	------	------	------	-----	-----	-------	------	------

〒596 0076 岸和田市野田町一―六―二

電話 ○七二―四三八―三三〇八

土橋方

謹賀新年

大阪川柳人クラブ

会員一同

会長 磯野いさむ

副会長 板尾岳人

幹事長 坂本晴美

事務局 上村隆

会計 中川隆充

謹賀新年

城北川柳会

会長 小谷集一
会員一同

明けましておめでとうございます

八尾市民川柳会

会員一同

明けましておめでとうございます
エ イ シ ス 東 大 阪

講師 河 内 天 笑

米	山	三	堀	星	西	中	飛	佐	古	熊	吉	笠	生
田	本	宅		野	川	岡	永	々	手	代	川	井	嶋
水	宏	健	重	き	更		ふ	木	川	菜	寿	欣	ます
昇	至	一	富	ら	紗	妙	り	満	光	月	美	子	み
				り			こ	作					

賀 正

本年もよろしく申し上げます

川 柳 塔 唐 津

山	樋	仁	宗	坂	久	市	岩	井
口	口	部		本	保	丸	崎	上
高	輝	四	水	蜂	正	晴		勝
明	夫	郎	笑	朗	剣	翠	實	視

岸	大	小	岡	大	大	榎	榎	井	石	岩
田	谷	倉		久	川	本	本	丸	丸	崎
幸	篤	ヒ	文	保	桃	舞	日	昌	正	公
子	子	口	香	伸	花	夢	の	紀	太	誠
				子			出		郎	
	山	宮	松	西	中	鶴	坂	澤	古	橋
	本	本	井	村	井	田		田	今	川
	半	かり	明	り		遠	裕	定	堂	俊
	銭	ん	江	つ	萌	野	之	子	蕉	夫
				え					子	

すみよし川柳会

謹賀新年

大 阪 川 柳 の 会

事務局 〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4-706 本田智彦 方
TEL (06) 6303-7297

坂 本 晴 美	板 尾 岳 人	大阪川柳人クラブ	吉 村 雅 文	安 井 英 華	森 口 美 羽	本 田 智 彦	藤 井 満 洲 夫	濱 田 良 知	内 藤 光 枝	竹 森 雀 舍	坂 本 和 樹	岡 良 三	碓 氷 祥 昭	足 立 淑 子	世話人	磯 野 い さ む	代 表
------------------	------------------	----------	------------------	------------------	------------------	------------------	-----------------------	------------------	------------------	------------------	------------------	-------------	------------------	------------------	-----	-----------------------	--------

明けましておめでとうございます

京 都 塔 の 会

会 員 一 同

山 門 夕 ミ	宮 田 肋 骨	藤 井 則 彦	広 島 巴 子	野 島 満 寿 巳	中 内 久 太 郎	都 倉 求 芽	辻 川 和 子	玉 置 英 子	住 谷 石 舟	坂 上 高 栄	久 保 田 千 代	河 津 寅 次 郎	粕 屋 都 代 子	小 川 佳 惠	上 村 玲 隆	岩 崎 玲 子	荒 卷 尚 夢	穴 吹 尚 士
安 永	松 下 比 志	松 尾 美 智 代	早 泉 早 人	中 村 十 八 娘	富 田 美 義	辻 川 慶 子	玉 置 重 人	谷 川 野 字 乃 治	神 野 啓 生	源 田 知 香 子	岸 田 庸 佑	河 井 郁 子	檉 谷 清	江 見 見 清	上 嶋 幸 雀	安 藤 寿 美 子	阿 萬 萬 的	

あけましておめでとうございます
もくせい川柳会

明けましておめでとうございます
今年もよろしくお願い致します

川 柳 塔 社

主 幹
理 事 長
副 主 幹
副 理 事 長
常 任 理 事

河 内 天 笑
西 出 楓 楽
小 島 蘭 幸
村 上 玄 也
山 本 希 久 子
穴 吹 尚 士
籠 島 恵 子
河 内 月 子
木 本 朱 夏
鶴 田 遠 野
西 内 朋 月
松 原 寿 子

井 伊 東 吉
鴨 谷 瑠 美 子
川 端 一 歩
黒 田 能 子
長 浜 美 籠
坊 農 柳 弘

川柳塔社常任理事会

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 さんだ	15日(火)午後1時より 墨・見事・わくわく・「自由吟」	三田市中央公民館 〒669-1515 三田市大原1553-12 北野哲男
岸和田 川柳会	19日(土)午後1時半開会 永遠・追い越す・快活・キープ	岸和田市立福祉センター 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
岬川柳会	20日(日)午後1時半締切り 初春・予定・注文	(淡輪17区集会所)元(ふれあいセンター) 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川柳 ねやがわ	20日(日)正午締切り 幸福・富士・礼状・(三題のみ)	寝屋川市市民会館 4F 京阪寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川柳 藤井寺	20日(日)午後12時から15時 鬨斗・わらう・福	新年句会=和楽心 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
八尾市民 川柳会	20日(日)午前11時開場 美人・雑詠	近鉄大阪線河内郡分駅下車改札集合・送迎バス乗車 AM10:00集合 会場=サンヒル柏原 TEL 0729(72)3377 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
もくせい 川柳会	21日(月)午後1時50分締切り 泊る・建前・やれやれ・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曾根西町2-8-4 江見見清
川柳クラブ わたの花	25日(金)午前9時半から 犬・精・力・友・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川柳 同好会	26日(土)午後7時締切り ゲスト・洗う・時計・恩	東大阪市立社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
和歌山 三幸 川柳会	27日(日)午後1時から 新年句会 筆・進む	県民文化会館 6階 レストラン フロラリア 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子
はびきの 市民 川柳会	27日(日)午後2時締切り 酒・ほめる・きっぱり レストラン	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうも 吟社	27日(日)午後1時から ズタズタ・まさか・名門	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0824 鳥取市行徳2-632 田中かをる
南大阪 川柳会	28日(月)午後6時から 門・とぶ・ちぐはぐ・雑詠	住まい情報センター(大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都 塔の会	28日(月)午後2時締切り あやかる・直す・今昔	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

1 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
富柳会	5日(土)午後2時締切り 土・澄む・自由吟	富田林市中央公民館 11:30 集合 新春句会(会場は別) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉吉川柳会	5日(土)午後2時締切り ほんのり・くどくど・拝む	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔唐津	7日(月)午後1時半から 騒ぐ・コント・卒業	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
尾崎川柳会	8日(火)午後2時締切り 福・生きる・自由吟	尾崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0953 尾崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほたる川柳同好会	8日(火)午後1時半締切り 最初・響く・それから	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川柳塔なら	10日(木)午後1時から 願う・寿・発車	奈良市立中部公民館4F(近鉄奈良駅④出口徒歩5分) 〒639-0251 香芝市逢坂2-720-20 大内朝子
尾崎いくしま	11日(金)午後2時締切り 拝む・干支(十二支) 雑詠(A・B)	サンシビック尾崎3F 阪神尾崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尾崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
堺川柳会	11日(金)午後2時締切り 毎日・読む・「いわき(折句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
城北川柳会	12日(土)午前11時半開場 1時締切り 愛・祈る・スタート・自由吟	新年句会=神徳会館(地下鉄「千林大宮駅」②番出口) 大宮商店街西へ5分(神徳温泉裏) 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
川柳塔みちのく	12日(土)午後5時半締切り 寄付・髪・忠告	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉宮元53-1 小寺花峯
川柳塔打吹	12日(土)午後2時締切り 紙・紫・届く	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川柳塔まつえ	12日(土)午後2時締切り ねずみ・箸・お年玉・夢	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島松丘
川柳塔松露川柳会	13日(日)午前10時半から ねずみ・正月・雑詠	神奈備会館(1月のみ) 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
川柳塔わかやま	13日(日)午後2時締切り 任せる・元気・はらはら 「文房具」	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口川柳会	14日(月)午後1時から 願い・訪れ・リーダー・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子

編集後記

☆明けましておめでと〜ございませう。今年もよろしく
お願い申し上げます。

川柳雑誌の内容の充実を目指して、新年号から麻生路郎師の句を紹介することにしました。句集「旅人」の普及版からの転載です。

川柳塔の始祖麻生路郎師の川柳や語録を通じて、川柳塔の川柳を少しでも知っていただけたらと思います。

大正13年2月「川柳雑誌」創刊号で麻生路郎師はこう述べています。
「現代人の思想にびつたりと触れた詩と云へば川柳の外にはない、我等は此の川柳によって人生を的確に批評していききたいと思う。人間味のびちびちとしたところを躍動させる短詩型と

しては我が川柳に勝るものはない。我等は此の川柳によって後人と語らんとする欲びをもっているものである」

☆大阪市中央図書館には「川柳雑誌」が創刊号からそろっており閲覧できるの
で、書き留めたり、コピーしたりしています。折に触れて紹介していきたいと思っています。

☆今年は十二支の第一番目の年です。
12年前の川柳塔誌1月号からねずみの句を拾ってみました。

天井のねずみは仲がいいらしい
紀美代
鼠算ほどにはゆかぬ春財布
美佐子
ネズミ捕るたびに飼ひ猫
叱られる
南奉
子年の1年どうか災害の
少ない平穏な年であります
ように。

（希）

時事川柳の魅力

水引いて誰を憎もう泥流す
麦彦

ケータイがなければきみら何
をする
幻四郎

私が川柳に魅せられたきっかけは、社会風刺と時事批判をユーモアで包んだ、新聞の時事川柳欄であった。時事川柳は忘れられる文芸と言われるが、時代を超えて人の心を捉える先達の名句が多い。
あの博士今度は民主主義を売り
路郎
時事川柳というジャンルを、大事にして行きたいと思っている。
（喜田 准一）

ひとこと

★お元日 日本人の目の黒
年8・9月合併号の俳誌
さ 薫風 『あざみ』の記事である。
★汝が胸の谷間の汗や巴里
をもじって「校正長るべし」
祭（楠本憲吉）の句は「あ
る雑誌で、この「汗」が誤
植で「汁」になっていて、
それを讀んだ「青玄」主宰
の伊丹三樹彦先生がすぐ楠
本先生に報せて「汁の方が
リアルで面白い。素晴らし
い誤植だ！」と二人して大
笑いしていたいそう感心され
たらしい。これは平成18
年8・9月合併号の俳誌
さ 薫風 『あざみ』の記事である。
★論語の「後生畏る可し」
をもじって「校正長るべし」
はある……ということらしい。
★編集長以下誤認、ならぬ
五人の編集員が、目を皿に
して誤植のないように努め
ているが、残念ながら「首
から三つ」ところではない。
誤植を無くすためにご協力
を仰ぎたい。原稿は楷書で
正確に、濃い鉛筆やボール
ペンでお願いします。（朱）

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(3月号)

地名

都道府
市

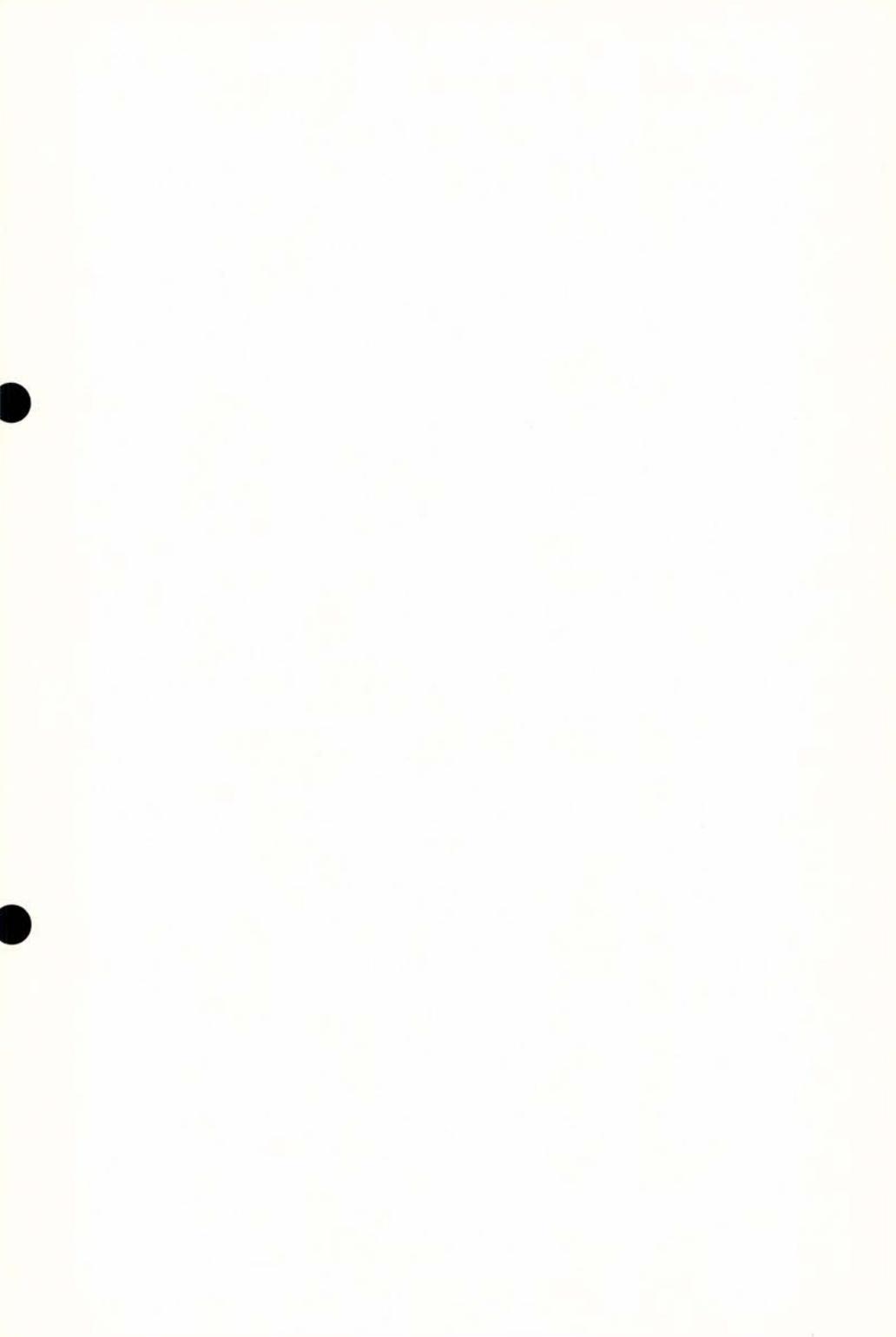
姓
雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201



檸檬抄投句用紙

「欠ける」 (1月15日締切)

3月号発表

西口いわゑ 選 — 共選 — 鈴木 公弘 選

B A

--	--

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

地名

市都
道府
姓雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



本社 1 月 句 会

と き 1月7日(月) 午後1時開場・2時締切り
 ―開催時間、締切り時間に―注意下さい。
 と ころ アウイーナ大阪 4階 金剛
 天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
 十九年度初歩教室年間賞表彰式を行います
 おはなし
 席 題 「 (各題2句以内) 都 倉 求 芽 選
 兼 題 「そして」 安 土 理 恵 選
 「男」 北 野 哲 男 選
 「愉快」 津 守 柳 伸 選
 「ダブル」 海 老 池 洋 選
 「始発」 西 出 楓 選
 会 費 1000円 投句料 500円(切手可)

作 品 募 集

3月号発表(1月15日締切)
 川柳塔(8句) 河内天笑選
 水煙抄(8句) 西出楓選
 愛染帖(3句) 新家完司選
 檸檬抄「欠ける」(2句) 鈴木公弘共選
 (西口いわゑ)
 一路集(3句) 小寺花峯選
 「驢」 宮尾みのり選
 「コント」 山本柳昌選
 「卒業」 三宅保州担当
 「パン」(3句) 三宅保州担当

本社 2 月 句 会

7日(木) 午後1時から
 兼題「だらだら」「情」「迷う」
 「クイズ」「留守」

檸檬抄「横文字」
 一路集「始める」「腕」「ゴルフ」
 初歩教室「それから」
 4月号

第26年度 夜市川柳募集

選 第8回「駅」木下草風選
 ハガキに3句 1月末日締切
 投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
 河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにご利用いたします。

定価 八百円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇〇八年(平成二十年)一月一日発行

発行人 河内 權 治

編集人 山本 希久子

印刷所 美研アートの

大阪市天王寺区大道一四一七

〒543-0052 花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話 〇六・六七九三三四九〇番

振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

川柳募集

「ごま」にまつわる

あなたならではの

一句を募集します。

・兼題

「ごま」川柳塔社主幹 河内天笑 選

・応募要領 郵便ハガキに2句、郵便番号、住所、

氏名、電話番号を明記してください。

入選20句、準特選2句、特選1句に賞品

・発表

本誌4月号にて発表いたします。

・締切り

2008年1月31日(当日消印有効)

・投句先

〒543-0052 大阪市天王寺区

大道1丁目14番17号 花野ビル201号室

川柳塔社 ゴマ川柳係 宛

手作りの味わいに

こだわり続けて五十余年

オニザキの

すりごま



株式会社 オニザキコーポレーション
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL ☎ 0120-30-5050

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保健取扱 看護2A・緩和ケア病棟

・消化器科・内科・外科

診療時間

・放射線科・ホスピス

月～金 8:30～16:00

・デイサービスセンター

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪(06) **6771-4861**(代)